

— 目 次 —

〈イエイツ生誕 150 周年〉第 51 回大会講演

『ジョン・シャーマン』とイエイツの内なるスライゴー……………	栩木 伸明	3
--------------------------------	-------	---

〈イエイツ生誕 150 周年〉記念論文

W. B. Yeats をめぐる代表的な論争の概観

— 可能性の中心としての不確実性 ……………	山崎 弘行	17
------------------------	-------	----

論文

「沈黙」の後に — イエイツと第一次世界大戦再考 ……………	荒木 映子	37
--------------------------------	-------	----

研究ノート

W. B. Yeats のユダ観の変遷について ……………	伊東 裕起	55
-------------------------------	-------	----

シンポジウム報告

「イエイツと 1930 年代 — オーデン・グループを参照枠として」

.....	司会・構成	浅井 雅志	
イエイツと 1930 年代 — オーデン・グループを参照枠として	浅井	雅志	59
オーデンの転向とイエイツ観との相互関係	山崎	弘行	62
マクニースのイエイツ評価の揺らぎ	辻	昌宏	65

ワークショップ報告

「イエイツのナショナリズムを問い直す」	司会・構成	松田 誠思	
イエイツのナショナリズムを問い直す		松田 誠思	68
W・B・イエイツと自由国成立後のナショナリズム		諏訪 友亮	70
イエイツと霊媒／死者の声によるナショナル・アイデンティティーの創出 …		木原 謙一	73

研究発表要旨

変容のヴィジョン — イエイツ、シング、ジョイス ……………	坂内 太	77
第一次世界大戦とアイルランド — イエイツの戦争詩再考 ……………	荒木 映子	78
Yeats と聴衆 — ‘Three Songs to the Same Tune’ の改作についての考察	西谷茉莉子	81
<i>A Vision</i> における「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ」……………	伊東 裕起	84
「イニスフリー湖島」に描かれた〈透かし絵〉		
— イエイツと聖パトリックの煉獄巡礼 ……………	木原 誠	86

書評

木原誠『煉獄のアイルランド — 免疫の詩学／記憶と徴候の地点』…………	浅井 雅志	89
杉山寿美子『モード・ゴン 1866-1953 — アイルランドのジャンヌ・ダルク』	佐藤 容子	93

アイルランド文学研究書誌(2015年10月～2016年9月)	96
会計報告	103
第51回大会プログラム	104
編集後記	106
投稿規定	107

『ジョン・シャーマン』とイエイツの内なるスライゴー

栩 木 伸 明

『ジョン・シャーマン』は、イエイツが『オシーンの放浪』を仕上げた後に書いた中編小説です。リアリズムの手法で描いた小説としては、彼が唯一完成までこぎつけた作品で、自伝的な要素を含む恋愛小説です。イエイツがジョン・オリアリーに宛てた手紙に、テーマは「ロンドンへの嫌悪」だと書いていますが、嫌悪の対極にはスライゴーへの強い愛着があります。ダブリン生まれのイエイツは、スライゴー育ちといってもよさそうなほど、幼時以来、母方のルーツの地に長期間滞在しました。長じてからのイエイツはロンドン暮らしが長くなることを考えあわせると、本作の内側では、過去に属する田舎町を恋い慕う気持ちと、現在そのものである大都市への憎しみがせめぎあっていると言えそうです。

今日は、『ジョン・シャーマン』の全文を翻訳してきましたので、さわりの部分を拙訳で吹き替えながら、作品のあらましをご紹介しますと思っています。まずはじめに、この小説を書き上げた後、30年ほどたってからイエイツが書いた詩をひとつ読んでみます。‘Under Saturn’というタイトルは「ふさぎこんで」と訳しました。

わたしが今日ふさぎこんでいるからといって
二度と戻らぬ若い日に失った恋に執着して
身を焦がしているなどと思ってはいけないよ。
君がくれた知恵と安らぎを忘れられるはずなどないのだから。
心は馬になって、今、夢の世界を駆けているけれど
その脇腹に拍車を掛けているのは子供の頃の思い出なのだ。
ポレックスフェン家の不機嫌な老人
君は名前さえ聞いたことのないミドルトン家の人物
わたしが生まれる前に死んだひとなのに
生き生きと記憶に焼きついているイエイツ家の赤毛の先祖
昔わが家に仕えて、力仕事をしていた男のことは聞いているだろう。

スライゴの波止場近くの大道路で、その男がわたしに言った—
いや、言ったじゃない、叫んだのだ—「ようこそお帰りなさって
20 年も経ったもんねえ、帰ってみえるはずだと思ってましたが」
わたしは今、守れなかった子供時代の誓いを思い出している
先祖が故郷と呼んだ谷間を決して離れない、という誓いを。

1919 年 11 月 (*The Poems* 227-228)

この詩は、イエイツ本人がジョージに向かって、モード・ゴンとの恋をいつまでも忘れられないわけじゃないのだと言いつつ、スライゴへの愛着を語っていると見ていい、自伝的な要素の濃い作品です。

この詩を『ジョン・シャーマン』のプロローグとするのには理由があります。まず第一に、作中に出てくる「不機嫌な老人」と「君は名前さえ聞いたことのない」人物はそれぞれウィリアム・ボレックスフェンとウィリアム・ミドルトンです。フィネラン (Finneran, 1969 25) によれば、このふたりを組み合わせるとジョン・シャーマンの伯父のモデルになっているのだそうです。「シャーマン・アンド・ソーンドース商会は船舶手配・仲介業者としては老舗で、古ぼけた建物を事務所にしていました。ソーンドースが先年死去したため、今は独身で年老いたマイケル・シャーマンがひとりで采配を振るっていた」(*John Sherman* 46) という一節を読むと、ボレックスフェン家とミドルトン家が共同経営していた実在の会社の歴史と小説世界が重なってきます。

第二に、後ほど時系列を整理しますが、『ジョン・シャーマン』を書き上げた直後の 1889 年 1 月 30 日、イエイツはモード・ゴンと運命の出会いをしました。これから読む小説にはふたりの対照的な女性が登場しますが、彼女たちは、イエイツがロマンティックな恋愛にはまり込む直前に描いた女性像なのです。

第三に、この詩が書かれる 1 年前の 1918 年 9 月、イエイツは妊娠 4 ヶ月の新妻ジョージに、自分の魂の故郷というべきスライゴ地域を見せてまわる小旅行をしました。ある日、ギル湖を訪ね、イニスフリーを見せようとして手こぎボートを借りるのですが、ついにどの島がイニスフリーか言い当てることができなかった。ギル湖には小島が多いので無理もないと思います。この逸話はジョージのお気に入りになって、後年ひとびとによく語って聞かせたそうです (*Saddlemyer, Becoming George* 186)。『ジョン・シャーマン』には「湖の島イニスフリー」の詩の散文版というべきパッセージが出てきますので、後ほど拙訳で読んでみます。

もうひとつ、詩の最後に地元のひとが投げかける歓迎のひとことを耳に留めておきましょう。小説の中でホテルのウェ이터が、しばらくぶりに故郷を訪れたシャーマンを迎える、「ミスター・ジョン、亡くなられた父上を超える美男になって戻られましたなあ」(*John Sherman* 90) というセリフと時を隔てて響きあっているようです。

ここまですを前置きとしまして、次にこの小説がどんな時期に書かれたかをまとめておきます。

イエイツは 1887 年の夏から秋にかけて、母親の実家があるアイルランド西部の港町スライゴに長期滞在していました。22 歳です。前年に書きはじめた長篇物語詩「オシーンの放浪」の初稿がほぼ完成しています。出世作となるこの長詩は 1 年半後、予約購読者を募って出版費用をまかなう形で、『オシーンの放浪その他の詩』として世に出ます。イエイツは大学へ行かず、ダブリンの美術学校も 1886 年に中退してしまったので、作家として名を上げるより他に生きる道はありません。定職がない若者はかなり困窮していました。

収入が欲しいなら小説を書いてみたらどうか、と提案したのは父親でした。この夏、イエイツは 8 月の 1 ヶ月をかけて『ドーヤ』という短い物語を書き上げました。アイルランド古代の英雄時代を舞台として、孤島に置き去りにされた巨人を主人公とするこの作品は、『神秘の薔薇』に収録される諸作の先駆をなす幻想物語です。ところが作品の完成を父親に報告しても喜んでもらえなかった。イエイツは後年、「小説というのはリアルな人間が登場する物語のことだ、と父に言われたので、わたしはスライゴの記憶とあの土地へのあこがれをこめて『ジョン・シャーマン』を書きはじめた」(*Memoirs* 31) と回顧しています。

イエイツは翌年、ロンドンの自宅で『ジョン・シャーマン』を書きました。1888 年初夏に着手して秋頃には完成し、年末までには加筆を終えたことが知られています。1891 年 9 月、『ジョン・シャーマン』は『ドーヤ』とともに『ジョン・シャーマンとドーヤ』というタイトルの書物にまとめられ、ロンドンの出版社フィッシャー・アンウィンから初版が刊行されました。11 月には第 2 版が出て、発行部数は両方合わせて 2000 部でした。好意的な書評も出て、イエイツは印税を 30 ポンド (40 ポンド、10 ポンドという説もありますが) 稼ぎました。1892 年 (月日不明) には第 3 版が出たものの発行部数は明らかになっていません。今回の翻訳には、手元にある第 3 版 (Ganconagh, *John Sherman and Dhoya*, 3rd ed., London: T. Fisher Unwin, 1892) を用いました。

Ganconagh というのはイエイツのペンネームです。『ジョン・シャーマンとドーヤ』は、フィッシャー・アンウィン社の〈匿名作家叢書〉の一冊として刊行された書物なのです。イエイツ自身の解説によれば、「ガンコナー」とはアイルランド語で「恋を語る者」を意味し、寂しい場所に独居して羊飼いの娘などを口説いて暇つぶしをする怠け者の妖精だそうです。

大扉裏の出版広告によれば、『ジョン・シャーマンとドーヤ』は〈匿名作家叢書〉の10作目です。既刊書のタイトルリストを見ると、小説、短編集、旅行記などを含むシリーズだったことがわかります。

それではいよいよ小説の中へ入っていきましょう。『ジョン・シャーマン』は五部に分かれています。第一部は、「ジョン・シャーマン、バラを離れる」と題されています。主人公シャーマンは、スライゴーによく似た田舎町バラに生まれ育った三十男で、ちょっとしたイケメン。イエイツと同じプロテスタント信徒として設定されています。シャーマンの幼なじみのメアリー・カートンは牧師の娘です。ふたりは長年よい友達でありすぎたため、お互いの間に恋愛感情は育っていません。シャーマンは元来庭いじりが好きな暢気者で、田舎町が性に合っているのに、自分は金持ちの娘と結婚しなくてはならないと思い込んでロンドンへ出ていくわけです。

「第二部 マーガレット・リーランド」には、シャーマンのロンドン暮らしが描かれます。彼は都会的で裕福なマーガレット・リーランドと出会い、なりゆきまかせに婚約します。ところがふたりの価値観は水と油なので関係はごくしゃくしている。マーガレットはシャーマンを都会人に変えようと試みますが、はたしてうまくいくか？ シャーマンは心の底でメアリーに恋心を抱いていたのではないか？ 読者はやきもきさせられます。

「第三部 ジョン・シャーマン、バラを再訪する」でシャーマンはしばらくぶりに故郷を訪れ、メアリーと再会して、自分が彼女を愛していることにはじめて気づきます。

さて、シャーマンには年来のライバルで牧師のウィリアム・ハワードがいます。ハワードは、オックスフォード運動の影響を受けた高教会派ハイチャーチの司祭として描かれています。洒落者で、世慣れた経験と幅広い教養を鼻に掛けている男です。彼は「第一部」の冒頭で、聖職者としては低い地位の「副牧師の臨時代理」という肩書きでバラに滞在していますが、じきにイングランドへ去っていきます。宗教家としてはエキセントリックなところがあるせいで、教区民との間にトラブルが多い

人物です。イングランド各地の教区に赴任しても長続きせず、ほうほうを転々としています。ハワードが教区を追われたと聞いたシャーマンが、彼をロンドンへ招いてしばらく同居するのが「第四部 ウィリアム・ハワード牧師」です。シャーマンはハワードをマーガレットに引きあわせ、ふたりが惹かれ合うようにしむけます。そうすることで、マーガレットが自分との婚約を解消したくなるよう画策するのです。

「第五部 ジョン・シャーマン、バラへ帰る」で、シャーマンはロンドンを引き払って田舎町へ帰ります。メアリーは最初彼を拒絶しますが、最後にはふたりをつなぐ神秘的な絆が確認されて、シャーマンは土地に根ざした慈母のようなメアリーと結ばれます。

四人の男女をめぐる恋物語は、前近代の暮らしが残るアイルランドの田舎町と、ヴィクトリア朝後期の大都会に住むひとびとの心性や文化の違いを背景に語られていきます。本作を執筆していた頃、イエイツはラファエル前派の画家で詩人でもあるウィリアム・モリスの知遇を得、ロンドンの自宅には父親の友人の芸術家が訪れることも多かったのも、それらの影響と思われる都市風俗も書き込まれています。ちなみに、ライマーズ・クラブはまだ結成されていません。

まず最初に、バラの町でシャーマンとハワードがしばらくぶりに出会う場面から読んでみましょうー

「君は人生を無為に過ごしている」と牧師が口を挟んだ。

「違うね。俺こそ世界をつぶさに見ている。君が知ってる大きな町では、皆、似たもの同士のちっぽけな集団を探し当てて、仲間以外は知らないままだろう。誰もが同類と知り合うだけだ。ところがここじゃ、一日ぶらつけば世界全体とおしゃべりすることになる。人間ひとりが一階層だと思ったらいい。この町で仕入れた知識は、大都会へ出て無知な連中と出くわしたときにきつと役に立つよ。それはそうと、俺はこれから釣り糸を仕掛けに行く。どうだい、一緒に行かないか」(John Sherman 13)

「俺こそ世界をつぶさに見ている」というシャーマンの主張に、ローカルなものにたいするイエイツの姿勢が重なっています。民話探訪録「村の幽霊」(『ケルトの薄明』所収)の冒頭に同趣旨の文章がありますー「大都市ではわたしたちは世界をほとんど見ることができず、似たもの同士のちっぽけな集団へさまよい込ん

でしまう。他方、小さな町や村にはちっぽけな集団などない。そもそも人間の数が少ないからだ。そういう場所では否が応でも世界を見ることになる。人間ひとりが一階層で毎時間、新しい手応えがあるのだ」(*The Celtic Twilight* 29)。

この一節は、民話を聞き取り収集するために田舎町や村をめぐり歩いた、イエイツの実感を記していると思われます。ところが1902年に出た『ケルトの薄明』増補版以降なぜか削除されてしまいました。この文章には、パトリック・カヴァナーが提唱し、シェイマス・ヒーニーが花開かせた積極的な郷土主義—パロキアリズム—の萌芽があったように見えますが、これ以後、イエイツの興味は周知のように神秘主義の方向へ舵を切っていきました。

さて、バラの町にはシャーマンの幼なじみで相談相手のメアリー・カートンがいます。牧師館で子どもたちに歌を教えている彼女は、次のように描写されています。

メアリー・カートンがオルガンの蓋を閉めて、シャーマンのところへやってきた。表情とふるまいに優しさと芯の強さが見える。まなざしは穏やかで、目鼻立ちに調和があり、立ち姿には豊かさと美しさが寄り添っている。着ている服は質素だが、どこことなく品位が感じられる。社交界にでも出れば、言い寄る男には事欠かなかっただろう。だが田舎町にいるかぎり、生涯結婚しないタイプの女性だと思われていた。彼女の美しさにはピンクと白が足りなすぎた。おまけに、はっきりものを言うその性格が、教育の恩恵にあずかっていないひとびとには厄介の種だった。(John Sherman 29-30)

シャーマンはアイルランド国教会の信徒です。裕福ではないけれど母と二人でこじんまりした町家に暮らし、家政婦を雇える程度の余裕があります。一番の趣味は庭仕事です—「彼は毎朝自然を眺め、自然の音を聞きながら庭で作業をする。月ごとに種を植え、土を耕し、掘り返す。それから中央に生け垣をしつらえて、庭をふたつに分ける。生け垣より奥は花を植え、手前には野菜を植える」(John Sherman 22-23)。田舎町で暮らしていくほうが性に合っているのですが、裕福になりたいという野望も持っています。シャーマンが思い描く理想の暮らしのイメージは、アングロアイリッシュの大地主そのものです—「田舎に家を持たなくちゃだめだ。狩りをして猟銃を撃ち、庭を持って三人の園丁を雇う」(John Sherman 62-63)。

シャーマンにはロンドンで暮らす伯父がいます。伯父は船舶手配・仲介業を営む実業家なので、彼の死後、シャーマンに遺産が転がり込む可能性もあります。伯父の会社で働かないかと誘われた彼は、メアリーの励ましを受けて、母と家政婦を連れてロンドンへ引っ越します。ところが向こうで借りた家の庭は不毛を絵に描いたような空間です。

シャーマンと彼の母親はハマスミスの、セント・ピーターズ・スクエアの北側に小さな家を借りた。表の窓は緑の草木が伸び放題のスクエアを見おろし、裏側の窓はちっぽけな庭を見おろしていた。周囲は家々がぎっしり取り巻き、その裏庭を踏みつぶそうと共謀しているかのようだった。裏庭には背の高い梨の木が一本生えていたが、この木には決して実がなかった。(John Sherman 45)

大都会で三年暮らしたシャーマンは、都会的で裕福な娘マーガレット・リーランドと出会います。メアリー・カートンとは正反対の風貌です。初対面の印象を読みましょう—「彼女はテニスラケットを抱えて道路の日陰側を歩いてきた。かわいい娘だが顔立ちが整っているわけではなく、かわいいという以上の表現はできない娘なのだが、物腰に雰囲気があり、どこことなく自信ありげなので、皆が美人と呼ぶ。言ってみればバラの香りを持つシロツメグサのような娘である」(John Sherman 55)。

マーガレットは有毒なベラドンナを両目にさして、瞳を大きく見せているという噂のある娘です。そのきつい眼光は〈宿命の女〉を思わせます。イエイツはラファエル前派的な〈宿命の女〉の類型を意識していたに違いありません。少し長いですが一種の芸術論になっているところがあるので、マーガレットとシャーマンのやりとりに耳を傾けてみましょう。

「小説家って皆、あなたと同類のマジメ人間なのよ。わたしたちみたいな人間にとってもつらく当たるの。いつだってわたしたちが失敗する話をつくるんだから。小説家はわたしたちがいつも演じて、演じて、演じているって言うでしょ。でもあなたたちマジメ人間はそれ以外に何をしてるつもりなのかしら？ あなたたちは世界を前にして演じているのよね。わたしが思うに、わたしたちはわたしたち自身の前で演じているの。歴史上の愚かな王様や女王

様は皆、わたしたちのような人間だった。大笑いして、うなずいて、納得できない理由で断頭台に上っていった。あえて言うけど、首切り役人はあなたみたいなひとだったと思う」

「そんなにかわいい首を切りはしないよ」

「いいえ、切るわ。あなたはわたしの首をあした切るわよ」彼女はららんと輝く左右の瞳でシャーマンを射すくめながら、怒りを込めて言い放った。「あなたはあした、わたしの首を切るの」彼女はすごい剣幕でそう繰り返した。「わたしにはわかるのよ」

彼女はいつもぶいっと去る。気分がとても変わりやすいのだ。「見て！」低木の向こうに聳えている聖ペテロ教会の塔の時計を彼女が指さした。「五時五分前。あと五分で母のお茶の時間がはじまるの。なんだかおけいこむような気がするけど、ゴシップしに行かなくちゃ。さようなら」

(John Sherman 58-59)

独りよがりて気まぐれな女性のふるまいがたくみに描かれている場面です。イエイツはこの小説で人間の性格のタイプを描き分けるのに苦心したと語っていますが、このあたりの書きぶりを伸ばしていけば、よい小説家になれたに違いありません。

先まで読むとわかってきますが、マーガレットは婚約破棄を繰り返してきました。ロマンティックな恋愛に強くあこがれているのは理解できるけれど、現実感覚に乏しい浅はかな娘でもある。〈宿命の女〉としてはいささか小ぶりです。シャーマンはマーガレットの「ららんと輝く瞳」につきまとわれ、彼女が持つ富には惹かれるものの、彼自身が誇りとする〈田舎町に全世界を見る感覚〉とマーガレットの〈社交を重んじて流行を追いかける価値観〉とは、水と油のように相容れません。

シャーマンが胸中の深いところでマーガレットに抱く違和感は、彼が三年間も暮らしているのにロンドンになじめない理由とリンクしています。

その晩、母親が眠った後、シャーマンは家を出て、テムズ川の岸に沿った引き船道を遠くまで歩いた。向こう岸の家々や工場の煙突にかすかな霧が掛かっていた。道の脇には柳の木立があった。しなやかに枝を揺らす柳の根元を、増水した川水が洗っていた。彼はそれらすべてをよそ者の目で眺めた。

それらが自分のものだという感覚は皆無だった。ロンドンにあるすべてのものは、あまりにも多くの人間たちが所有しているので、誰かひとりが持つことなどできそうになかった。シャーマンの記憶の中をもうひとつの川が流れていた。それは彼が自分のものだと思えた川で、なつかしい光景が次々に見えた。〔中略〕彼はふとわれに返ってマーガレット・リーランドのことを考えた。そして、彼女との結婚は自分が深く愛した前半生との決別を意味すると思に至った。(John Sherman 64-65)

シャーマンはロンドンをよそ者の目を見て、自分はこんな大都市を「所有」できやしないと考えています。その落胆は、ハワードがバラーの町の夜景を見て、「町の住人でないよそ者の自分こそ、影と川面が織りなす美をあますところなく感受できるのだと考え、さびれた町に花を持たされた気分になる」(John Sherman 9)と悦に入っただけとは対照的です。

ロンドンに失望したシャーマンは、記憶の中の故郷の川だけは「自分のもの」であるのを思い出して、心を和ませます。イエイツはこの小説の執筆中(1888年9月2日)、アメリカ東部の新聞*Providence Sunday Journal*に書いた記事の中で、ウィリアム・アリンガムの強靱な郷土愛を論じながら、アリンガムの詩を十全に理解するためには、読者も詩人同様「アイルランド西部の町に生まれ育つ必要があるかもしれない」と述べています。さらに、心理的に場所を「所有」することの重要性についてこう続けます―「住民にとっては田舎町が世界の中心であり、山河や街道は人生の一部である。路傍の小家の住人は洗濯物を干す灌木までも自分のものだ考える。読者はそういう感覚で土地を愛することを学ばねばならない。こうした所有感覚こそが肝心要なのだ。あなたはよそへ行けばただの通行人になってしまう。よそでは、すべてのものをあまりにも多くの人間が所有しているため、誰も所有していないのと同じことになっているのである」(*Letters to the New Island* 72)。

この記事には、さきほど触れたカヴァナーのパロキアリズムと響き合う、郷土に腰を据えて開き直ろうとする姿勢が強く打ち出されています。アイルランド系アメリカ人の新聞読者を意識して、郷土愛をやや強く打ち出しているのかもしれませんが、新しい国民文学を立ち上げようとする若い詩人の意気込みがよく伝わってくる文章です。

他方、イエイツがスライゴーをどのように「所有」していたかは、彼が当地で

使っていた勉強部屋を描写した、次の記述から想像がつかます―「母屋の裏に小さなバルコニーがついたイエイツの勉強部屋があった。その部屋の天井は彼と弟が描いたスライゴの絵地図で埋め尽くされ、あちこちに船の絵があしらってあった」(Hone, *W. B. Yeats* 59)。イエイツは後に画家として大成する弟のジャックとふたりで、自分たちのテリトリーの見取り図を描いていたのです。

イエイツは小説の後半に手を入れていた1888年11月19日、師と仰ぐジョン・オリアリーに宛てた手紙に、「僕は短編小説を仕上げなければなりません―モチーフはロンドンへの嫌悪ですー」(*The Collected Letters* I: 110)と書きました。実のならない梨の木の描写やマーガレットの人物造形を思い出せば、「嫌悪」のほどは窺えます。その一方で大都会への嫌悪が大きければ大きいほど、バラーへの望郷の念が募るのも当然でしょう。

『ジョン・シャーマン』後半の一番の読ませどころは、「第四部」でシャーマンが故郷の湖に浮かぶ島を思い出す場面ではないでしょうか。シャーマンの身体はハワードとともにロンドンにあるものの、心は完全にアイルランド西部へと飛び去っています。

シャーマンの精神はその間ずっと、思想の雛鳥たちを抱えてコッコッと鳴き続けていた。心はつねにバラーの町を思っていた。灰色の片隅を傾けるようにしてチーフサイドに雨を降らせる雲がはるかな連想を呼んで、バラーの北に聳える山の海側へ突き出した断崖に押し寄せて、当たって碎ける波そっくりの雲を思い出させた。近所のとある街角は、バラーの魚市場の奥まったところを連想させた。夜分、道路の補修工事のために囲った柵に灯されたランタンは、バラーの町に市が立つ日に、ピーターズ小路へやって来て停まるティンカー鋳掛け屋の馬車を思い出させた。馬車にはいつも、まっ赤に燃えた炭を仕込んだ缶カラが吊されていた。ストランド街が人混みでごった返していたのでちょっと立ち止まったとき、近くで水が流れている音がかすかに聞こえた。商店のウィンドウに置かれた、木の玉を吹き上げる小型の仕掛け噴水だった。その水音はゲール語の長い名前がついた滝の水が跳ねて、悲鳴を上げながらバラーの風の門湖へ落ちていく情景を連想させた。シャーマンが記憶の内側をさまよっている間じゅう、心の耳にひとりの足音が聞こえていた。幻のようなメアリー・カートンの人影がどの情景にもつきまとっていたのだ。シャーマンはまる一日夢想到にひたり続けたこともあった。ある日曜の朝、家から二、

三〇〇ヤード離れたテムズ川の川岸まで歩き、柳が生い茂ったチジック小島を眺めていると、昔見た白昼夢がよみがえってきた。バラーの家の庭の端を流れる川は、森に囲まれた湖が水源で、湖上には島が多くあった。子どもの頃、ブラックベリーを摘みに湖畔へよく出掛けた。湖の一番奥にイニスクルーインと呼ばれる小さな島があった。島の中心は水面から四〇フィートほど盛り上がった岩で、たくさんの低木が覆っていた。ものごとが思うようにならず、年長の少年から理不尽ないじめを受けたとき、シャーマンはしばしば、その小島へ逃げ込む自分の姿を夢想して楽しんだ。木造の小屋をそこに建て、二、三年無為に暮らす。ボートであちこち漕ぎまわって釣りをする。昼間は島の斜面に寝転び、夜はさざ波の音と茂みのざわめきに耳を澄ます。茂みには未知の生き物たちの気配があふれているからだ。夜が明けたら島の水辺へ下りていき、鳥の足跡がついているのを確かめる。(John Sherman 121-123)

ずいぶん長い引用になりましたが、この部分が「湖の島イニスフリー」の成立を物語るシーンです。イニスクルーイン (Inniscrewin) という名前の島は実在しません。フィネランの注釈 (Finneran, 1991 xxxiii) によれば、イエイツがどこかで聞き覚えた地名をひねってこしらえた可能性が高く、アイルランド語としては意味がはっきりしないとのこと。個人全集 (*The Collected Works in Verse & Prose*, vol. VII, The Shakespeare Head Press, 1908) に収録した版では、イエイツは島の名前を「イニスフリー」(Innisfree) と改めました。

「湖の島イニスフリー」はイエイツが『ジョン・シャーマン』執筆中に書いた詩なのです。あまりにも有名な作品なので拙訳を引用するのは気が引けますが、めったにない機会だと思いますので前半だけ読ませて下さい。

さあ立って行こう、イニスフリーへ行こう
小さな小屋をあそこに建てよう、枝を編んで粘土で固めて
豆を植えよう、九うね植えよう、蜜蜂の巣箱も持とう
あそこで僕は一人暮らし、林の空き地は蜂の羽音。

あそこへ行けば凝りがほぐれて、平和がゆっくり滴ってくる
朝のとばりが開くときから、コオロギが歌う時間まで。
真夜中の空は微光を放ち、真昼の空は紫に燃え

夕方の空いっぱいにムネアカヒワが飛び交わす。

(*The Poems* 60)

この詩の草稿が、友人のキャサリン・タイナンに宛てた 1888 年 12 月 21 日付の手紙に記されていることはよく知られています。イエイツは長い手紙をこんなふうにしめくくりました。

最近つくった詩を二連、読んで下さい。スライゴーのギル湖にイニスフリーという美しい島があります。伝説がある小さな岩島。僕の短編小説に出てくる登場人物のひとりが、うまくいかないことがあるたびにこの島へ行ってひとりで住みたいと思うのだけれど—それは以前、僕自身が抱いていた夢なのです。彼がどんなふうに思うかを想像していたらこんな詩ができました—
さあ立って行こう、イニスフリーの島へ行こう
編み枝の住まいで暮らそう—枝を編み、棒を組んでこしらえた家
豆を植えよう、九うね植えよう、蜜蜂の黄色い巣箱も持とう
そうすればいつもの心配は消えるだろう。

あそこでは明け方から平和がゆっくり滴ってくる
朝のとばりが開くときから、家のコオロギが歌う時間まで。
真昼の空は微光を放ち、真夜中の空は紫に燃え
夕方の空いっぱいにムネアカヒワが飛び交わす。

今日書いているこの手紙がクリスマスに間に合うよう、そちらへ届けばいい
なと思います。ごきげんよう。

あなたの友 W・B・イエイツ
(*The Collected Letters* I: 120-121)

今あらためて読んでみると、この二連の詩はタイナンに宛てたささやかなクリスマスプレゼントなのですね。なお、フィネラン (Finneran, 1991 xxv) によれば、メアリー・カートンの人物造形の主たる源泉はキャサリン・タイナンだそうです。

さらに自伝「四年間」(*Autobiographies* 153) にはこんな記述があります—「ひどくホームシックになってフリート通りを歩いていたとき、水がちよろちよろい

うかすかな音を聞いたと思ったら、店のウィンドウに、噴き上げたてっぺんに小さな玉を載せてバランスを取っている噴水が見えた。わたしはにわかに湖水を思い出した。その突然の記憶から『湖の島イニスフリー』が生まれた。とにもかくにもこの作品が、ことばのリズムにおいて自分自身の音楽を奏で得た最初の抒情詩である」。

書簡と自伝をふまえた上で、シャーマンがイニスフリー島を夢想する場面を読み返してみると、イエイツの胸に浮かんだ望郷の念をスケッチした散文として、凝縮された完成度をしめしているように思われます。

イエイツがそうであったように、シャーマンもロンドンで耐えがたいホームシックに駆られます。そして彼は、ハワードとマーガレットが相思相愛になるよう仕向けた上でバラへ帰ってきます。小説の「第五部」で、シャーマンは自己憐憫を振りまきながらメアリーに求婚します。メアリーは、「ジョン、あなたはわたしを愛していない[中略]今日ここへ来たのは、それが義務だと思ったからでしょ。わたしのいままでの人生には義務しかなかったのよ」(*John Sherman* 156-157) と切り返します。「義務」ということばに、一生田舎町で暮らす運命を引き受けた女性の重たい覚悟が宿っています。この直後メアリーは、大切に保存していたシャーマンの手紙を、彼の目の前ですべて焼いてしまいます。

いたたまれなくなったシャーマンは夜、ノックナリとおぼしき山へ登り、山上の石塚でときを過ごした後、明け方に下界へ戻ってきます。牧師館の前を通りかかると窓に明かりが灯っていて、メアリーが門まで出てきます—「メアリーはシャーマンの手を取ってやさしくなでた。『わたしたちは難破したのね。財産は全部、海に流されてしまった』そう語る声音には、男が見せる愛とは違う女の愛がこだましていた。メアリーはシャーマンを見つめた。そのまなざしには行き暮れた者に手をさしのべるひとの—そして子どもを胸に抱き寄せる母親の—愛が輝いていた」(*John Sherman* 169-170)。

これが小説末尾のパラグラフですが、あまりにもメロドラマ的で甘すぎるでしょうか？ メアリーは慈母を演じすぎているかもしれません。しかし、この小説の決定稿を書き上げてから約二ヶ月後、イエイツがモード・ゴンと運命的に出会うことを思うと、安直に見えるこの結末は強烈な皮肉を帯びてきます。現実それほど甘くないという皮肉。イエイツがそれ以後半生を掛けて向き合い、長い年月を掛けて成長のよりどころとしていく、〈成就しない恋愛〉というアイロニーがここで産声を上げたようにも思えるのです。

引用文献リスト

- Ganconagh. *John Sherman and Dhoya*. 3rd ed. London: T. Fisher Unwin, 1892.
- Yeats, W. B. *The Celtic Twilight*. London: Lawrence and Bullen, 1893.
- . *Autobiographies*. London: Macmillan, 1955.
- . *John Sherman and Dhoya*. Ed. Richard J. Finneran. Detroit: Wayne State UP, 1969.
- . *Memoirs*. Ed. Dennis Donoghue. London: Macmillan, 1972.
- . *The Collected Letters of W. B. Yeats*. Vol. I 1865-1895. Ed. John Kelly. Oxford: Oxford UP, 1986.
- . *Letters to the New Island*. Ed. George Bornstein and Hugh Witemeyer. New York: Macmillan, 1989.
- . *John Sherman and Dhoya*. Ed. Richard J. Finneran. New York: Macmillan, 1991.
- . *The Poems*. Ed. Daniel Albright. London: Everyman's Library, 1992.
- Hone, Joseph. *W. B. Yeats*. London: Penguin Books, 1971.
- Saddlemyer, Ann. *Becoming George: The Life of Mrs W. B. Yeats*. Oxford: Oxford UP, 2002.

付記

本論に引用した『ジョン・シャーマン』の全訳は、訳注・訳者解説とともに雑誌『こころ』の Vol. 30 と Vol. 31（平凡社、2016 年 4 月と 6 月刊行）に掲載された。さらに、選詩集 26 編とあわせて単行本『ジョン・シャーマンとサーカスの動物たち』（平凡社、2016 年 10 月）として刊行された。

W. B. Yeats をめぐる代表的な論争の概観 —可能性の中心としての不確実性—

山 崎 弘 行

I 発展するイエイツ研究 — 素人の段階から専門家の段階へ

イエイツ存命中のイエイツ研究は同時代の小説家や詩人たちが新作を主として書評の形で批評するいわば素人芸の段階にあった。しかし彼の死後はこれまでに多く多くの研究者たちが本や論文の形でイエイツの全作品を論じる専門家の段階を迎えるのである (Norman Jeffares, *The Critical Heritage* 3)。公式記録における最初のイエイツについての批評は Katharine Tynan による *Mosada* (1886) の書評 (*The Irish Monthly*, March 1887) である。詩の精髓である「美」を描き出した若き詩人の才能を賛美することに終始した論考である。ヨッフムによると、それから 100 年程後の 1988 年までの間に公開されたイエイツ関連の業績は 10152 点にも及ぶ (K. P. S. Jochum xi)。ドゲットによれば、1970 年から 2010 年頃までにかけては 9000 点以上の業績が発表されているとのことである (Rob Doggett 396)。ジェファーズはこのような状況にあるイエイツ学界のことを “Yeats industry” とそっけなく呼称し、その繁栄振りに対して複雑な気持ちを表明している (*The Critical Heritage* 3)。

本稿の目的は、イエイツの生前と死後に巻き起こったイエイツの著作をめぐる海外における代表的な論争の中から、研究者の注目度が比較的に高いと思われるものを関連文献に基づき厳選し、多少の論評を交えながら要点を解説することである。このような試みは、膨大な研究業績の氷山の一角に触れるにすぎないわけだが、少なくとも二つの成果を見込むことができると思う。一つは論争を通して浮き彫りになる当時の関係者のイエイツのテキストに対する反応を把握することで、その時代の価値観や風潮を大まかではあるが理解することができるであろう。もう一つは、当時のイエイツ研究の限界と可能性がある程度明らかになり、イエイツのテキストを新たな角度から読み直す契機となることが期待できると思うのである。

II イェイツの生前における主要な論争

(1) イェイツ批判の先駆者ホブキンズ

イェイツの研究史上、イェイツの詩を批判した先駆者はホブキンズである。Coventry Patmore 宛の手紙の中で最初期の詩 'The Two Titans: A Political Poem' (1886) に言及し、“a strained and unworkable allegory”だと酷評している。登場人物たちの正体が不確実で分かり難いのである (J. M. Hopkins, *Further Letters* 225-26)。何を食べて生きているのか、どのようにして岩場にたどり着いたのかといった優れた文学作品に不可欠とされる「分かりきったこと」(“commonplace”)が全く述べられていないからである。この詩には、稲妻が切り裂く闇夜の海上の岩場で若者と老巫女が鎖で繋がって座っている様子が描かれているだけなので、ホブキンズが批判するのも無理はないだろう。しかし、彼はこの詩を一種のアレゴリーと見なしており、その性格を正しく理解していないと思われる。“The vision of a rock”という冒頭の詩句が示唆するように、この詩は現実を模写した写実的なアレゴリーではなく、副題が示唆するように、イギリスとアイルランドの運命的な関係をめぐる“a vision of reality”を表現した象徴的な作品なのである。イェイツは1917年の論考で、“a vision of reality”(‘Per Amica Silentia Lunae’ 3)こそが芸術であり、詩人は“uncertainty”のただ中で歌うのだと表明した(8)。*‘The Two Titans’*には早くもこのようなイェイツの終生の詩学が実践されているのである。

ちなみにイェイツは1894年の論考で詩における不確実性を擁護して、次のような主旨のことを論じている。不確実性は不完全な表現や捉え難い特異な思想や主題に起因するが、往々にして詩を非常に力強く望ましいものにする。詩とは一日の仕事を終えた生活人が簡単に楽しめるような娯楽や休息の類いではなく、情熱と平和の泉であり、そこに到達するためには、茨と野薔薇の茂みを押し分けても進まなければならないのである(‘Seen in Three Days’ 317)。1897年の評論では、“allegory”が具体的な事物やありふれた原理を表しているのに対して、“symbol”は“vision”であり、目に見えない本質的なものを啓示していると指摘している(‘William Blake and His Illustrations’ 116)。さらに1900年の評論で、象徴詩の文体は大衆詩のそれとは異なり、ときには“obscure”で“ungrammatical”であるかも知れないが、一般に分析し難い完璧な表現や日々新しくなる意味を内包した捉え難い表現を含んでいると述べている(‘The Symbolism of Poetry’ 164)。

(2) 不確実性をめぐって

‘The Two Titans’に対するホブキンズの批判を嚆矢として、批評家たちはイェイツの詩の不確実性の是非を論じ始める。たとえばアーチャーはイェイツが初期の詩集で用いた古代アイルランドの民話や神話を素材とした象徴について、人類学者や古物研究家なら興味を抱くであろう判読し難い象形文字のようなものだと言っている (William Archer 556-57)。Sean O’Faolain は、上述した不確実性を擁護したイェイツの発言を自己表現力の未熟な二流の詩人のためのものに過ぎないと批判している。“pale”, “glimmer”, “dim”, “murmuring”, “gyre”あるいは“pern”といったイェイツが頻用する一連の神秘的な語彙を槍玉に挙げ、度外れに不確実であり、自分が何を伝えようとしているのかが分かっていない証拠であり、一流の詩人らしくないと苦言を呈している (Jeffares, *The Critical Heritage* 35)。これに対して、John Sparrow は‘The Cap and Bells’ (1893) を例に挙げ、イェイツを擁護している (*The Critical Heritage* 40)。イェイツ自身はこの詩について、自分が実際に見た意味の明解な夢と無意味な夢を織り交ぜた多義的な象徴詩として書いたもので、常に同じことを意味しているわけではないと証言している (*The Variorum Edition of the Poems* 808)。ところが、この証言についてスパロウはこの詩の象徴的な意味は決して不確実ではないと主張する。詩を読んで楽しむことだけに満足できる素人の読者には単純で明快である。この詩に不確実で神秘的な意味を発見することに努力を傾注したりするのは、詩を読んで楽しむことだけに満足できず、解釈しないではいられない専門家だけなのである。これに対して克蘭ズはイェイツの詩の背景をなすアイルランドの神話や伝説、神秘主義、あるいは象徴主義についての知識があれば、不確実さは解消すると述べている (Horatio Sheafe Krams 101-05)。

(3) アイルランドの文芸復興運動をめぐって

19世紀後半のアイルランドは、大飢饉による死者と移民の急増が原因で人口が急減してアイルランド語話者が激減し、さらには不世出の議会政治家 Stuart Parnell が不倫疑惑で失脚するなどの悲劇が相次ぎ、政治的にも文化的にも危機的な状況に陥った。イェイツに代表される文芸復興運動の主導者たちは沈滞した国民が自尊心と連帯感を回復することを願いながら、国民文学創出の事業に乗り出すのである。1893年にイェイツが公刊した *The Celtic Twilight* は、アイルランド西部の農村に伝わる民話伝説を編集したもので、当時はこの運動の基本理

念を象徴する文献として位置付けられた。イエイツが序文で “I have desired ... to show in a vision something of the face of Ireland to any of my own people...” (‘The Celtic Twilight’ 439) と述べ、ケルト文化をアイルランドの国柄として表象したいという熱い想いを表明したからである。しかし、運動の進め方に関しては、指導者たちの間で様々な意見の対立が生じた。運動の一環として上演する劇を近現代のアイルランドを背景とした写実主義的なものにすべきか、古代アイルランドを背景とした象徴主義的なものにすべきかという問題をめぐる対立がその代表的なものである。イエイツ個人に関わるものに限れば、象徴主義と神秘主義の定義をめぐり George Russell と意見が対立した。神智学の信奉者で宗教的な天分の持ち主であったラッセルは自分の視た幻想を実際に存在すると信じた。しかし、事実と経験の裏付けのないものを信じない実証主義的気質を備えていたイエイツは、ラッセルが視た幻想を比喩的な象徴としてしか理解しなかった (*Autobiographies* 198)。または散文劇 *Diarmuid and Grania* (1901) を共同制作していた過程で、ムアとも意見が衝突した。移り気な女主人公グラニーの台詞の文体のあり方などをめぐり、伝統志向のイエイツと近代志向のムアはどうしても折り合えなかったのである (George Moore, *Hail and Farewell* 243-55)。

イエイツが表象したいと願ったアイルランドの国柄については、近年、様々な議論が行われている。その内容は多岐に亘るが、ここでは批判論と弁護論に大別して代表的なものを紹介しておきたい。たとえば、ディーンはケルト文化を “Irishness” の本質だと指定するイエイツのアイルランド観を、貴族主義的なプロテスタント支配体制を擁護し、カトリック大衆による民主主義体制を蔑ろにするために発明された神話にすぎないと批判する (Seamus Deane, *Celtic Revivals* 37)。これに対して、“pluralism” の立場に立つロングリーは、ディーンが 19 世紀以来のカトリック教会中心のナショナリズム運動に同調していると反論する。異なった宗派の人びとが雑居混交するアイルランドの現実を受け入れるべきだと言うのである (Edna Longley, *The Living Stream* 33-34)。マシューズはイエイツのアイルランド観を批判する論者たちが前提とするカトリック対プロテスタントという二項対立図式を問い直し、文芸復興運動が両集団の共存を受け入れたイエイツに代表される共和主義的な知識人による、政党政治の枠外で行われた “self-help movement” であると論じている (P. J. Mathews 5-34)。カイバードもイエイツのアイルランド観を弁護するために、『幻想録』の中で来たるべきアイルランドを雑種混交の共同体として想像しながら待望している事実を指摘する (Declan Kiberd,

Inventing Ireland 326)。最後に、ドノヒューはイエイツの本質主義的なアイルランド観を発明された神話だとして嘲笑しても不毛な自己満足しか得られないと主張する。ユダヤ人やアメリカ人に典型的に見られるように、本質主義的な国柄の希求は国の独立と統一を目指すすべての国民に共通する自意識の表れであり、決して不毛ではないと力説している (Denis Donoghue, *We Irish* 8-9)。

Ⅲ イエイツの死後における主要な論争

(1) 葛藤をめぐって

妻の George が全詩集の異文版の編集者 Peter Allt に宛てた手紙 (1944 年) によると、イエイツは同じ事をいろいろ異なった言い方で言いながら一生を過ごしてきたと述懐したそうである。1933 年に出版された *Collected Poems* のゲラ刷りの校正をしていた頃のことである。

“I have spent my life saying the same things in different ways. I denounced old age before I was twenty, and the sword man throughout repudiates the saint — though with vacillation.” (Ann Saddlemeyer 620)

イエイツは *The Wanderings of Oisín* (1886-87) で、不老不死の妖精の世界とキリスト教化した現実の世界の間で揺らぎながら、ついには信仰を勧める聖パトリックを拒否する老いた英雄アシーンを描いた。爾来、‘Vacillation’ (1932) のような晩年の詩に至るまで、自然と超自然あるいは俗なる世界と聖なる世界との間での揺らぎや葛藤を主題とする詩を生涯書き続けた。この述懐には晩年のイエイツがそのことをはっきりと自覚していたことが示唆されている。ところが、イエイツの詩における揺らぎや葛藤をめぐる批評家たちの評価は大きく分かれるのである。ショーン・オフェイロンは ‘Vacillation’ を例に挙げながら、イエイツの詩において最も迫力に欠けるのは矛盾に悩むイエイツの個人的な感情が露出した葛藤場面であると主張する。そこには感情的な誠実さは感じられても知的な誠実さに欠けているからだ (Jeffares, *The Critical Heritage* 43)。エルマンによれば、イエイツは長年にわたり自己の内部に潜む深い矛盾に起因する葛藤を詩で表現することにより、自分の精神的な弱さを克服しようとした。かくしてエルマンも葛藤を表現したイエイツの詩には迫力が欠けると診断している (Richard Ellmann, *The Man*

and the Masks 291-92)。

ちなみにイエイツは自伝の中で、このような精神の葛藤状態を「カメレオンの道」(“Hodos Chameliontos”)と呼び、青年時代に迷い込み苦しんだことを告白している(*Autobiographies* 282-83)。『幻想録』(*A Vision*)ではこれを精神が疲労して信仰や価値基準が失われた近代文明に特有の病理現象とみなし、イエイツの世代がはじめて経験した症状だと診断している(1937 ver. 217-18)。しかし、葛藤は人間の「意識」(“consciousness”)にはかならず、調和した存在の統一に至るための避けがたい「もがき」(“struggle”)だとも述べている(158)。

ヘンは多くの読者にとってつまずきの石となっている葛藤の表現をイエイツの自己劇化の試みとして解釈し、その理由と背景を説明している(T. R. Henn, *The Lonely Tower* xvii)。彼はイエイツの葛藤の表現を正当化するために、マスクの理論、すなわち反対物の融合による進化の原理を援用する。この原理によれば、葛藤には「内的な葛藤」と「外的な葛藤」の二種類がある。前者は現実的な自我と理想的な反自我との葛藤であり、後者は自我と環境との葛藤である。ヘンは葛藤を意図的に利用することを通してのみ人間は認識の極致に向かって進化できると論じている(36)。

ドノヒューはイエイツにとっての手段であり目的である創造力のエネルギー源として葛藤を高く評価する。葛藤に欠けた後期の幾つかの詩を自分の主張と対立する異質な他者の主張が抑圧されているとして批判している(Donoghue, *Yeats* 126-27)。新批評を代表するエンブソンは意図的か否かを問わず、意味の不確実な曖昧さこそが詩における美や豊かさの要因とみなす。エンブソンはこの批評理論に基づき、葛藤を表現したイエイツの詩をとて高く評価している。彼は‘Who Goes with Fergus?’(1892)に描かれたアイルランド神話の英雄ファーガスに対する語り手の不確実な態度を曖昧さの実例として取り上げ分析している。この詩の場合、語り手が支持しているのは詩人としてのファーガスなのか、それとも王としてのファーガスなのか曖昧であるが、お陰でとても迫力のある心に残る作品となっているのである(William Empson 190)。

エンゲルバーグは葛藤あるいは弁証法こそイエイツをモダニズムの詩人たらしめている示差的特徴だと論じている。葛藤の不可避性こそがモダニズム文学者の抱えるジレンマの唯一の最も特徴的な輪郭であるからだ(Edward Engelberg 259)。

(2) オウエン観をめぐって

イエイツが1936年に出版した *The Oxford Book of Modern Verse* はこの年における最も多くの論争を巻き起こした出版物となった。イエイツが Wilfred Owen の詩を “... passive suffering is not a theme for poetry” (xxxiv) という理由でこの詞華集に収録しなかったことが要因である。オウエンは第一次世界大戦の戦場で悲惨と苦痛を味わった兵士への同情を主題とする詩を書き残し、反戦詩人の代表者として若い世代の詩人たちに多大の影響を与えていた。それだけに、イエイツのとった措置は独断と偏見に基づいており異常だという反発の声が世論の大勢を占めたのである。ところが、イエイツの死後、オーデンとマクニースはオウエンから影響を受けた世代に属しているにもかかわらず、イエイツに対して同情的な態度を示している。オーデンはイエイツがオウエンを排除した理由は想像に難くないと言う。批評家たちは美学的な理由からではなく政治的な理由からオウエンを排除したことに反発しているので、イエイツが憤慨するのをもっともであると述べている(W. H. Auden, ‘I Am of Ireland’ 517)。すでに共産主義から離れてキリスト教徒に転向していたオーデンは、創造的な人間は不安定な現実社会に生きる人間の苦しみに対して能動的でなければならない、受動的な態度からは優れた詩は生まれないというイエイツの文学観に共鳴し始めていたのである。イエイツは *The Oxford Book of Modern Verse* の序文で、オーデンやマクニースに代表される1930年代詩人たちの特徴として、苦しみを凝視した結果、不安定な社会状況を超越した不変で神聖な何かを求めざるを得なくなったと述べている。苦しみを乗り越えるために彼らが求めたものが政治的なイデオロギーでなく、宗教的な信仰であったことを示唆している(xxxviii)。オーデンも評論 ‘The Public vs. the Late Mr. William Butler Yeats’ で、イエイツが生涯にわたり詩で表現したのは工業主義が引き起こした社会的分裂に対する持続的な抗議と、それを克服するための思想と言語による絶えざる苦闘であるという主旨のことを述べている。また古代アイルランドの妖精や英雄を歌ったのも、分裂した社会を統合するための普遍的な世界宗教を探求するためであったと論じている(393)。マクニースはイエイツがオウエンを排除した要因について次のような主旨のことを述べている。日頃からアイルランドの農村社会と身近に接していたイエイツは、工業化や商業化や国際化が進行する欧米の近代社会を無視する立場に身を置いていたので、このような立場にいない大多数の文学者には好意的にはなれなかったのである(Louis MacNeice 178)。また、自分たちの世代の詩人とイエイツは依拠する価値体系は

異なるが、無秩序に反対して能動的な芸術を支持し、受動的な印象主義に反対する点で同じ立場に立っていると指摘している (191)。

なお、ロングリーは最近作で、イエイツとオウエンはともに、ロマン主義や象徴主義の系譜に属しており見かけほど異なっているわけではないことを力説している。オウエンにとってイエイツは戦時下の状況を内面化して黙示録的な詩を書いた同時代の先駆者であったと述べている (Edna Longley, *Yeats and Modern Poetry* 34, 106-15)。

(3) 変化と発展をめぐる

イエイツの死後における研究動向の顕著な特徴の一つは、生前には入手し難かったイエイツの詩や劇や評論文や書簡の全集が公刊された結果、イエイツの全体像を論じた伝記的な研究書が出版され始めたことである。イエイツ研究史上の古典となったこれらの研究書に共通しているのは、変化と発展のあり方に力点をおいてイエイツの全体像を論じていることである。しかし、これらの研究者たちが描き出したイエイツの変化と発展の実相は細部においては異なっており、けっして一様ではない。

ホウンは、中期以降のイエイツはかつてケルトの薄明の詩人として書いた初期の詩を感傷過多で男らしさに欠けるとして嫌い、ギリシャの独立戦争に参加して病死したロマン派の風刺詩人バイロンに倣って社会生活を取り込んだ詩を書くに至ったのだと指摘する (Joseph Hone, *W. B. Yeats* 186)。ジェファーズも、同工異曲の発展図式を描き出している。唯美主義的な初期の詩に不満を抱くようになったイエイツは、現実逃避的な夢想家の気質と現実主義的な行動家の気質という相対立する気質を兼ね備えた懐疑的な詩人へと変化したと言うのである (*W. B. Yeats: Man and Poet* 143; *W. B. Yeats: A New Biography* ix)。

ヘンの場合は、イエイツの詩における文体の変化を『幻想録』で提出した“Body of Fate”と“Anti-Self”という二つの概念を用いて説明している (*The Lonely Tower* 99-101)。前者は物心両面の環境、老化に代表される身体の変化、あるいは個人に影響する社会情勢を意味する。後者は、自分が成りたいと願うもののイメージ、すなわち“Mask”である。あるがままの自然的な“Self”と対立する。そして文体とは環境や自然的な“Self”と葛藤しながら、意識的に構築すべき“Anti-Self”なのである。ヘンはイエイツの文体の変化と発展の原因と背景として、1910年から1912年にかけて、アイルランド自治法案をめぐる政争や Maud Gonne との悲

痛な恋愛体験などの様々な“Body of Fate”に直面したことを挙げている (99)。

エルマンは現実逃避的な夢想家から現実主義的な行動家へと変化した詩人というこれらの伝記作者が描いたイエイツ像を基本的には受け入れている。しかし、エルマンの最大の関心は変化し発展するイエイツの作品に潜在する一貫して変わらないイエイツの精神的傾向なのである。イエイツは初期から晩年に至るまで、象牙の塔のような夢想の世界を脱出して現実の世界に復帰し、煉瓦と石で出来た普通の建物を建てようと努力したが、結局は、象牙の塔を反復再生することに帰着したと述べている (*The Man and the Masks* 294-95)。

イエイツの作品の変化と発展をめぐる議論は、近年、新たな展開を見せている。たとえば、クートはモード・ゴンとの愛情の縛れがもたらしたイエイツの変化のあり方を説明するために、ニーチェが『悲劇の誕生』で提唱したアポロ的精神とディオニソス精神という精神の二大原則を援用する。イエイツが19世紀末に発表したいわゆるケルトの薄明の詩では陶酔と混沌を志向するディオニソス精神が支配的であった。ところが、20世紀になると、これを乗り越えて理性と秩序を志向するアポロ的な精神が支配する詩を書き始めたと言うのである (Stephen Coote, *W. B. Yeats* 228-29)。

ブラウンはイエイツの変化と発展の主な原因として、モード・ゴンが求婚をどうしても受け入れない本当の理由をイエイツが知ったことにあると述べている。彼女は長年にわたりフランス人のジャーナリストで政治家の Rucien Millevoye の愛人であり、二人の間には子供までいたのである。自分たちがたまたま同じ日の夜に見た霊的な結婚の夢を打ち明け合い、これまでになく心が通い合う仲になっていただけに、イエイツが受けた衝撃は大きかった。その結果、それまで用いてきた現実逃避的な象徴主義の詩法の限界を痛感し、神話を用いた劇的な手法に依存するようになったのである (Terence Brown, *The Life of W. B. Yeats* 104)。

これらの伝記はすべてイエイツの作品にかかわる様々なテーマを時系列的に設定し、これらのテーマに沿って書かれたものである。そこではあくまでも作品が中心で、アイルランドの歴史はあくまでも作品を理解するための資料として扱われているにすぎない。これに対して、フォスターはイエイツが生きたアイルランドの歴史の中にイエイツの著作を位置付けてその意義を考察することを目指している。彼の主要な関心はイエイツの伝記的事実およびアイルランドの歴史的事実と、詩や劇との間の相関関係に向けられている。イエイツの発展については、日常生活から逃避した感傷過多の初期の作品を脱して、予測不可能な現実の歴史の

中で生き始めた精神的な成長を反映した作品を書くようになったと論じている (R. F. Foster, *W. B. Yeats: A Life* I 302)。

マドックスはイエイツに対して母親らしい愛情を示さなかったスライゴー出身の Susan の影響が彼の詩の変化と発展に深く関わっていることをフロイト理論を援用しながら論じている。マドックスの解釈では、鬱病気味で、スライゴーの民話や伝説の話をするとき以外は無口で、部屋に閉じこもりがちであった病弱な母親は前近代的な農村スライゴーを象徴する。イエイツの詩の変化と発展は、母から受け継いだスライゴー的な要素を克服するための自分との戦いの結果だということを論証している (Brenda Maddox, *George's Ghosts* 199)。

脱構築批評の代表者ド・マンは、青年時代は現実逃避的な夢想家であったが、中年になり現実主義的な行動家に変化したというイエイツ像を普及させたとしてジェファーズとエルマンを批判する。ド・マンによれば、イエイツは夢想家と行動家の間の緊張関係を初期から晩年に至るまで変わることなく生き続けた (Paul de Man 305)。しかもこの緊張関係は初期から晩年に至る様々な詩に用いられた独特のイメージの使用法に反映しているのである。イエイツが使用した主要なイメージは、日常的な自然物を意味する “natural image” と、あるいは伝統的に神聖だとされている超自然物を意味する “emblem” とも解釈でき、どちらが妥当な解釈なのかを決定できない。ド・マンはこの二つの異質なイメージの間を揺れ動きながら生涯いかなる種類の楽天的な解決にも到達しなかった詩人としてイエイツを解釈している。ド・マンはイエイツが変化したことを必ずしも否定しているわけではない。イエイツの好みは初期には “natural image” にあったが、中期には “emblem” に移り、後期には “natural image” に復帰したことを認めている。しかし、基本的な問題意識は変化していないと断じている。イエイツは聖と俗、理想と現実、あるいは超自然と自然の間の運命的な乖離の問題を解決のないままに生涯抱え込んでいたからである (180)。ド・マンの解釈方法にはエンブソンの影響が顕著であるが、曖昧さこそが詩の豊かさと美しさの要因であると考ええるエンブソンとは異なり、ド・マンは、そこに作者の精神の分裂や不安やニヒリズムの徴候を読み取っている。例えば、‘Among School Children’の最終行 “How can we know the dancer from the dance?” を次のように解釈する。この疑問文は通常、「踊り子と踊りを区別できようか、できはしない」という意味の修辞疑問文として解釈されている。ところがド・マンは「どのようにしたら踊り子と踊りの区別ができるのかを教えてください」という意味の単純疑問文にも解釈でき、どちらが妥当

な解釈なのか決定できないと主張する。イエイツは他の様々な著作で “dancer” を “natural image” として用い、“dance” を “emblem” として用いているからである。しかもこの解釈は、自然物と超自然物の間の和解のない対立を歌ったこの詩全体の文脈にも一致している。ド・マンは最終行を修辞疑問文と解釈して、そこに存在の統一を象徴する浪漫的なシンボルを読み込む Frank Kermode に代表される伝統的な解釈にもそれなりの根拠があることを承知している。しかし、伝統的解釈は “dancer” と “dance” を共に “emblem” として読む場合に初めて成立する素朴な解釈だとド・マンは結論づけるのである (188-89, 200-02)。先述したように、晩年のイエイツは葛藤を「カメレオンの道」に迷い込んだ近代人が陥る病理現象だとみなしたが、存在の統一に至るためには避けて通れない意識の「もがき」だとも考えていた。しかし、存在の統一への到達は決して保証されたものではなく、あくまでも希望的な観測にすぎないことをイエイツがはっきりと自覚していたことをド・マンは力説するのである (238)。

(4) イエイツの詩と『幻想録』の関係をめぐって

『幻想録』の知識がイエイツの詩の理解に必要な否かという問題についても意見が大きく分かれている。ヘンの場合は、『幻想録』がイエイツの詩の発展のあり方を理解するのに役立ち、その解釈にもしばしば有益で、ときには不可欠だと考えている。『幻想録』はイエイツの思想の土台であり、イエイツの詩と劇で用いられている様々な象徴の供給源であり、これらの象徴についての体系的な意見表明であり、イエイツがこれらを確認をもって使用することを可能にしているからだ (T. R. Henn 182-83)。ヴェンドラーはヘンとはいささか異なり、劇の理解には不可欠だが詩の理解には不可欠ではないと考えている (Helen Hennessy Vendler, *Yeats's Vision and the Later Plays* vii)。エルマンによれば、『幻想録』は重要ではあるが、いかなる意味においてもイエイツの詩の完全な案内書ではなく、その完全な背景でもない。それはイエイツの詩に貴重な象徴体系を提供してくれるが、彼の詩をこの体系だけに頼って解釈しようと試みると不当に扱うことになる」と述べている (Ellmann, *The Identity of Yeats* 164-65)。フォスターの場合はこの哲学書がイエイツの精神と願望についての研究には役に立つことを認めているが、詩の理解には役に立たないと主張する。近代的な懷疑精神や合理的な分析能力を宙づりにすることなしにはこの本に記述されている思想体系を額面どおり受け取ることはできないとまで断言している (R. F. Foster, *W. B. Yeats: A Life* II 285)。

(5) ファシズム観をめぐって

1933年にEoin O'Duffyを指導者とするネオファシスト団体Blueshirtsが出現する。“a politics of cultural unity”を目指す権威主義的な政府を夢想していたイエイツはこの軍事組織に共鳴し、‘Three Songs to the Same Tune’(1933)と題する政治詩を書き上げる。やがてオダフィが文化の統一などには関心がないことを悟ると、この運動に距離を置き始める。1934年にはこの詩を改作して、題名も‘Three Marching Songs’に変更する。イエイツは改作の動機について、真面目な主題に遊び心を投入し、党派性を消すことを目指したという主旨のことを述べている(*The Variorum Edition of the Poems* 543, 837)。イエイツは詩人としては優れているが、現実政治には疎い夢想家であり、一時的に関わったBlueshirts運動からも幻滅して離脱したという説が広く受け入れられてきた。この定説に異議を申し立て、イエイツのファシズム観をめぐる論争に火をつけたのがオブライエンであった。彼は躁鬱病の比喻を用いながらイエイツが青年時代以来、一貫してファシズムに関心を抱く詩人であったことを論証している。イエイツの政治活動を、政治活動に活発である“manic phases”と不活発になる“depressive phases”に二分し、イエイツが生涯にわたりこの二つの時期の間を周期的に往復していたと論じている。たとえば、Blueshirts運動を支持したのは運動が成功しそうだと思い込んだ“manic phases”においてであり、アイルランドでは成功する見込みがないことを認識して“depressive phases”に入ると、支持する意欲が衰えて運動を冷笑する詩を書いたのである。しかし、いずれの時期にあっても、自分の夢想する政治目標を達成するためには大衆向きの民主主義政治でなく、貴族主義的な寡頭政治が必要だと信じるイエイツは、その代替的な政治制度としてのファシズムを支持する姿勢を捨てることは決してなかったと主張している(Conor Cruise O'Brien 264-65)。

これに対して、カリングフォードはイエイツの詩には相対立する政治的な価値観が共存しているので、オブライエンのようにイエイツの詩にファシズムへの荷担だけを読み取ることは一面的だと批判している(Elizabeth Cullingford, *Yeats, Ireland and Fascism* viii)。イエイツが現実の政治活動において選択したのはEdmund Burkeの信奉するOld Whigの思想、すなわち“aristocratic liberalism”に近い思想だと述べている(235)。これは個人の精神的な自由を愛し、統一した文化を有する有機的な社会集団との絆を尊重する思想である。

他方、カーニーはイエイツの詩に表現されたファシズム的思想にロマン主義的

な文化ナショナリズムの神話を看取し、それがIRAにテロリズムを正当化するための思想的な根拠を与えたとして糾弾している(Richard Kearney 137)。デーンもイエイツが抱いたいわけゆるファシズムとは、実際は純粹種の植民主義者的な思考法であると主張する。*The Celtic Twilight*を公刊し、アイルランド農民への深い理解と愛着を表明したものの、所詮はプロテスタント支配階級に属する詩人であり、植民地主義者にありがちな家父長的な温情意識を払拭できなかったとされる(Seamus Deane, *Celtic Revivals* 49)。

サイードはポストコロニアリズムの立場からイエイツの政治姿勢の可能性と限界を論じている。オブライエンの影響でイエイツをファシストだとみなす解釈を基本的に受け入れてきたが、カリングフォードのイエイツ擁護論に接してオブライエンの主張が“hopelessly inadequate”(Edward W. Said 87)と判断するに至ったのである。オブライエンのように、ファシストだからという理由でイエイツの政治姿勢全体を否定することは、赤子を湯水とともに捨てるようなものであるからだ。サイードはアイルランドの脱植民地化運動の歴史を第一段階と第二段階に区分して、イエイツの政治姿勢を再評価している。前者は独立以前の反帝国主義運動の段階である。後者は独立後にも残存する植民地後遺症からの完全な解放をめざす段階である。前者は後者にとっての不可欠な土台ではあるが、あくまでも後者に至るための過渡的な段階だとされている。サイードはイエイツを主として第一段階で活躍した“nativist”であり(81)、第二段階にも部分的に関わった“poet of decolonization”だと解釈する(83)。インドのTagore、チリのNeruda、あるいはマルティニクのCésaireのような帝国主義に抵抗し、自国の独立運動に貢献したアジア、アフリカ、あるいは中南米の知識人の系譜に属する詩人としてイエイツを高く評価している。文芸復興運動の主導者としてアイルランドの国柄を鼓舞する詩を多作し、アイルランド自由国成立後も反英的な態度を示し続けたからである。しかし独立後のイエイツの政治姿勢については第二段階の基準に照らして不十分で、晩年に陥ったファシスト的な政治姿勢も反動的で受け入れ難いと述べている(83)。

ハウスは“race philosophy”の観点からイエイツの晩年の政治姿勢を再評価している(Marjorie Howes, *Yeats's Nations* 175)。イエイツが文化統一のための政治を目指したのは、民主主義の下で墮落した西欧文明の危機の克服であった。民主主義の代替思想としてイエイツが最終的に選んだのはコミニズムでもファシズムでもなく“race philosophy”であった(351-52)。この哲学は大多数の凡庸な大衆よ

りも、少数の学識のある有能な選良を重視する優生学の知見に基づいている。民主主義と貴族主義の間の果てしない戦いこそが社会の本質だとみなす哲学である。その意味でファシズムとは似て非なるものである。イエイツがファシズムとコミュニズムを選ばなかったのは、これらのイデオロギーが経済的な繁栄を重視する余り、個人や家族の独創性と民族の文化を軽視しているとみなしたからである (175)。プロテスタント支配階級の伝統、権威主義的政治、文化統一の政治、ファシズム、あるいは優生学等々、晩年のイエイツが興味をもって取り組んだ政治課題は多岐にわたるが、民族哲学はこれらの諸課題のすべてに通底する基盤的な思想であるとされる (160)。

他方、フォスターはイエイツがファシストであることを裏付ける証拠を探しても無駄だと断言する。イエイツはドイツのファシズムを“Fashism”と誤記する癖があったが、彼のファシズム理解はそれと同じくらい独特で不正確だった。結論としてイエイツが最終的に帰着したのはファシズム信仰ではなく、神秘主義思想に基づく超自然信仰であったと述べている (R. F. Foster, ‘Fascism’ 222)。

最後に、ロイドは、イエイツが ‘Man and the Echo’ などの詩で自分の愛国的な作品が関係者を狂わせて復活祭蜂起に代表される過激な行動に駆り立てて死に至らしめた可能性に想いを馳せながら、国家の本質と正当性や、国家の独立において暴力の果たす役割を省察している事実を強調する。イエイツの政治姿勢をめぐる従来の議論ではそのことが無視されていると主張している (David Lloyd, ‘Nationalism and Postcolonialism’ 191)。

(6) 女性観をめぐって

イエイツの女性に対する姿勢も政治姿勢と同じく複雑で不確実であることから、批判論と擁護論からなる様々な論争を引き起こしている。ここでは、‘A Prayer for My Daughter’ (1919) に表象されたイエイツの女性観に的を絞り、代表的な論争を紹介したい。フェミニズムの観点から論じられて来たのはこの詩に限らないが、この詩ほど様々な角度からの議論を呼び起こしたものはないからである。

たとえば、クラインは ‘A Prayer for My Daughter’ を書いた頃までのイエイツを “the last courtly lover” に見立てている。知的な憎しみを抱いて政治活動に明け暮れる新しいタイプの女性にならずに、家庭に留まりその伝統を守護する古いタイプの女性として、いつまでも無垢なままにいるようにと娘のために祈るイエイツ

に中世の騎士の面影を読み取っているのである。クラインによれば、中期以降のイエイツは存在の統一に相応しいイメージを希求し始め、それまでの家父長主義的な女性観を脱して、知性と感情を兼ね備えた両性具有的な女性を来たるべき新時代の理想とみなすようになったのである (Gloria C. Kline, *The Last Courtly Lover* 164)。

オウツはこの詩に表象された娘の理想的な未来像に男性中心主義的な願望を読み取り糾弾する。物を言わない植物のような思考力のない自然物として娘を描き、男性の慰みものにしているからである (Joyce Carol Oates 17)。これに対してカイバードは、この詩に性差別主義を読み込むことは皮相な解釈だと反駁している。イエイツは理性が男性の領分で、感情が女性の領分だとみなす因習的な社会制度に一貫して批判的であったからである。カイバードによれば、両性具有性の揺るぎない信奉者であったイエイツは完全な人格の人間になるためには男女の区別なく、理性と感情の融合が必要だと信じていたのである (Declan Kiberd, *Men and Feminism* 106)。

カリングフォードもイエイツの恋愛詩に女性差別のレッテルを貼ることを戒めている。‘A Prayer for My Daughter’ には “murderous innocence” と “radical innocence” が対照的に描かれている。前者はモード・ゴンに代表される女性解放運動やアイルランドの独立運動やロシア革命などの革新的な風潮を含意する。後者は家父長主義的な貴族の屋敷で慣習を護って生きる伝統的な女性の生き方を含意する。この詩では両者が緊張関係をなしており、偏狭なフェミニズムの規範に基づきイエイツを一方的に糾弾することは不適切である。公平なフェミニズム批評を目指す者はイエイツに対する不信感とイエイツへの信頼感という相矛盾する衝動を必然的なものとして受け入れるべきなのである (*Gender and History* 10)。イエイツの願いは、アポロの性的な誘惑からダフネを護るために月桂樹に変えたギリシャ神話のペネウスのように、娘を男性の性的暴力から守護することである。カリングフォードはそこに女性の解放に理解を示すイエイツのフェミニスト的な側面を読み取り信頼感を覚えている。対照的に、月桂樹で囀るベニヒワのように知的な憎しみとは無縁な娘であることを願うイエイツに男性中心主義者の側面を読み取り不信感を覚えているのである (137)。

ハウスもこの詩を単純に女性差別的な作品だと解釈することを戒めている。そのような解釈は弁証法的に書かれたこの詩に提出されている二つの重要な論点を無視することになるからである。アングロ・アイリッシュの共同体の存続がその

後継者たるべき女性の生き方に依存しているという論点と、クールパークに代表されるアングロ・アイリッシュの共同体の伝統が“murderous innocence”によって破壊される恐れがあるという論点である。このような状況下で娘が選ぶべき人生は二つに一つである。Constance Markieviczのように“murderous innocence”に染まり、伝統破壊を目指す新しい女性の人生か、それともイエイツの母親のようにアングロ・アイリッシュの家庭に嫁いでその伝統を継承し、“radical innocence”を身につける古い女性の人生かである。イエイツが古い女性の人生を娘に望んでいることは明らかである。しかし、マルケヴィッチの生き方が示唆するように、アングロ・アイリッシュの貴族の家庭に育って貴族の家庭に嫁ぎ、伝統的な儀式と慣習を継承して“radical innocence”を身につけても、やがて状況の変化でそれを失い、“murderous innocence”に染まって伝統破壊に繋がる独立運動に参加するようになるという歴史の皮肉に直面するかも知れないのである (Marjorie Howes 115-16)。

ヴェンドラーも独自の根拠に基づき、この詩に女性蔑視の姿勢を読み取るのは誤読だと主張する。間違った結婚をしたかつての恋人モード・ゴンと自分の母親スーザンの運命に対する同情と怒りこそがこの詩の密かな執筆動機だと言うのである。イエイツは、二人が経済的に無力で気まぐれで寛大さに欠ける男と結婚したために不幸な人生を送ることになったと思い込んでいた。資産のない家庭に生まれた当時の女性にとっては経済的な自立は困難で、金持ちの男性と結婚することが経済的に豊かに暮らすためのほとんど唯一の選択肢であったからである。娘が心の安らげる資産家の男性のもとに嫁いで幸福な人生を送ることを祈る詩を書いたのも無理はないとされる (Helen Vendler, *Our Sweet Discipline* 297-99)。

IV 論争の要因としての不確実性

イエイツの詩が以上のような多岐にわたる様々な論争を引き起こしてきた要因は、結局のところ、カメレオンの道に迷い込んで揺らぎながらも、リアリズムに陥ることなく“a vision of reality”を象徴的に語ったことに起因する意味の不確実性にあると思われる。これまでの議論を通して見たように、意味の不確実性は読み手の立場や観点により様々な解釈を新たに産み出すからである。仮にイエイツがホプキンスの求めるような「分かりきったこと」を述べた写実的な詩を書いていたら、これほど多くの興味深い実り豊かな論争を巻き起こすこともなかったで

あろう。その意味では不確実性にこそイエイツの詩の可能性の中心があると言える。このことを考慮に入れないでイエイツの人と作品を論じる研究には限界があるのではあるまいか。言うまでもなくイエイツをめぐる研究課題はこれだけではなく多岐に亘るが、不確実性をめぐる問題は今後ともなによりも優先して取り組むに値する重要課題の一つであると思われる。

引用参考文献

- Archer, William. *Poets of the Younger Generation*. London and New York: J. Lane, 1902.
- Auden, W. H. 'The Public vs. the Late Mr. William Butler Yeats' in *The English Auden: Poems, Essays, and Dramatic Writings, 1927-1939*. Ed. Edward Mendelson. London: Faber and Faber, 1977.
- . 'I Am of Ireland' in *The Complete Works of W. H. Auden*. Vol.Ⅲ: 1949-1955: *Prose*. Ed. Edward Mendelson. New Jersey: Princeton UP, 2008.
- Brown, Terence. *The Life of W. B. Yeats: A Critical Biography*. Oxford: Blackwell, 1999.
- Coote, Stephen. *W. B. Yeats: A Life*. London: Hodder and Stoughton, 1997.
- Cullingford, Elizabeth. *Yeats, Ireland and Fascism*. London: Macmillan, 1981.
- . *Gender and History in Yeats's Love Poetry*. New York: Cambridge UP, 1993.
- Deane, Seamus. *Celtic Revivals: Essays in Modern Irish Literature 1880-1980*. London: Faber and Faber, 1985.
- De Man, Paul. *The Rhetoric of Romanticism*. New York: Columbia UP, 1984.
- Doggett, Rob. 'Critical Debate, 1970-2006' in *W. B. Yeats in Context*. Ed. David Holdeman and Ben Levitas. New York: Cambridge UP, 2010.
- Donoghue, Denis. *Yeats*. London: Fonta and Collins, 1971.
- . *We Irish: Essays on Irish Literature and Society*. Berkeley and Los Angeles: U of California P, 1986.
- Ellmann, Richard. *Yeats: The Man and the Masks*. 1949; rpt. London: Faber and Faber, 1961.
- . *The Identity of Yeats*. 1954; rpt. London: Faber and Faber, 1964.
- Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. 1930; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1965.

Engelberg, Edward. *The Vast Design: Patterns in W. B. Yeats's Aesthetic*. 2nd ed. Washington: The Catholic U of America P, 1988.

Foster, R. F. *W. B. Yeats: A Life*. Vol. I : *The Apprentice Mage*. New York: Oxford UP, 1997.

———. *W. B. Yeats: A Life*. Vol. II : *The Arch-Poet*. New York: Oxford UP, 2003.

———. 'Fascism' in *W. B. Yeats in Context*.

Henn, T. R. *The Lonely Tower: Studies in the Poetry of W. B. Yeats*. London: Methuen, 1950.

Hone, Joseph. *W. B. Yeats 1865-1939*. 1943; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1971.

Hopkins, Gerard Manley. *Further Letters of Gerard Manley Hopkins*. Ed. Claude Collier Abbott. London: Oxford UP, 1938.

Howes, Marjorie. *Yeats's Nations: Gender, Class, and Irishness*. New York: Cambridge UP, 1996.

Jeffares, Norman. *W. B. Yeats: Man and Poet*. London: Routledge and Kegan Paul, 1949.

———, ed. *W. B. Yeats: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1977.

———. *W. B. Yeats: A New Biography*. London: Hutchinson, 1988.

Jochum, K. P. S. *W. B. Yeats: A Classified Bibliography of Criticism*. 2nd ed. USA: The Board of Trustees of the U of Illinois, 1990.

Kearney, Richard. 'Myth and Terror' in *Crane Bag* 2.1-2 (1978).

Kelly, John and Ronald Schuchard, eds. *The Collected Letters of W. B. Yeats*. Vol. III: 1901-1904. New York: Oxford UP, 1994.

Kiberd, Declan. *Men and Feminism in Modern Literature*. London: Macmillan, 1985.

———. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1995.

Kline, Gloria C. *The Last Courtly Lover: Yeats and the Idea of Woman*. 1976; rpt. Michigan: UMI Research P, 1983.

Krans, Horatio Sheafe. *William Butler Yeats and the Irish Literary Revival*. 1904; London: W. Heinemann, 1905.

Lloyd, David. 'Nationalism and Postcolonialism' in *W. B. Yeats in Context*.

Longley, Edna. *The Living Stream: Literature and Revisionism in Ireland*. Newcastle upon Tyne: Bloodaxe, 1994.

———. *Yeats and Modern Poetry*. New York: Cambridge UP, 2014.

MacNeice, Louis. *The Poetry of W. B. Yeats*. 1941; renewed. New York: Oxford UP, 1969.

Maddox, Brenda. *George's Ghosts: A New Life of W. B. Yeats*. London: Picador, 1999.

Mathews, P. J. *Revival: The Abbey Theatre, Sinn Féin, the Gaelic League and the Co-operative Movement*. Cork: Cork UP, 2003.

Moore, George. *Hail and Farewell*. Ed. Richard Cave. Buckinghamshire: Colin Smythe, 1985.

Oates, Joyce Carol. "'At Least I Have Made a Woman of Her" : Images of Women in Twentieth-Century Literature.' *Georgia Review* 37.1 (1983).

O'Brien, Conor Cruise. 'Passion and Cunning: An Essay on the Politics of W. B. Yeats' in *In Excited Reverie: A Centenary Tribute to W. B. Yeats 1865-1939*. Ed. A. Norman Jeffares and K. G. W. Cross. New York: Macmillan, 1965.

Saddlemeyer, Ann. *Becoming George: The Life of Mrs W. B. Yeats*. New York: Oxford UP, 2002.

Said, Edward W. 'Yeats and Decolonization' in *Nationalism, Colonialism, and Literature*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1990.

Sparrow, John. *Sense and Poetry: Essays on the Place of Meaning in Contemporary Verse*. London: Constable, 1934.

Vendler, Helen Hennessy. *Yeats's Vision and the Later Plays*. London: Oxford UP, 1969.

———. *Our Secret Discipline: Yeats and Lyric Form*. Cambridge, MA: The Belknap P of Harvard UP, 2007.

Yeats, William Butler. 'The Celtic Twilight' (1893) in *Mythologies*. Ed. Warwick Gould and Deirdre Toomey. New York: Palgrave Macmillan, 2005.

———. 'Seen in Three Days' (1894) in *Uncollected Prose by W. B. Yeats*. Vol. I: *First Reviews and Articles 1886-1896*. Collected and ed. John P. Frayne. London: Macmillan, 1970.

———. 'William Blake and His Illustrations to *The Divine Comedy*' (1897) in *Essays*

- and *Introductions*. London: Macmillan, 1961.
- . ‘The Symbolism of Poetry,’ (1900) in *Essays and Introductions*.
- . ‘Per Amica Silentia Lunae’(1917) in *The Collected Works of W. B. Yeats*. Vol. V: *Later Essays*. Ed. William H. O’Donnell. New York: Charles Scribner’s Sons, 1994.
- . *The Oxford Book of Modern Verse*. 1936; rpt. London: Oxford UP, 1970.
- . *A Vision: The Original 1925 Version*. Ed. Catherine E. Paul and Margaret Mills Harper. 1925; rev. New York: Scribner, 2008.
- . *A Vision: The Revised 1937 Version*. Ed. Margaret Mills Harper and Catherine E. Paul. 1937; rev. New York: Scribner, 2015.
- . *Autobiographies*. Ed. William H. O’Donnell and Douglas N. Archibald. 1944; rev. New York: Scribner, 1999.
- . *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*. Ed. Peter Allt and Russell Alspach. 1940; rpt. New York: Macmillan, 1966.

「沈黙」の後に—イエイツと第一次世界大戦再考

荒 木 映 子

序

1915年、ベルギー難民救済のための資金となる『寄る辺ない人たちの本』(*The Book of the Homeless*)への戦争詩の寄稿を求められて、イエイツが「黙っている理由」(‘A Reason for Keeping Silent’)という詩を書いたことはよく知られている。「こんなご時世には／詩人は口を閉ざしている方がいいと思う」という理由で、ヨーロッパの戦争に距離を置いた。後半生をフランスで過ごしたアメリカの作家イーディス・ウォートン (Edith Wharton) の発案によるこの豪華本には、時代を代表する欧米の芸術家、詩人、作家がさまざまな寄稿をしていて、イエイツのこの詩もそう違和感なくおさまっている。

この詩は翌年「戦争詩を求められて」(‘On Being Asked for a War Poem’)と題を変えられ、部分的にもう少し文語的な表現に書き改められて、イエイツの詩集『クール湖の野生の白鳥』(*The Wild Swans at Coole*, 1919)に収められた。この、戦争詩は書かないという表明以来、イエイツが大戦を詩に取り入れたのは、長年イエイツを経済的・文学的に援助し続けたレイディ・グレゴリーの、息子ロバートがイタリア戦線で戦死した時が初めてである。あとは、大戦末期にロシアに革命が起こった時にアイルランドの将来を重ねて書いた「再来」(‘The Second Coming’)があるくらいである。自分が書かないだけならいいが、第一次世界大戦について書いた詩や劇を批判して、物議をかもしことさえあった。戦争詩を書かないという宣言をしてから10年以上も経った1928年には、大戦で負傷したアイルランド兵の悲劇を容赦なく描き出した、ショーン・オケーシー (Sean O’Casey) の劇『銀の杯』(*The Silver Tassie*)をアビー座で上演するのを断わり、悶着を起こしている。その後、1936年には、イエイツ選『オックスフォード現代詩選集』(*The Oxford Book of Modern Verse 1892-1935*)から、典型的な戦争詩人ウィルフレッド・オーウェン (Wilfred Owen) を外している。理由は「受動的な苦しみは詩のテーマではない」というものであった。イエイツが第一次世界大戦を書くことに冷淡であったのは、第一次世界大戦はアイルランドの戦争ではな

いという思いをいただき、「悲劇的な喜び」をテーマとする伝統的な戦争詩に惹かれ、二律背反に歴史の原動力を見る独自の戦争美学を持っていたこと等、いろいろな理由が考えられる。これについては、以前考察したことがあるが、¹ここでは、イエイツの伝記的事項と第一次世界大戦の歴史的・文化的文脈を考慮に入れて、イエイツの「沈黙」の意味とその後を再考する。

1. イエイツと第一次世界大戦

まず、アイルランドと大戦との関係について。大戦が起こる前から、アイルランドの自治の是非をめぐる、イギリスとのユニオンを望む北部アルスター地方（プロテスタントが半数を占める）と、イギリスとは別の議会をもつ自治国になることを望む南部三地方（カトリックが三分の二以上を占める、レンスター、マンスター、コナハト）との間で一触即発の状態が続いていた。二度の廃案の末、ようやく下院を通過した「第三次自治法案」が実施を待つばかりになっていた矢先に大戦が勃発。ユニオニスト・北アイルランドでは、自治法をアルスターからは除外するのと引き換えに、義勇軍を派遣することを政府に約束したが、南部では、イギリスに戦争協力して義勇兵を出すかどうかで意見が分かれていた。穏健な議会派のジョン・レドモンド (John Redmond) は、戦後、自治法案の実施を確実にし、アルスターを自治から除外することなく、南北が和解して一つのアイルランドが実現することを期待して、人々に志願を要請した。イギリスに戦争協力するというのは、アイルランドの「ナショナリズム史上空前の方針」²であったが、レドモンドの弟で下院議員のウィリアム(ウィリー)や、経済学者で詩人のトマス・ケトル (Thomas Kettle) は、レドモンドの要請に応じて志願し、共に西部戦線の激戦地で戦死している。中立国ベルギー（カトリックの多い小国という点でもアイルランドの同情をひいた）をドイツの侵略から守るというイギリスの大義名分に呼応して、戦場に兵士を送り出すことは道義的な義務であると考えられ、それまでのアイルランドの歴史にないほど多数の人々が、背景、宗派を問わず戦争に協力したという。³「イングランドの苦境がアイルランドのチャンスとなる」と考えたパトリック・ピアスやジェイムズ・コノリー等ナショナリストの強硬派は、後に武装蜂起を起こすことになる。

こういう混沌としたアイルランド情勢の中でイエイツはどのように過ごしていたのだろうか？ アングロ・アイリッシュのプロテスタントという出自で、イギリスには愛憎相半ばする感情をいただき、反カトリックで反リパブリカン⁴でもあ

るイエイツは、大戦勃発時 49 才で独身、初期から中期への転換を示す詩集『責任』(Responsibilities) を出版し、劇場の仕事も一段落、王室年金の受給も決まっていた。大戦の間もイギリスやフランスで過ごすことが多く、1915 年の晩春から始まったツェッペリンによるロンドン空襲を経験した後も、大戦を「傲慢と愚かさ」を金をかけて爆発させたようなもの」と呼び、「戦争のことはできるだけ考えないようにしている」と述べて、無関心を装っている。⁵1913 年から 16 年の冬は、サセックスのストーン・コテッジでエズラ・パウンドと共に生活し、お互いに文学的影響を与え合いつつ、創作活動に没頭している。「黙っている理由」は 1915 年 2 月にここで書かれた。⁶しかし、戦争熱に沸くロンドンを離れても、出征した彫刻家のアンリ・ゴードイエ＝ブルゼスカ (Henri Gaudier-Brezeska) や、フランスの野戦病院で赤十字の看護師として働くモード・ゴン (Maud Gonnet) から戦況は伝わって来だし、ストーン・コテッジの前のヒースの上でイギリス軍が軍事演習をするのを目にしたり、ドーヴァー海峡の向こうに大砲の煙や音をじかに見聞きしたりすることもあったという。⁷『寄る辺ない人たちの本』への寄稿を求められたのはそういう時であり、この詩は、戦争に対しては超然と無関心な態度をとり、政治にコミットせずに、「女の子や年寄りを喜ばせる」ような伝統的な詩人の役割に徹するという決意表明であったと読める。

しかし、この言葉に反して、イエイツは大戦に関する詩を書いた。ロバート・グレゴリーが戦死した 1918 年には、3 篇のエレジーを書いている。そのうちの二つ (‘Shepherd and Goatherd’, ‘In Memory of Major Robert Gregory’) は間接的に大戦に触れているにすぎないが、「アイルランドの飛行士、死を予見する」(‘An Irish Airman Foresees His Death’) は、戦死直前のグレゴリーの心境をよんだ大戦詩であると言える。アセンダンシーの末裔であり、反シン・フェインのグレゴリーは、先祖の祖国であるイギリスに忠誠を尽くすのが本分であると考えて、戦争初期に少佐としてイギリス空軍に入隊している。1918 年 1 月 23 日、イタリア戦線で味方に誤爆されて戦死。⁸ところがこの詩では、「戦っている相手 [ドイツ人] を憎んでもいないし、／まもっている人たち [イギリス人] を愛してもいない」と書かれ、故郷の貧しい人たちのために戦っていること、義務や強制からではなく、「孤独な死の衝動」から戦っていることが強調されている。死の瞬間に來し方と行く末を天秤にかけ、この生である死に比べれば、どちらも「息の無駄」であると断定する、きわどいバランスの上に成り立つ忘れがたい詩である。

Those that I fight I do not hate,
Those that I guard I do not love;
My country is Kiltartan Cross,
My countrymen Kiltartan's poor,
.....
I balanced all, brought all to mind,
The years to come seemed waste of breath,
A waste of breath the years behind
In balance with this life, this death.

しかし、ここで書かれていることは事実通りであろうか？ 彼が故郷の貧しい農民のために戦ったのではなく、「王と帝国」のために戦いにのぞんだことは、伝記的事項に照らして、明らかである。さらに、ロイ・フォスターの詳しい伝記によれば、イエイツとロバートとの関係は決して友好的なものだったわけではなく、未亡人にエレジー執筆を依頼された時にも当惑とためらいを感じていたという。アイルランドでは、復活祭蜂起の首謀者の処刑により、政治的穏健派の中にも反戦ムードが強まってきたが、1918年初めの彼が戦死した時期には、人々は未だ終わらぬ戦争にますますいらだちをつのらせ、秋にはアイルランドにまで徴兵制を敷こうとする動きにイギリス政府への憤りを深めていたからである。そのため、イエイツはこの詩で、グレゴリーの大戦参加を「実存主義的」なテーマとして扱い、帝国との結びつきを遠ざけたのだ、とフォスターは解釈している。⁹ 結果は、イギリスのためではなく、アイルランドの故郷のために戦ったことを強調し、孤高のパイロットの姿にイエイツ的な英雄像を結実させるものとなった。実際のグレゴリーも、「ロバート・グレゴリー少佐をしのんで」(‘In Memory of Major Robert Gregory’)にあるように、「軍人、学者、騎手」であるだけでなく、芸術にも豊かな才能を示すルネサンス的英雄であることには違いなかった。こうすることによって、大戦は、オーウェンの「哀れみ」ではなく、イエイツの好む戦争詩人ジュリアン・グレンフェル (Julian Grenfell) の「戦いの喜び」に変わったと言える。

アイルランドのナショナル・アイデンティティが、植民地性と独自性の緊張をはらんでいる以上、イエイツの詩と歴史とを切り離すことはできない。「アイルランドの飛行士…」はニュー・クリティシズム的な分析をしても十分面白い詩で

あるが、このように伝記と歴史を考慮に入れると、複雑な陰影が浮かび上がってくるのである。

2. 「復活祭、1916年」イエイツの大戦詩か？

第一次世界大戦に対して距離を置いていたイエイツも、大戦中に起こった、1916年の復活祭蜂起と、それに続く性急な、イギリスによる首謀者の一斉処刑に対しては、ほとんどのアイルランド人と同じように驚愕し戸惑い、戦争詩を書かずにはいられなかった。最初無名の市民たち(“them”)が、詩が進むにつれ個性を付与され(“That woman” “this other” …)、最後では固有名詞を挙げられてその犠牲が顕彰されるエレジーの体裁になっている。「恐ろしい美が生まれた」(“A terrible beauty is born”)という有名なりフレインには、暴力に対するイエイツの愛憎がよく表れている。この詩「復活祭、1916年」(‘Easter, 1916’)を書いたのは1916年5月から9月の間で(完成させたのは1916年9月25日クール・パークで)¹⁰、彼がモード・ゴンとフランス北部のカルヴァドスに滞在している時であった。詩はわずか25部刷られただけで、1920年10月のイギリスの『ニュー・ステイツマン』誌に印刷され、次いで1921年の詩集『マイケル・ロバーツと踊り子』(Michael Robartes and the Dancer)に入って、一般に知られるようになった。¹¹

この詩を執筆後すぐに出版せず、仲間うちで読むだけにとどめたのはなぜだろうか？ イギリスに直接言及している箇所は、終わりの方の「いろいろしたり言ったりしたけれど、／イングランドは約束を守るかもしれない(のだから、彼らの死は無駄ではなかっただろうか?)」(“For England may keep faith / For all that is done and said.”)だけである。ジョン・レドモンドの思いを代弁しているかに思える言葉である。アイルランド自治法を約束通りイギリスは実行するかもしれないと言っているだけであるから、イギリスを怒らせることはないと思われる。ましてや、アイルランドのリパブリカンに怒らせるような詩でもない。¹² しかし、イエイツは詩が広まることを控えた。この詩が1919年発表の詩集『クール湖の野生の白鳥』(The Wild Swans at Coole)の目次リストから外されたのは、エドナ・ロングレーの推測によると、「戦争詩を求められて」やグレゴリーのエレジーと一緒にこの詩集に並ぶことを控えたからである。¹³ 大戦についての詩は書かないという宣言は、実際の大戦のコンテキストを離れた三つのグレゴリーのエレジーとは共存しえても、アイルランドの大戦詩とも言うべき、(大戦が引き金となって起こった)復活祭蜂起の詩と並べることははばかられたのであろう。

こうして「復活祭、1916年」は、『クール湖の野生の白鳥』(1919)ではなく、『マイケル・ロバーツと踊り子』(1921)に、「16人の死者たち」(‘Sixteen Dead Men’)や「バラの木」(‘The Rose Tree’)等の復活祭蜂起に関係する詩群と、大戦詩「再臨」(‘The Second Coming’)と共に入ることになった。この詩集の最後から二つ目に置かれている短い「戦時における瞑想」(‘A Meditation in Time of War’)は、1914年11月9日に書かれたもので、¹⁴「戦時」は第一次世界大戦の時を指しているが、その時に行ったというだけの、哲学的・神秘主義的な瞑想である。

イエイツが復活祭蜂起を、自治法案の撤回と大戦との関連でとらえ、イギリスに責任があると考えていたことは、1916年5月11日にレイディ・グレゴリーにあてて書いた手紙からもうかがえる。

I am trying to write a poem on the men executed—‘terrible beauty has been born again.’ If the English Conservative party had made a declaration that they did not rescind the Home Rule Bill there would have been no Rebellion. I had no idea that any public event could so deeply move me—and I am very despondent about the future. At the moment I feel that all the work of years has been overturned, all the bringing together of classes, all the freeing of Irish literature and criticism from politics.¹⁵

イエイツが公的に大戦について発言した機会は少ないが、1938年のBBCのラジオ講演で、「それから、成し遂げられたことがことごとく大戦によって揺り動かされた」¹⁶と述べていることは、この手紙で書いた思いをいだし続けていたことを示している。しかし、復活祭蜂起によって振り子が戻り、アイルランドが再び民族としての自覚に目覚めた遠因には、イエイツ等のアイルランド文芸復興運動があったと言えよう。復活祭蜂起は、一時的に抑えられていたイギリスへの怨恨と民族としての意識を想起させるものとなった。

大戦と復活祭蜂起とがイエイツの中で結びついていたあらわれとして、彼がイギリスの大戦詩とアイルランドの復活祭蜂起の詩を並べて、ダブリンで一般市民に向け講演を行おうとしていたことが挙げられる。「復活祭、1916年」を限定出版したクレメント・ショーター (Clement Shorter) あてに、1918年5月に書いた手紙に、私家版のこの詩を講演で引用してもいいかどうかを尋ねている。そして、ルーパート・ブルック (Rupert Brooke) やイギリスの戦争詩も引用するつもりで

あると書いている。結局この計画はすぐに頓挫してしまった。同じ5月のショーターあての手紙に、その理由を次のように説明している。

... times are too dangerous for me to encourage men to risks I am not prepared to share or approve. If the Government go on with conscription there may be soon disastrous outbreaks—I doubt the priests and the leaders being able to keep the wild bloods to passive resistance.¹⁷

イギリスの大戦詩と復活祭蜂起の詩とを並べて論じることには、アイルランドに徴兵制導入が検討されている最中にさらなるリスクを生むと考えたのである。(ちなみに、オーウェンの詩は、彼の死後1920年に同じ戦争詩人のサスーン (Siegfried Sassoon) がオーウェン詩集を出すまで、一般に読まれてはいなかったもので、「イギリスの戦争詩」にオーウェンは入っていなかったはずである。)

3. 西部戦線のアイルランド義勇兵

徴兵制に反対したことが、数少ない第一次世界大戦とイエイツとのかかわりである。ダブリンの戦争目的委員会のメンバーに頼まれて、イギリス自由党の元大法官ホールデイン (Richard Haldane) あてに、アイルランドへの徴兵制を実施しないように頼む、力のこもった長い手紙を18年10月7日に書いている。初めの方と後の方を引用すると、

I have met nobody in close contact with the people who believes that conscription can be imposed without the killing of men, and perhaps of women. ... it seems to me a strangely wanton thing that England, for the sake of fifty thousand Irish soldiers, is prepared to hollow another trench between the countries and fill it with blood. If that is done England will only suffer in reputation¹⁸

徴兵制適用がいかにか的を外れかを指摘し、イギリスに対する憎悪を新たに生み出すだけであって、イギリスとアイルランドの間での新たな戦いの火種になることを予見している。ホールデインの迅速な対応のおかげで、アイルランドに強制することはいつも成功しないことを政府が再認識して、実施は見送られた。¹⁹ この

頃のイエイツは何をしていたかという、1916年7月1日ソンムの激戦が始まった日に、モード・ゴンに三回目で最後の求婚をし、17年にはバリリー塔を買い、イズールト・ゴンに求婚した後、10月にジョージ・ハイド＝リーズ (George Hyde-Lees) と結婚、18年にはイギリスとアイルランドを転々としながら、バリリー塔の修復工事をしている。

この手紙で塹壕戦の比喻を使ったイエイツには、すでに大陸の戦場で命を落としたアイルランドからの義勇兵がいることがどれくらいの意味を持っていたのだろうか。アイルランドは全体で、第10アイルランド師団（南部ナショナリストとプロテスタント）、第16アイルランド師団（南部ナショナリスト）、第36アルスター師団（ユニオニスト）と、三つの師団を編成している（もっとも、このアイデンティティは、激戦で戦死者が増えるにつれ、新しい兵力が投入されて失われていく）。これらは陸軍元帥キチナーの呼びかけでつくられた素人の志願兵から成る「新陸軍」であった。南部3地方からは、グレゴリーのようなプロテスタント・アセンダンシーだけが進んでイギリスに戦争協力しただけではなく、志願者にはプロテスタントでユニオニスト²⁰もいれば、カトリックもいた。カトリックの志願兵については、レドモンドの出兵要請に応じてアイルランド自治獲得のために入隊した人たちの他に、平時同様「経済的安定と地位」を求めて英軍に入隊する者も多かった（「緑色の英国兵」“green redcoats”）²¹。レドモンドの弟ウィリーは、53才という年齢ながら、南北共闘して帝国に戦争協力することが「よりよい国」をつくることになると信じ、若者たちが続くことを期待して、第16（アイルランド）師団に少佐として入隊して、戦地に赴いた。復活祭蜂起が起きた時憤激し、急進化したアイルランドの世論が自分たちを裏切り者扱いするのではないかと感じている。ウィリーが倒れたのは、1917年6月16日ベルギーのメシーヌ・リッジであるが、ここは、彼が属する第16（アイルランド）師団と第36（アルスター）師団が文字通り「サイド・バイ・サイド」で戦い、彼の願った南北共闘が実現した地のひとつである。²²

同じく戦死したユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンの経済学教授で詩人、エッセイスト、34才のトマス・ケトルは、大戦勃発時『デイリー・ニューズ』の戦争特派員としてベルギーにいて、ドイツ人の残虐行為を目の当たりにし、アイルランドに戻って入隊した。中尉の地位を与えられ、戦地勤務より新兵募集に向いていると判断されて、志願兵として大戦に参加することの道徳的意義を説いて各地を回った。ケトルは復活祭蜂起の時まだダブリンにいて、自分が努力して

きたことを破壊するものと憤激したが、首謀者たちの処刑（トマス・マクドナやピアスは彼の友人）を聞いてイギリス軍への幻滅を味わう。しかし、すでに戦っているアイルランド兵士と一緒に戦いたいという願いがかなって、第16（アイルランド）師団に加わり1916年7月14日にフランスへ出発した。すでに始まっていたソンムの激戦に、第36（アルスター）師団に替わって投入される。が、9月には戦死。復活祭蜂起については、「これらの男たちは英雄もしくは殉教者として歴史に残るだろう。そして私は一もし残るとしたら—いまましいイギリス将校として残ることになるだろう」と予言している。²³ 今ケトルの胸像は、議論の末、1937年セント・ステイーヴンズ・グリーンに設置され、「詩人、エッセイスト、愛国者」と記されているが、復活祭蜂起の首謀者たちと比べれば、ほとんど忘れられた存在である。

ケトルは出征の理由を、アイルランドの義務は国に対してだけではなく、世界に対しても負うべきであり、どんなことがあっても、アイルランドは名誉と正義の道を歩まねばならない、と死後出版された著書に記している。²⁴ 彼の目はイギリスではなく、ヨーロッパ、そして世界に向いていて、その中で果たすべき義務は、帝国主義の侵略を受けているセルビアやベルギーのために戦うことだと考えたのである。ケトルは出征の理由を、戦場で三才の娘にあてて書いたソネットで次のように述べている。

Know that we fools, now with the foolish dead,
Died not for flag, nor King, nor Emperor
But for a dream, born in a herdsman's shed,
And the secret Scripture of the poor.
(from 'To My Daughter Betty, the Gift of God')²⁵

「われわれ馬鹿者たち」という言葉は、同胞がイギリスに処刑された後にイギリス軍として戦っていることを自嘲して言ったものであるが、蜂起を企てた人たちと同様に、アイルランドの夢を追い求めて戦ったことを伝えようとしている。

イエイツは「復活祭、1916年」を書いた時、ソンムの激戦やそこで戦うアイルランド義勇兵のことを知っていたはずである。しかし、塹壕で死んだ彼らについて詩を書くことはなかった。詩人で神秘主義者のAEことジョージ・ラッセル (George Russell) は、蜂起と大戦それぞれで死んだアイルランド人を悼む詩「挨

掬—アイルランドを愛して死んだ知人たちの思い出のために」(‘Salutation—*To the Memory of Some I knew who are Dead and who Loved Ireland*’) を書いた。それぞれ三人の名前をあげ、大戦の死者にウィリー・レッドモンドとトム・ケトルを含めている。1917 年 12 月の『アイリッシュ・タイムズ』に発表されたが、まだ公には出版されていなかったイエイツの「復活祭、1916 年」を読んでいて、それに呼応して書いた可能性もある。最後の節はこうにケトルに呼びかけている。

*You who have fought on fields afar,
That other Ireland did you wrong
Who said you shadowed Ireland's star,
Nor gave you laurel wreath nor song.
You proved by death as true as they,
In mightier conflicts played your part,
Equal your sacrifice may weigh
Dear Kettle, of the generous heart.*²⁶

ケトルは死んだからこそ復活祭の叛徒と同様信義を尽くした(5 行目)というのは、公平を欠く表現だと思われるが、イエイツの詩の陰に隠れた大戦の犠牲者たちを、顕彰することによってバランスをとろうとした詩である。しかし、大勢は、ガリポリや西部戦線で戦った 20 万人にもものぼるアイルランド義勇兵をアイルランド人の記憶から消す方向に進んだ。蜂起の首謀者たちを処刑したイギリスの軍隊に入って戦ったアイルランド兵は、共和主義者にとって忘れたくない存在であった。反対に、アルスターのユニオニスト達にとっては、ソンムで戦った第 36 (アルスター) 師団は英雄であり、北アイルランドでは大戦は忘れられることなくいろいろな形で顕彰されてきている。

4. はずされた大戦詩

大戦が休戦条約の締結でようやく一段落したと思う間もなく、アイルランドでは、自治法実施が凍結したことをめぐって混乱が生じ、英愛戦争 (Anglo-Irish War, 1919-21) が起こる。イギリスからの分離を求める急進派、「アイルランド共和国軍」(IRA: Irish Republican Army) のゲリラ活動が激化するのに対抗して、イ

ギリスから送り込まれた在郷軍人から成る警察組織ブラック・アンド・タンズや、王立アイルランド警察隊 (RIC: Royal Irish Constabulary) が暴動の鎮圧にあたっていた。イエイツは、アイルランドの人たちが逆に、それら武装警察部隊がふるう暴力の巻き添えになる様子を見て、「報復行為」(‘Reprisals’, 1920) という詩を書いた。「報復行為」というのは、IRA がイギリスの諜報部員とおぼしき人物たちを殺したことに対する、武装警察²⁷の市民への報復を指している。イギリス政府の「組織的テロリズム」だったという説もある。

「報復行為」は、戦死したグレゴリーをイタリアの墓から呼び出し、故郷のキルトタンの現状を見るように呼びかけ、大戦に協力したことの大義を問い直している点で特筆すべき詩である。全部を引用する。

*Some nineteen German planes, they say,
You had brought down before you died.
We called it a good death. Today
Can ghost or man be satisfied?
Although your last exciting year
Outweighed all other years, you said,
Though battle joy may be so dear
A memory, even to the dead,
It chases other thought away,
Yet rise from your Italian tomb,
Flit to Kiltartan cross and stay
Till certain second thoughts have come
Upon the cause you served, that we
Imagined such a fine affair:
Half drunk or whole-mad soldiery
Are murdering your tenants there.
Men that revere your father yet
Are shot at on the open plain.
Where may new-married women sit
And suckle children now? Armed men
May murder them in passing by*

Nor law nor parliament take heed.
Then close your ears with dust and lie
Among the other cheated dead.²⁸

前半 14 行目までは、「アイルランドの飛行士は…」で賞揚したグレゴリーの立派な戦死さえも間違っただけではなかったかという疑念を呈し、後半では、大戦中イギリスに協力したにもかかわらず、そのイギリスにアイルランドの人々が苦しめられ、惨殺さえされている現状を訴えている。12～14 行目の「立派なことをしてくれたと思っていたのだけれど、／君が殉じた大義について／しっかりと考え直す（まで）」というのは、イギリスの軍服を着て大戦で戦ったことが果たして正しかったのかどうか、を再考するように亡霊に促す言葉である。つまり、グレゴリーの戦死は犬死ではなかったのか、イギリスのために戦うという大義そのものが正しかったのだろうかという問いかけ、前詩を撤回するパリノードと言える内容になっている。14 行目の最後のコロンの下で、大義の内実である故郷の現実をグラフィックにつきつけ、最後の 2 行で、現状を見たら同じように「だまされた死者たち」(“cheated dead”)のもとに帰るよう促す。「アイルランドの飛行士…」では、イギリスのためではなく、キルタータンの貧しい農民のために戦うというカモフラージュをしていたが、それをこの詩ではとり除いてしまった。そして、イギリスのために戦ったのに、イギリスはこのような報復をしているのではないかという訴えとなっている。

この詩は、「復活祭、1916 年」と同じように、アイルランドの混乱とイギリスの所業を大戦の文脈でとらえていると言える。従って、この詩も大戦詩として位置づけられるが、「復活祭、1916 年」よりもさらに出版に至るまでの道のりが長かった。この詩が書かれたのは、1921 年、ブラック・アンド・タンズの蛮行がアイルランドで繰り返されている時で、イエイツは、レイディ・グレゴリーが蛮行を伝える記事を投稿している左翼系の週刊誌『ザ・ネイション』なら、リパブリカンの主張を取り上げてくれるだろうと思って、この詩を送った。ところが、レイディ・グレゴリーの方からロバートの未亡人の気持を思い遣って、取り下げるようにとイエイツに申し出があり、彼はそれを受け入れたのである。そのため、以後イエイツの詩集に載ることもなく、日の目を見たのは、イエイツの死後実に十年以上経った 1948 年に、『ラン』(*Rann: An Ulster Quarterly of Poetry*) という思いがけない出版物上であった。²⁹ 今もイエイツ全詩集には入っておらず、異文

版 (*The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*, 1956) か、注釈集、または戦争詩のアンソロジーに入っているにすぎない。

イエイツは、英愛戦争やそれに続く内乱 (Civil War, 1922-23) では、目と鼻の先で戦禍を経験し、オーウェンの詩を思わせるような戦争詩(「1919 年」‘Nineteen Hundred and Nineteen’、内乱時の瞑想)‘Meditations in Time of Civil War’)すら書いている。大戦の余波として位置づけられる、復活祭蜂起、英愛戦争、内乱に触れた戦争詩はイエイツの詩集におさめられているが、大戦と英愛戦争に係する「報復行為」は今もはずされたままである。彼は、大戦について「沈黙を守る」という詩を書き、その後大戦で死んだグレゴリーのエレジーを書いても、実際の彼の出征理由を隠し、ルネサンス的英雄像に仕立て上げた。ところが、「報復行為」は、故郷がイギリス軍に蹂躪されている様子をグレゴリーの亡霊に見せて、彼の出征理由そのものを問題にした詩である。「報復行為」は大戦参加に疑義を申し立て、イギリスに協力した結果がもたらしたアイルランドの惨状を訴える、彼の本音の詩であると言えるのではないだろうか。

アイルランドが長らく、イギリス軍に入隊して戦った兵士について沈黙を守ってきたのは、後のアイルランドの民族主義運動と相いれなかったからである。復活祭蜂起が起きた時、ウィリー・レッドモンドやトマス・ケトルが予想したように、イギリスに加担したアイルランド兵士は、その動機が何であれ、裏切り者のように見なされ、アイルランド独立の歴史の枠外に置かれてきた。イエイツの「報復行為」は、アイルランドが考えたくない「だまされた死者たち」のことを問題にした詩であるがゆえに、長く出版を抑えられていたのである。「報復行為」の出版史から、この問題に早い段階で着目した、テレンス・ブラウンは、次のように書いている。

大戦は、アイルランド人の生活の中で語られないことの一つであり、多くの家庭のクロゼットで骸骨 [“a skeleton in the closet”「内輪の恥」] をがたがたいわせる何かであり、アイルランドの犠牲者を永遠に埋葬してくれるような完璧な表現を今でも見つけられない何かである。³⁰

結び

しかし、ようやく沈黙が破られ、クロゼットに隠されていた骸骨が明るみに出されるようになった。1980 年代後半から、広く大戦研究の変化のなかで、ア

イルランドと大戦の関係が見直されるようになり、アイルランド義勇兵の忘れられた声を取り戻す研究が活発になってきている。南北が一緒に戦ったメシーヌには、休戦から 80 年目の 1998 年に、南北融和のしるしとして、戦死者や行方不明者を追悼する平和の塔が建設された。アイルランド国内に目をうつすと、休戦後の 1919 年に提案されながら、ようやく 1988 年に完成した Irish National War Memorial Gardens は、ダブリンの西のはずれのアイランドブリッジにあり、両大戦で戦って死亡したアイルランドの人々を追悼する記念碑と庭園からなる。両大戦以外の、アイルランドの自由のために命を落とした人々を追悼する場は、1966 年にオコンネル・ストリートの北端につくられた Garden of Remembrance である。

アイルランドへの徴兵制撤回を頼んだイエイツが、大戦で戦ったナショナリスト義勇兵に言及した上院での演説（1927 年 3 月 9 日）がある。これらの人々のために、「休戦記念日」をもうけ、メリオン・スクエア（最初はこちらに大戦記念碑の設置が計画されたが、結局市内から離れた今のアイランドブリッジに最終的に変更になった）に「堂々たる記念碑」を建立することに賛成はしている。しかし、それらはあくまで義勇兵の子孫のためであって、それらが国の「永久的な政治的示威」になることを望んではいない。³¹

大戦が起きた時、アイルランドの人々の反応がさまざまであったように、アイルランドにおいては今も、大戦の記憶や追悼の仕方、記念碑のあり方、そして大戦文学をめぐってもさまざまなとらえ方がある。アイルランドにとっての大戦文学とはまず、ケトルの詩やエッセイ、フランシス・レドウィッジ (Francis Ledwidge) の詩、パトリック・マギル (Patrick MacGill) の詩や小説のように、従軍した兵士が残した文学であろう。そして、オケーシーが書いたような大戦についての文学。しかし、大戦とアイルランドとのかかわりは、大戦に続く、強力なアイルランドのナショナリスト・イデオロギーによってかき消され、大戦で戦ったアイルランド兵のことは思い出したくない過去になってしまった。歴史家がその過去を掘り起し始めたように、文学研究者の間でもアイルランドの大戦文学の見直しが始まっている。その見直しには、大戦そのものに関する作品だけではなく、大戦を契機として起こった復活祭蜂起や、休戦条約締結後の英愛戦争や内乱についての文学も含められている。³² その意味からも、1914 年以降にイエイツが書いた詩の多くはアイルランドの大戦詩と言えるのである。

1916 年 4 月 24 日にイギリスに反旗を翻して後に処刑されたナショナリストと、

それから二か月余りの 7 月 1 日に始まったソンムの戦いで、イギリスに加担して戦ったアイルランドの兵士はどう折り合いをつければいいのだろうか？ その顕彰の仕方をめぐっても、決着はまだついているとは言えない。

〔付記〕 本稿は、2015 年 11 月 7 日、西南学院大学で開催された、日本イエイツ協会第 51 回大会での研究発表を基にまとめたものである。さまざまな段階で有益なコメントをくださった皆様に感謝します。

注

¹ 拙著『第一次世界大戦とモダニズム—数の衝撃^{ショック}』（世界思想社、2008 年）第一章参照。

² 小関隆「西部戦線のアイルランド・ナショナリスト—戦場の共有は和解の契機たりうるか?」、山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『現代の起点 第一次世界大戦 第 2 巻 総力戦』（岩波書店、2014 年）、32 頁。

³ John Horne, ed., *Our War: Ireland and the Great War* (Dublin: Royal Irish Academy, 2008), p. 3. アイルランドから大戦に参加した兵士は長らく不問に付されてきたが、1980 年代後半からアイルランドと大戦の関係の再検討が始まり、14 年から 18 年まで、アイルランド全土からプロテスタント、カトリックにかかわらず 15 万から 20 万人が出征し、少なくとも 3 万 5 千人が戦死したと言われている。Cf. David Fitzpatrick, ed., *Ireland and the First World War* (1986); *The Two Irelands 1912-1939* (1998). Myles Dungan, *Irish Voices from the Great War* (1995); *They Shall Not Grow Old: Irish Soldiers and the Great War* (1997). Keith Jeffery, *Ireland and the Great War* (2000). Adrian Gregory & Senia Pașeta, *Ireland and the Great War: "A War to Unite Us All"?* (2002) 他。

⁴ Jonathan Allison, 'Introduction: Fascism, Nationalism, Reception', Jonathan Allison, ed., *Yeats's Political Identities: Selected Essays* (Ann Arbor: U of Michigan P, 1996), p. 6.

⁵ R. F. Foster, *W. B. Yeats: A Life*, vol. II (Oxford: Oxford UP, 2003), p. 5. John Quinn への手紙 (1915 年 6 月 24 日)。

⁶ James Longenbach, *Stone Cottage: Pound, Yeats & Modernism* (New York: Oxford UP, 1988), p. 128. A. Norman Jeffares, *A New Commentary on the Poems of W. B. Yeats* (London: Macmillan, 1984), p. 160.

⁷ Longenbach, p. 118.

⁸ Foster, pp. 117-18.

⁹ Foster, pp. 118-19.

¹⁰ Marjorie Perloff, “‘Easter, 1916’: Yeats’s First World War Poem”, *The Oxford Handbook of British & Irish War Poetry*, ed. Tim Kendall (Oxford: Oxford UP, 2007), p. 230. 論文題名が示すように、Perloffはこの詩を大戦詩と位置づけている。

¹¹ Jeffares, p. 190.

¹² W. H. Auden, ‘The Public v. the late Mr. William Butler Yeats’, *The English Auden: Poems, Essays, & Dramatic Writings, 1927-1939*, ed. Edward Mendelson (London: Faber & Faber, 1977), p. 390. “To succeed at such a time in writing a poem which could offend neither the Irish Republican nor the British Army was indeed a mastery achievement.”

¹³ Edna Longley, *Yeats and Modern Poetry* (New York: Cambridge UP, 2014), p. 114. Ben Levitasによれば、ルシタニア号の沈没で死亡した Sir Hugh Lane の現代絵画をイギリスから購入するのを確実にしたいという思惑が働いた可能性があるという。Ben Levitas, ‘War, 1914-1923’ in David Holdeman & Ben Levitas, eds., *W. B. Yeats in Context* (New York: Cambridge UP, 2010), p. 50. また、Stephen Parrish の草稿研究 (Cornell Yeats series) によれば、イエイツはしばらくの間は、この詩集を復活祭蜂起の詩で始め、大戦については書かないという詩で終える大胆な計画を考えていたという。Referred to in Wayne K. Chapman, ‘Yeats’s Dislocated Rebellion Poems and the Great War: The Case of *The Wild Swans at Coole* and *Michael Robartes and the Dancer*’, *Yeats Annual 16*, ed. Warwick Gould, p. 75.

¹⁴ Jeffares, p. 207.

¹⁵ *Letters*, p. 613.

¹⁶ ‘Modern Poetry: A Broadcast’, *Essays and Introductions* (London: Macmillan, 1961), p. 449.

¹⁷ *Letters*, p. 649. その前の手紙は p. 648.

¹⁸ Foster, p. 132. Dudley Sommer, *Haldane of Cloan: His Life and Times, 1856-1928* (1960), pp. 356-57 からの孫引き。

¹⁹ Levitas, p. 50. Sommer, p. 358 からの孫引き。

²⁰ 有名なのは、ダブリンのラグビー・フットボール・ユニオン会長が集めた若い運動家たちで、ロイヤル・ダブリン・フュージャリア連隊、第7大隊、D 中隊を結

成して、ガリボリの戦場へと派遣された。オスマン帝国の反撃に会い、攻撃作戦は失敗、1915 年 2 月に始まったこの戦闘は、中隊の 70 パーセント以上が死亡して、わずか三週間で終わる。その中の一人 Henry Hanna が *The Pals at Suvla Bay* (1907; 2002) という回想記を出版。

²¹ Peter Karsten, ‘Irish Soldiers in the British Army, 1792-1922: Suborned or Subordinate?’, *Journal of Social History*, xvii (1983), p. 54.

²² 小関隆 前掲論文、39-47 頁。森ありさ「自治から共和主義への転換点—ウィリー・レドモンド従軍からクレア補欠選挙へ」、後藤浩子編『アイルランドの経験—植民・ナショナリズム・国際統合』法政大学出版局、2009 年、304-05 頁。

²³ ケトルの伝記的事項は、Myles Dungan, *They Shall Grow Not Old: Irish Soldiers and the Great War* (Dublin: Four Courts P, 1997), pp. 119-28、ケトルの言葉は J. B. Lyons, *The Enigma of Tom Kettle* (1985) に引用。Fran Brearton, *The Great War in Irish Poetry: W. B. Yeats to Michael Longley* (New York: Oxford UP, 2000), p. 20 からの孫引き。

²⁴ T. M. Kettle, *The Ways of War* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1917), pp. 73-74.

²⁵ Gerald Dawe, ed., *Earth Voices Whispering: An Anthology of Irish War Poetry 1914-1945* (Belfast: Blackstaff P, 2008), p. 55. 初めてのアイルランド戦争詩集。

²⁶ Dawe, p. 20.

²⁷ この武装警察をブラック・アンド・タンズであるとしている注釈が多いが、Levitas, p. 54 によれば、1920 年 11 月 1 日の無差別射撃による市民の殺害は、RIC の仕業だとしている。次の「組織的テロリズム」も Levitas, p. 54 による。

²⁸ Peter Allt & Russell K. Alspach, eds., *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats* (Basingstoke: Macmillan, 1956), p. 791.

²⁹ Terence Brown, ‘Who Dares to Speak? Ireland and the Great War’, Robert Clark & Piero Boitani, eds., *English Studies in Transition: Papers from the ESSE Inaugural Conference* (London: Routledge, 1993), pp. 226-27.

³⁰ Brown, p. 228.

³¹ Donald R. Pearce, ed., *The Senate Speeches of W. B. Yeats* (Bloomington: Indiana UP, 1960), pp. 134-35.

³² Fran Brearton (注 23) や Marjorie Perloff (注 10) のように。

After Keeping Silent: Yeats and the First World War Reconsidered

Eiko Araki

W.B.Y. wrote a poem entitled ‘A Reason for Keeping Silent’ when asked to contribute to a book aimed at collecting funds for Belgian refugees. True to his word, he did not write much about the First World War except for the three elegies dedicated to Robert Gregory, son of his patroness Lady Gregory, who was killed in action in the later stage of war. Among these elegies the most famous, and much anthologized poem ‘An Irish Airman Foresees His Death’ depicts Gregory at the time of his death as a hero who fought for his countrymen, not for “king and country”. The other two poems refer to the First World War only obliquely.

Soon after the Armistice when the Anglo-Irish War devastated Ireland he wrote another poem ‘Reprisals’ in which Gregory is summoned from his grave to watch a disastrous scene in his country. Yeats thinks England is to blame for this, and brings down the hero of the First World War who gladly volunteered to fight for England. This poem, however, was withdrawn from publication at Lady Gregory’s request. It was finally published in a poetry magazine in 1948 only after Yeats’s death, and even now is not included in his collected poems.

‘Reprisals’ brings into light a touchy problem of the Irish contribution to the war effort: as many as 200,000 men volunteered to fight for England for different reasons, some for the application of Home Rule, and some for its exclusion. Robert Gregory, as a descendant of Ascendancy and anti-Sinn Féin, fully supported the British cause in fact. That is why Yeats had to alter the portrait of Gregory in ‘An Irish Airman...’ After the Easter Rising, and the two wars (the Anglo-Irish War & the Civil War) when Irish people were awakened once again to the Irish cause, no one wanted to speak about the Irish “cheated dead”.

Though Yeats refused to write about the First World War, he did in fact write many war poems concerning Ireland, which can be considered part of First World War literature in Ireland.

W. B. Yeats のユダ観の変遷について

伊 東 裕 起

W. B. Yeats は 1918 年 1 月 14 日付の Lady Gregory 宛の手紙で、Dublin の街角で Sinn Feiner と Judas が会話する戯曲の構想を語った。

Dear Lady Gregory . . . I . . . am hesitating on a new one, where a Sinn Feiner will have a conversation with Judas in the streets of Dublin. Judas is looking for somebody to whom he may betray Christ in order that Christ may proclaim himself King of Jews. . . .¹

この戯曲は結局書かれなかったが、ここで一つ、注目すべき点がある。この時点でのイエイツのユダ観である。イエイツはユダの裏切りの理由がユダヤの民族主義に基づくものだとしている。つまり、ユダはユダヤ民族をローマの圧政から解放する民族主義的なメシアを望んでおり、イエスをユダヤ民族の王として目覚めさせるために彼はイエスを売った、という解釈である。しかし、イエイツは後に *Calvary* において、神の手の中にない自由を求めてキリストを裏切った者としてユダを描くことになる。イエイツのユダ観は、どのように民族主義者から変わっていったのだろうか。

荒井献によれば、民族主義過激派としてのユダ観は、ユダの名につく「イスカリオテ」を「短刀を持った刺客」、すなわちシカリ派（熱心党员と混同されたユダヤ民族主義の過激派）と解釈することからきたものであるという。² またそのような見方は近代（特に 18 世紀）以降に盛んになった見方であり、その代表的なものとして Goethe が *Dichtung und Wahrheit* で示した解釈があるという。³ ゲーテは次のように書く。

すなわちユダは、他のもっとも賢明な弟子たちと同じく、キリストが統治者として、民の長として名乗りを上げるものだと確信し、これまでためらいを克服できないでいる主を、力ずくで行動させようと思い、そのために、同様

にこれまで動こうとはしなかった僧侶たちと実力行動にかり立てた、というのである。⁴

Edward O'Shea のイエイツ蔵書目録 *A Descriptive Catalog of W. B. Yeats' Library* (New York: Garland, 1985) にゲーテの『詩と真実』は見当たらないが、Marjorie Perloffによると、イエイツは実際にゲーテの『詩と真実』を読んでいたという。⁵ イエイツのユダ観は、この時点ではゲーテのこの解釈にならっているようである。

イエイツはこの時期、妻 George の手による自動筆記との対話を繰り返し、日々思索を深めていた。特に 1918 年 1 月 26 日付および 27 日付の対話ではユダについての対話が多く見出される。ユダについての議論を始めた 1918 年 1 月 26 日付の自動筆記との対話メモでは、イエイツは “Judas pities jewish [*sic*] race & so would have christ [*sic*] become their king?”⁶ と自動筆記に尋ねている。これはこの時点のイエイツがまだ民族主義的なユダを考えていたことを示している。しかし自動筆記はその解釈を否定した。

また、翌日 1 月 27 日の対話では、自動筆記は次のように言う。

24. because I am now going to write about your Judas
had to say something
Dont [*sic*] make your Judas the conventional bad man—make him the weak man
who achieves a supreme good through his temptation.⁷

自動筆記はこのように書き、イエイツのユダ観を変えようとする。実際、イエイツのユダ観も、民族主義者から変化してゆく。

同日 1 月 27 日の対話では、自動筆記は独自のユダ観について、さらに踏み込んだ話をする。そこで自動筆記はユダを *antithetical* (subjective)、Christ を *primary* (objective) とし、*primary* (objective) なキリストは *antithetical* (subjective) なユダの絶望を憐れむことができないとする。

2. Why do you call despair of Judas Antithetical [*sic*]
2. At 8—he hanged himself through despair of antithetical nature—christ pities
primary despair
....

5. Why does not C[hrist] pity the despair of Judas
5. He pities only primary despair—he does not pity antithetical despair because
his mission is the objectifying of life the spiritualising of it and he pities
therefore only the objective⁸

自動筆記によれば、*primary* (objective) な絶望とは “despair over sin poverty ill health loss of objective nature [*sic*]” である。⁹ *primary* (objective) な絶望は、罪や窮乏や病という、いかにも憐みの対象となりそうな外的な苦境に対する絶望という側面を持つとされている。一方、自動筆記の定義によると、*antithetical* (subjective) な絶望は “despair over self & relation of self to world of self analysis self knowledge [*sic*]” であるという。¹⁰ それに対してイエイツは、この自動筆記の定義に対して “Yet despair over self apart from sin” と尋ね、その通りだという答えをもらう。¹¹ この説明から明確な定義を引き出すのは難しいが、*primary* (objective) な絶望が外的な苦境に対する絶望という側面が強いものに対して、*antithetical* (subjective) な絶望とは内的な絶望と言えようか。もはや、イエイツは自動筆記に対してユダを民族主義者とみなした質問はしない。イエイツはこの二項対立を受け入れ、それを戯曲『カルヴァリ』に取り入れた。イエイツは『カルヴァリ』の解説でユダの絶望を “intellectual despair that lay beyond His sympathy” と記した。¹² これは自動筆記との対話の内容に合致している。このように、イエイツのユダ観は自動筆記との対話を通して明確に変わっていったことがわかる。

『カルヴァリ』において、ユダの *antithetical* (subjective) な絶望は救済されない。少なくとも、キリストの贖罪の死は彼のためではない。ユダは “I, Judas, and no other man, and now / You cannot even save me” という言葉をキリストに投げかける。¹³ 『カルヴァリ』においてユダは “save” されて(すなわち贖われて)はいないが、そもそも “save” される必要がない精神の自由を、自ら神の子を売り渡すという行為によって作り出しているのだ。

本研究ノートは、2015 年 11 月 8 日に西南学院大学で開かれた、日本イエイツ協会第 51 回大会の研究発表を下地にしたものである。

Notes

- ¹ William Butler Yeats, *The Letters of W. B. Yeats*, ed. Allan Wade (London: Hart-Davis, 1954), 645.
- ² 荒井献『ユダのいる風景』（岩波書店、2007）、63-64 頁。
- ³ *Ibid.*
- ⁴ ゲーテ『詩と真実：第三部』、山崎章甫訳（岩波書店、1997）、309 頁。
- ⁵ Marjorie Perloff, 'Yeats and Goethe,' *Comparative Literature*, 23: 2 (1971), 125.
- ⁶ Steve Adams, Barbara Frieling, and Sandra Sprayberry, eds., *Yeats's Vision Papers*, vol. I, *The Automatic Script, 5 November 1917–18 June 1918* (London: Macmillan, 1992), 291.
- ⁷ *Ibid.*, 294.
- ⁸ *Ibid.*, 292.
- ⁹ *Ibid.*
- ¹⁰ *Ibid.*, 292-93.
- ¹¹ *Ibid.*, 293.
- ¹² Yeats, *Four Plays for Dancers* (London: Macmillan, 1920), 136-37.
- ¹³ Yeats, *The Collected Plays of W. B. Yeats* (New York: Macmillan, 1967), 455.

《シンポジウム報告》

イエイツと 1930 年代 — オーデン・グループを参照枠として —

浅井雅志

イエイツの生涯の最後の 10 年である 1930 年代は、世界恐慌とファシズムの台頭に象徴される混乱の 10 年であると同時に、ポスト・イエイツ世代の旗頭である「オーデン・グループ」が台頭して目の前の先達であるイエイツに愛憎交錯する眼差しを投げかけた時代でもある。このシンポジウムでは、このグループの詩人たちのイエイツ観と、それへのイエイツの「返答」とを付き合わせて、イエイツのこの時代に対する態度の「功罪」をあぶりだしてみたい。

オーデンのイエイツ観は錯綜している。‘Yeats: Master of Diction’ (1940) では“simple, sensuous and passionate diction”を使う究極のマスターだったと持ち上げつつも、詩人に求められる「道徳的責務」を回避して独りよがりに美的世界に沈潜したとも指摘する。‘Yeats as an Example’ (1948) でも、時代に対峙する姿勢は模範になるといつつ、自己の内面ほどには人間も含めた外界の存在に確信がもてず、それが彼に一貫して見られる内面の「外在化欲求」を生み出し、ナショナリズムやオカルトや劇場などの運動へ駆り立てたという。

マクニースのイエイツ観も同様に複雑だが、アイリッシュということもあってか、擁護的な姿勢が際立つ。詩人の仕事は現在起こっているリアルなものを主題とすることだが、イエイツは普通の人間の感情を共有も代弁もせず、詩を生から切り離す「詩人の詩人」であったと批判する一方、以下の点で肯定的に評価する。

1. “Romantic habit of ‘flying up into the eternal gases’” から晩年何とか地上に舞い戻り、“dryness and hardness”をもった詩を書いた。
2. 当時を支配していたエリオットの、「世界はかくも複雑なのだから、詩人はいいたいことを表すには言語を強制したり、必要とあれば脱臼 (dislocate) させたりしなければならず、そのためにはより隠喩的、間接的に語らねばならない」という考え方に対しイエイツは、混沌とした世界に直面した詩人は、「選択し体系化するために混沌の一部を削除してよい」と考えた。
3. イエイツは耳に訴えた。われわれの世代の詩人も詩の音楽性を考慮したが、イエイツの後期の詩はわれわれの目的により叶っていた。

スペンダーは 1920 年代から 30 年代を「信じるものを喪失」した “tragic

hedonism”の時代と見、労働者の深刻な窮状に罪悪感を抱いた知識人は、それを信じたからではなく良心の呵責ゆえに共産主義に向かったという。こうした自己正当化とも自己批判とも取れる言葉と同時に、「今世紀の初頭の文学における偉大な実験者たちがいまだに私の英雄である」とも述べ、暗にイエイツの世代を称賛しているようにも見える。

デイ・ルイスも「道徳的責務」を強調し、さらには“didactic poetry”という言葉で、詩がプロパガンダになろうと、現在の事実深くかかわり、人々の声を代弁することが重要だというのが、その言葉の裏にはイエイツの立場への批判も透けて見える。

彼らに先立つ1899年、批評家ジョン・エグリントンは、「イエイツは自分自身からも自分の時代からもはるかにかけ離れ、生の事実を十分に感じとらず、芸術の中に逃げ込んでしまった」と批判し、詩人のW・ラーミニーも、「超越的な信念や感情は魂の健康に必要な点に同意するが、芸術の素材は純粋な超越主義だけであるべき点に合意できない」と評していたが、この二人の言葉は30年代以降のイエイツ批判を的確に予言していた。

すでに1898年に、ものを書き始めたころは外のものをできるだけ生き生きと描こうとしたが、「突然外的なものを描く欲求を失い、霊的かつ強く訴えない(unemphatic)本にしか関心が持てなくなった」(EI 189)と書いていたイエイツは、こうした批判に対しても、芸術は大衆のものではなく、「信念が新たになれば芸術はますます『その時代』と生から自由になり、美の中に自らを失う自由を手に入れるだろう。[……]私は、これからはすべての人間がますます、詩は『人生の批判』だという意見を拒否し、詩は隠された生の顕現だという確信を深め、いやそればかりか、絵画、詩、音楽は、永遠と会話するために地上の人間に残された唯一の手段であると考えようになるだろうと信じている」と反論している。これは時代の変遷に抗して生き残った、詩に対する彼の基本的見解である。

イエイツが30年代の世界的な激動に対して取った微妙な距離の端的な表れは、1936年に編纂出版した『オクスフォード現代詩華集』から「戦争詩人」をはずしたことである。荒木映子氏はその理由を列举し、中でもイエイツが「近代文明の産物たる数と量からなる生と死に対する衝撃」を受けたことを最重要視しているが、本稿の文脈で最も興味深い点はむしろ、「戦いの喜び」(“battle joy”)を賛美するイエイツは、その悲惨さのみ訴えていささかのヒロイズムもない反戦詩を憎んだという指摘で、氏はこれを「時代錯誤」と評している。

イエイツは戦争に限らず、全般的に戦いを個人的なエピソードの体験として、それも人生の悲劇性、そしてその悲劇がそのまま喜びであることに気付く体験として捉える傾向がある。例えば‘An Irish Airman Foresees his Death’では、“Nor law, nor duty bade me fight, / Nor public men, nor cheering crowds, / A lonely impulse of delight / Drove to this tumult in the clouds.”と、「孤独な歓喜の衝動」こそが戦いに向かう原動力だと示唆している。この考えを端的に表す言葉は、グレゴリー夫人から聞いたという“Tragedy must be a joy to the man who dies.”で、*On the Boiler* ではこう補足している。“No tragedy is legitimate unless it leads some great character to his final joy.... tragedy [is the struggle] against an immovable; and because the will, or energy, is greatest in tragedy, tragedy is the more noble; but I add that ‘will or energy is eternal delight,’ and when its limit is reached it may become a pure, aimless joy, though the man, the shade, still mourns his lost object.”ブレイクの格言に「意志」を付け加えているのは極めて重要だが、この論理でここでの問題の核心を言い換えれば、「失ったものへの嘆き」に着目するか、それとも断固たる行為が生む「純粹で目的のない喜び」を重視するか、ということになる。

‘Modern Poetry’(1936)では、「思うに、革命的な戦争詩人たちは自分たちの主題に近づきすぎて永続的な価値のある仕事ができなかった」と述べているが、「主題に近づきすぎた」とは「失ったものを嘆きすぎた」ということであろう。彼はまた、彼らは「苦悩を自分のものにした。[……]人間は鏡の裏の水銀に逃げ込むと、いかなる偉大なことも彼の精神の中で輝かなくなる」ともいうが、これはすなわち、扱う主題に近づきすぎてあまりに喪失を嘆き、苦悩を個人的なものにしてしまうと、「悲劇は死にゆく者にとって喜びである」という「真理」が見えなくなってしまうということだろう。

彼が現実から「距離」をおいたのにはむしろ他の理由もある。当時のイエイツはアイルランド国家創設の必要性に迫られ、アイルランド外の現実を直視する余裕がなかったこと、あるいは健康が衰え、世界情勢に関わるより、健康と、それに伴う性能力、そしてそれと深いつながりがあると信じていた詩的創造力の回復を優先したということなどが挙げられるだろう。しかし最も重要な理由は次の言葉に見て取れる。“Auden, Spender, all that seem the new movement look for strength in Marxian socialism... The lasting expression of our time is not this obvious choice but in a sense of something steel-like & cold within the will,

something passionate & cold.... Most of the ‘moderns’ —Auden, Spender etc. — seems thin beside the more sensuous work of the ‘romantics.’” (Foster II, 553) すなわち、ある時代が後世に残す永続的な表現は、戦争あるいはファシズムを弾劾するといった時代に直面した「誰の目にも明らかな選択」ではなく、「意志の中に潜む鋼鉄のような、情熱的で冷たいもの」のみだという信念かつ歴史意識である。この信念の象徴的な表現は、スペイン内乱が起こった1936年7月に‘Lapis Lazuli’を書いたことである。これはフォスターも言うように、同時代のさまざまな社会的事件および彼自身の健康回復の苦闘を織り込んで書かれたものだが、それらすべてを“Gaiety transfiguring all that dread”と総括している。これをフォスターは、“his alchemical power to transmute the tangle of experience and argument into pure poetic metal”と評しているが、イエイツの30年代への対峙の仕方をどう見るかは、彼のこの「錬金術の力」をどう評価するかにかかっている。彼があえて時代に反して唱えた「陽気さはあらゆる恐ろしきものを変容させる」という精神、そしてその結晶ともいべき“tragic joy”は、彼が「普遍的価値」と信じて後世に残そうとしたものであった。

オーデンの転向とイエイツ観との相互関係

山 崎 弘 行

もともと、英国国教会に属する両親の家庭に生まれたオーデンは、13才のときに堅信礼を受けて信仰告白をし、教会の正式な一員となる。ところが15才のころ、キリスト教への興味をなくし、共産主義に共鳴するにいたる。当時のヨーロッパでは自由主義的ヒューマニズムが行き詰まり、共産主義とナチズムが台頭していた。思想的に混乱したオーデンは、スペイン内戦中の1937年に共和国派に味方して宣伝放送にたずさわる。しかし、共産主義者たちにより現地のキリスト教会が閉鎖されている現実を知ると、幼い頃から慣れ親しんできたキリスト教のもつ重要性に目覚め、ナチズム批判のための正義の根拠をキリスト教の神に求めるに至る。

オーデンが初めてイエイツに批判的な姿勢を示すのは長詩‘Letter to Lord

Byron’(1936)の中である。イエイツの詩‘Parnell’s Funeral’を下敷きにした「イエイツはパーネルの心臓を自分で取って食べている」という詩行で、自治運動の指導者パーネルの英知の継承を願う循環史観の持ち主イエイツを時代錯誤的だとして揶揄している。

風刺詩‘Last Will and Testament’(1937)においても“moon”と“spittoon”(「痰壺」)といった具合に韻を踏ませることで「月の28相」の図形を用いて循環史観を展開したイエイツを茶化している。

転向の徴候が反映し始めるのは、‘The Public vs. the Late William Butler Yeats’(1939)と‘In Memory of W. B. Yeats’(1939)においてである。前者の評論は検事と弁護士がイエイツを被告にして行う法廷での弁論の形をなしている。検事はイエイツが偉大な詩人ではないと論告する。他人の言語表現に対する理解能力に欠け、社会をより正しい方向に進歩させることに役立たない、現代の最も進歩した科学的な思想に背を向けた作品を書いたからだという。弁護士はイエイツは「達人」だと反論する。時代錯誤的に見えるイエイツの詩作態度は、社会のアノミー化を克服するために「普遍的な宗教」を求めようとした結果であり、文体が明解で力強いことが示すように、イエイツは真に民主主義的な詩人である、と。後者の追悼詩では検事の否定的なイエイツ観の妥当性を認めた上で、イエイツを許そうとしている。例えば、「あなた[イエイツ]は我々と同じように愚かであった」と述べている。未来の読者はファシズムに傾斜しながらも優れた詩を書いたイエイツを帝国主義者のキップリングやクロードルを許したように許すだろうとも述べている。「何事も起こせない」詩を書く詩人であり、社会変革を目指す政治家ではないと言ってイエイツを弁護している。結論部の詩行“Follow, poet, follow right to the bottom of night”は複雑で二通りの解釈が可能である。“poet”をイエイツと解すれば、死に臨んでの悲劇的な喜びを歌った生前のイエイツを想起しながら、亡くなった後も、残された詩が読者に喜びを与えることを期待していると解釈できる。イエイツの死生観に対してオーデンが敬意を表したとする解釈である。一般の詩人と解すれば、原罪に起因する混沌とした現実社会の闇に赴き、それを詩に表現して読者を喜ばせることを要請していると解釈できる。この場合の喜びは、神に帰依することの喜びであり、悲劇的な喜びとは異なる。この詩行には普遍的な宗教を求めるイエイツの悲劇的な死生観とキリスト教的な死生観が対立しながら共存している。

転向後に書いた最初の詩‘In Sickness and in Health’(1940)でも、混沌をもた

らした原罪を引き受けて神に帰依する喜びについて語っている。宗教詩 ‘For the Time Being’ (1942) では、原罪を背負い続けながらも、神に帰依して現世を生き続けられれば、神の恵みにより喜びを味わえるはずだという思想が語られている。この詩の結末には、‘In Memory of W. B. Yeats’ の “Follow, poet, follow right to the bottom of night” という詩行を想起させる “Follow Him through the Land of Unlikeness” という詩行が用いられており、キリスト教徒に転向したオーデンの敬虔な姿が鮮明になっている。原罪をテーマとしながらも非キリスト教徒であったホーマーをお手本とするイエイツとは異なるのである。

‘Yeats: Master of Diction’ (1940) では、反時代的な世界観を近代科学の世界観と関連づける努力を怠り、1930 年代に支配的になっていた社会変革をめざす社会主義思想への共感に欠けるが、感覚的で情熱的な言葉を用いた響きの良いイエイツの詩は世界中の読者に愛読されているとして高く評価している。

‘Yeats as an Example’ (1948) ではオーデンの世代の詩人とイエイツの世代の詩人が共通に抱えている問題が浮き彫りにされている。それは社会を秩序付けるための伝統的な原理と前提が衰退し、昔なら、家族、習慣、教会、国家が行っていた人生を意味づける原理や前提の選択を個人が自由意思で意識的に行わざるを得なくなったことである。イエイツが選択した伝統的な原理に距離をおきながらも、混沌とした現実の世界と取り組む基本的な姿勢についてはイエイツが格好のお手本になると結論づけている。

Academic Graffiti (1950) には晩年のイエイツが実利主義的な大衆を憎み、伝統社会に生きる貴族や小作人を愛したことや循環史観に傾倒したことが示唆されている。イエイツの生きた時代環境と自分の生きた時代環境の違いを認めた上で、イエイツの作品の真実を出来るだけ正しく理解しようとする姿勢が見られる。

‘I am of Ireland’ (1955) では、『ボイラーの上で』などで優生学に基づき反民主主義的な発言をするイエイツの正直さを高く評価している。イエイツの民主主義嫌いは、それがアイルランド人にその誕生の地英国を想起させ、美とは縁遠い政治形態なので、唯美主義者イエイツには我慢がならなかったと述べている。またオウエンの戦争詩を排除したイエイツを批判した批評家たちは政治的な動機に基づくとしてイエイツを弁護している。

‘The Private Life of a Public Man’ (1959) では、「賃金生活者」なので思想内容が真か否かへの関心が強いオーデンの世代の文学者とは異なり、イエイツの世代の文学者は親の遺産を受け継いだ「年金生活者」なので唯美主義的になったとし

てイエイツの詩風に理解を示している。

‘A Certain World: A Commonplace Book’ (1970) では、「論証不足の虚偽」の実例としてイエイツの ‘The Wild Old Wicked Man’ から「僕は女に夢中なので / 丘に狂っている」を引用している。神による救済ではなく、好きな女性と性愛に耽りながら苦にみちた現実世界を放浪することを願う主人公の老人の正直な気持ちを述べた詩行だ。イエイツの異端的な死生観は、正統なキリスト教徒に転向したオーデンには説得力をもたなかったのである。

最後の詩 (1974) には、感嘆詞の O が 4 回も反復され、何が何でもキリスト教徒として神に召されて死にたいという強い願望があらわになっている。イエイツの描いた異端的な老人のようにこの世へ断ち切れない想いを抱きながらも、あくまでも正統なキリスト教徒として生を終えたいと熱望している。“He still loves life / but O O O O how he wishes / the good Lord would take him.” オーデンにとってイエイツは人生の最後までお手本であると同時に好敵手であった。

マクニースのイエイツ評価の揺らぎ

辻 昌 宏

ルイ・マクニースは W. B. イエイツに対する評価を度々述べているが、その評価が不変だったわけではなく、マクニース自身の詩観の変化、とりわけ現代詩に対する考え方の変化を反映し、評価の揺らぎを見せている。

ここでは彼の 2 つの著作、1938 年出版の *Modern Verse* と 1941 年の *The Poetry of W. B. Yeats* を取り上げる。前者は、タイトルから明らかなように、イエイツだけでなく、マッシュュー・アーノルドやウォルター・ペイター以降の英詩を取り上げており、イエイツはもちろんの事、T. S. エリオットや同世代の W. H. オーデンやステイーヴン・スペンダーらも対象としている。

マクニースは、*Modern Verse* においては、ペイター以降の唯美主義に対して批判的で、特に 19 世紀末の芸術至上主義に対しては否定的であった。そういう観点から彼は、「不純な詩 (impure poetry)」を唱えた。不純な詩とマクニースがいうのは、詩というものは、詩人の人生や周囲の世界に条件づけられているとい

う意味であり、マラルメ風な純粹詩を否定しているのである。さらに彼は、詩は社会問題などに対する最終的判断を示すものというよりも、エンターテインメントとプロパガンダの中間を目指すべきだとしている。

こうした考え方の帰結するところであるが、マクニースはスタイルこそが最も重要というペイター以降主流となってきた考えを取らない。どう書くか、どう語るかよりも、主題、すなわち何を語るかが第一だと言うのである。そういう点において、主題の選択が何より大事だというアーノルドに与しているのである。

マクニースから見ると、イエイツは世紀末詩人の一人として出発しながらも、アイルランドの政治に否応なく関わりを持ったことで、今を生きる人々の生活を意識せざるをえなくなったし、詩的言語も鍛えられたとしている。「ケルトの薄明」に安住することは許されなかったのだ。

同世代の W. H. オーデン、ステイーヴン・スペンダー、C. デイ＝ルイスらに関しては、彼らは世界観を単純化しており、人間を「政治的動物」とみなし、人間は経済的現実条件づけられていると考え、マルクスとフロイトあるいは D. H. ローレンスの総合を目指しているとした。この世代の詩人、オーデン・グループにとって主題が重要なのは当然のことだ。

一方、イエイツは彼らより 40 歳ほど年長で詩人・劇作家としての活動期間が長期にわたっていることもあって、その作風が一様ではない。初期のイエイツはアイルランド神話・伝説を出発点として多くの型にはまった詩的言語を用いていたが、エズラ・パウンドの影響もあって文体が 1910 年代から大きく変わる。パウンドはイマジズムの仕掛人とも言えるべき人で、イマジストはどんなものごとでも詩に出来るという態度をとっていたが、マクニースはそれは詩自体を矮小化しているとして否定する。つまり、マクニースはイマジズムに関しては意外なほど低い評価を下している。評価の低い理由は、イマジストの多くが文体、つまりどのようなスタイルで書くかだけに重きを置いて、主題、何を書くかを軽視したためである。

イエイツは第二次大戦勃発直前の 1939 年 1 月に亡くなる。マクニースは今度は、イエイツの詩の全作品を視野に入れて *The Poetry of W. B. Yeats* を書く。マクニースはアイルランドのゴールウェイで大戦勃発の知らせを聞いた。その瞬間すべてのものが **unreal** なものと思えた。イエイツの詩だけでなく、30 年代の社会的意識の濃厚な詩も **unreal** に響くようになってしまったのだ。1940 年の 1 月から 12 月までマクニースはアメリカに滞在し、その間上記のイエイツ詩論を書

いていた。つまりイエイツの死の直後であるだけでなく、大戦勃発の世界的動乱の時期にこの本は書かれていることを確認しておきたい。

マクニースは、イエイツの神秘主義に関して、イエイツの神秘体験の有無とは峻別する態度をとっている。彼の考えでは、詩人 A. E. (ジョージ・ラッセル) が神秘体験を有しているのに対し、イエイツは神秘体験をほとんどしていない。しかし神秘主義に関する詩を書くという点ではイエイツの詩の方が優れている。それは恋愛小説の名手が必ずしも恋愛体験を人並みはずれて豊富に持っている必要がないのと共通するであろう。マクニースは *Modern Poetry* では、詩人が秘儀を授かった特別な人であることを否定し、詩を書くことはノーマルな人間の活動の一つとしていた。しかし *The Poetry of W. B. Yeats* では詩人や「普通の人」がたまたま秘儀を授かることはあり得るし、人間の本能の一部とも言えるとしている。イエイツの神秘主義に対するマクニースの態度には揺らぎが見られるし、対応に苦慮している様が見受けられる。

イエイツは現実を超えたものを追求し続け、事実を敵視した。そのためマクニースの世代はイエイツを疑わしく思っていた。イエイツは相対的に狭い範囲の主題、アイルランド、単純化された過去、特別な教義に条件づけられた詩を書き、一般的な知や科学、インターナショナリズムは拒絶し、その拒絶により限界を持った。が、一方では、全世界を詩に取り入れようとすると、詩は焦点が拡散し一種のジャーナリズムに陥る危険性があるのだが、イエイツはその危険性は免れているとしている。

マクニースのイエイツ論は、1938 年の *Modern Poetry* を執筆した時点では、不純な詩、即ち、詩人の人生や周囲の世界とその詩人の書く詩との関連を重視するという観点から書かれていた。これは当時、T. S. エリオットが詩壇で影響力が強く、彼は個性を滅却する詩という方向性を唱導していたため、それに対するアンチテーゼの面が強いと思われる。しかし 1941 年の *The Poetry of W. B. Yeats* では、その執筆の直前にイエイツが没し、第二次大戦が勃発し、大戦中に執筆したこともあって、詩を捉えるときに、詩と詩人の関係を認めつつも、同時に詩の自律性、独立性を認め、なおかつ、イエイツのキャリアに沿っての作風の経過をたどってそれぞれの時期の作風を評価するというものになっている。

マクニースに即して言うなら、彼は詩論においても「不純な詩」を唱え詩と人生の関連を重視したわけだが、イエイツを論じる視座も、マクニース自身の人生の成行きや世界の変動によって揺すぶられ、それを反映するものであったと言えよう。

イエイツのナショナリズムを問い直す

松 田 誠 思

イエイツの文学活動全体を評価する重要な機軸の一つは、ナショナリズムのありようである。彼のナショナリズムは、アイルランド古来の精神と文化伝統の再発見と復興、及び政治的自立の達成を前提にしながら、同時代の社会的・政治的現実に対応する関心と行動によって自己意識を更新しつつ、〈アイルランド的なもの〉を定義しなおす形をとっている。またその生涯は、19世紀半ばの〈大飢饉〉により存亡の危機にあったアイルランドが、政治・経済・文化の諸分野にわたって〈国〉を再建するために、国民的エネルギーを結集すべくさまざまな企てを実行した激動期と重なっている — 世紀後半から20世紀初頭に及ぶ自治法案・土地所有権回復をめぐる対英関係の緊張、第一次世界大戦と「復活祭蜂起」、対英独立戦争から「自由国」の成立とそれに続く「内戦」、さらには新国家体制における政党・宗派・階級間の新たな対立、〈島〉の分断による〈南北問題〉等々がそこに含まれている。

20歳前後に始まるイエイツの詩・劇作活動はもとより、文学・演劇運動の組織者として、また政治家としての諸活動にも、ナショナリズムは深淺さまざまな形で現れるが、脱英国的自立論 (Separatism) にも親英国的連合論 (Unionism) にも一定の距離をおき、これらの宣揚するイデオロギーとは一線を画していた。家系がアングロ・アイリッシュのプロテスタントであり、また18世紀にさかのぼるプロテスタント支配層の文人・哲学者・政治家らの形成した文化と思想に、アイルランド人が継承すべき高い価値を見出していたので、彼のナショナリスト志向もこの系譜に連なるとするのが一般的な見方だが、出自・血統・階級などの制約を超えた思想の深化と展開にこそ、イエイツの独自性があると考えられる。「ナショナリズムを問い直す」とは、その独自性に改めて光を当てる試みであり、そのための資料を提供するとともに、問題を考える適切なアプローチを参加者と討議したいと考え、諏訪友亮・木原謙一両氏に例示をお願いした。

〔諏訪友亮氏〕 ナショナリズムは、植民地の支配勢力に対して被支配者のエネルギーを結集し、解放を達成するには有効だが、新国家の統治・運営のイデオロ

ギーとして制度化されると、新たな支配・被支配の構造を作り出し、抑圧的な権力に転化し得る。それがまさに「自由国」で起こった。「復活祭蜂起」以後急速に優勢になったカトリック・ナショナリズムが、「自由国」成立後、教会の後ろ盾を得て「公式」のイデオロギーとなり、事の当否を検討する前に多数派が少数派を押さえ込み、教育観、家族観など国民生活のかなめが保守化した。これに対するイエイツの対応は両義的である。

一つは、離婚禁止の法制化を主導するカトリックへの反論として、プロテスタントが近代アイルランドの文化形成に果たしてきた不拔の貢献を公然と主張し、「アングロ・アイリッシュの血統に依存した国民像」をナショナリズムの中心におくようになる。もう一つは、これを補完するように、カトリック・プロテスタントの融和・協調を図るため、アイルランドにおける国民形成の歴史が「混血」であること、元来異種・異質であったものが混じり合う「雑種と混交」の豊かさを強調する。それを詩的イメージとして提示する試みが、「自由国」成立以後の詩や散文に見られるが、たとえば‘Among School Children’、‘The Child and the State’などをそういう文脈に位置づければ、彼のナショナリズムの新たな展開を読み取ることができよう。

〔木原謙一氏〕 イエイツのナショナリズムの特異性は、民族であれ国民であれ、特定の間人集団に属する独自の経験の様式を強調するところにあるが、これは nation とか nation state という近代政治学の内容とは必ずしも重ならない。むしろ長年にわたる集団的経験が形成する審美性と宗教性の型に力点が置かれる。最も重要なのは〈死者〉と〈生者〉との霊的連続性、あるいは交信の可能性に対する確信である。西欧近代が重視する〈個人〉の自立性とか個性という概念に疑問符を付け、〈個人〉相互間の結びつきを生み出す媒体の働き、経験の共同性を重視する。また、あらゆる〈生者〉の中に埋めこまれている無数の死者の経験を無意識の境から呼び起こし、その意味を発見させるのが芸術家の役割であることを彼は強調する。イエイツはラフカディオ・ハーンなどとともに、西欧近代の物心二元論の虚妄を繰り返し指摘したが、それは政治的イデオロギーに宰領されるナショナリズムへの不信感の表明でもあったと言えよう。

〔司会者から一言〕 ワークショップでは取り上げることができなかったが、両氏の説明に関連して、二篇の詩の解釈について皆様にお尋ねしたい。

1. “We Irish, born into that ancient sect / But thrown upon this filthy modern tide / And by its formless spawning fury wrecked, / Climb to our proper dark, that we may

trace / The lineaments of a plummet-measured face” (‘The Statues,’ 28-32)。諏訪氏によると、「自由国」成立後のイエイツは、望ましいアイルランド人のあり方として二つの異なる考え方を示しているが、この詩の下線部は、そのいずれに当たるのか。あるいはそのいずれでもなく、もっと別の何かを含意しているのか？最晩年のナショナリズムの輪郭を知る上で、大事なポイントの一つではないだろうか。

2. イエイツの国家観とか民族の集合的記憶の問題を考える上で、死者と生者との関係、とりわけ生者が死者の声を聞くことにより、両者の共同体を作ることの重要性を指摘し、木原氏は彼のナショナリズムを新しい視点から捉えた。この視点を最晩年の詩 ‘The Black Tower’ に適用して、これをイエイツの内面における死者と生者の対話と受け止めれば、詩全体のヴィジョンについてどのような解釈が妥当であろうか？

3. 最晩年のイエイツは、制度としての民主制に強く反発し、ファシズムの政治思想・結社に接近して物議をかもしたが、これについては改めて論ずる必要がある。しかし他方、(アイルランドの場合にかぎらず) ナショナリズムの政治的・思想的有効性を無条件には容認していなかったこと (‘A General Introduction for my Work’ 参照)、のみならず詩・劇作活動によって西欧近代の価値観を相対化しうる視点を保持し続けたことの意味合いにも注意したい。

W・B・イエイツと自由国成立後のナショナリズム

諏 訪 友 亮

本発表の第一部ではまず、一般的なネイションとナショナリズムという用語の説明から入り、次にポストコロニアル批評におけるナショナリズム、および自由国における公式のナショナリズムを概観した。第二部では、ナショナリズムのそうした文脈を踏まえた上で、拙論を参考にしつつ、イエイツにとってのネイション、ナショナリズムを作品やエッセイにもとづいて検討した。

I ネイションとナショナリズム、ポストコロニアル批評および自由国におけるナショナリズム

政治学者アンソニー・D・スミスによれば、ネイションとは、領土、神話、歴史的記憶、文化、経済、法的権利と義務を共有し共通のものとして持っている人々と定義されている。これは南アイルランドにおいて、とりわけ文芸復興運動以後、共通の神話、歴史的記憶、文化を共有しているネイションの状況に当てはまるだろう。またスミスは、ナショナリズムについて、自治、統一、アイデンティティーを手に入れようとするイデオロギー上の運動であり、ネイションになりうる人々のために行われる運動としている。スミスは人々全体ではなく運動の一部のメンバーが国民を認定する役割を強調し、ナショナリズムがナショナリストによる目に見える形での運動だと意味しようとしていた。しかし、吉野耕作の定義では、ナショナリズムとは一部のメンバーに限ったものではなく、より広範な意識の問題として扱われており、この定義に従うと、独自の共同体であるという意識さえあれば、熱狂的な愛国者でなくともナショナリズムを持っているということになる。ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」もそのような共同体の意識がすなわちナショナリズムであると言っていることから、吉野と同様だと言えるだろう。

ナショナリズムという語には負のイメージが想起されがちだが、植民地におけるナショナリズムを評価しなおしたのがポストコロニアル批評だった。エドワード・サイードによるイエイツ論もこの流れを汲み、利害でばらばらになりがちな植民地の人々の力を結集して帝国主義を覆した点で、独立以前のナショナリズムの力は肯定的に評価されている。しかしサイードが注意を促しているのは、独立を挟んでナショナリズムの持っていた理想が固定化してしまうことによって、独立後の人々を縛ることになりかねないという一面である。そこには過去の復興や共有する宗教の美点を力説するあまり、それにそぐわない人々を排除する恐れがあるのであり、実際、アイルランド自由国はその傾向を強めた。

南アイルランドにおける公式のナショナリズムは、1916年のイースター蜂起を境に、カトリックとプロテスタントの統一を標榜するユナイテッド・アイリッシュメン型のナショナリズム、またはパーネルらの立憲主義的ナショナリズムから、分離主義的なカトリック中産階級中心のナショナリズムへと変容し、彼らが主流派となってアイルランドのネイション像が作られることになった。自由国が成立したのちも、統治能力に不安定さを抱えていた自由国政府はカトリック教会

に後ろ盾を求めたため、より政治と宗教が密接に結びつき、政権は教会の意向に沿うような政策を立てるようになる。カトリックの保守性は、ナショナリズムの観点から言えば帝国主義を跳ね返すために人々を結集させた面もあったわけだが、自由国成立後にはむしろ抑圧的に働き、文学などの芸術表現はもちろん、教育観や家族観を束縛し続けることになった。

II イェイツのネイションとナショナリズム

このような公式のナショナリズムに対するイェイツの返答は大きく2つに分かれると考えられる。1つは、アングロ・アイリッシュ的系譜をカトリックとは切り離れた形で残そうとする方向である。離婚禁止の動議に反対する国会での演説に顕著に表れているとおり、プロテスタントの純血と有能さへ重きを置くことは、教会と結託した政府やカトリック右派のセクト主義に対する反動から出てきたのは確かなのだが、イェイツによるアングロ・アイリッシュの血統に依存した国民像は、自由国成立後に顕著となっていく。

他方で、カトリック・ナショナリズムに対する2つめの応答は、カトリックとプロテスタントをいかに融和させるかという方向へ向かっている。アビー・シアターを擁護するエッセイの中で、イェイツはアイルランドが辿ってきた混血の歴史を強調するが、これはさきほどのアングロ・アイリッシュの純粋な系譜保持とは異なり、ネイションの雑種と混交の側面が前景化される。

そしてこの混血を経て統一されたネイションのイメージは、イェイツの詩‘Among School Children’のなかで、より解放的なヴィジョンとなって表れており、ここでカトリックとプロテスタントの区別は解消されている。カトリック教会によって運営される学校の少女は、アンデルセンの童話ながら、モード・ゴンの美しい白鳥に比べて、劣ったアヒルと形容されるが、しかしその少女とモード・ゴンのイメージがすぐに同一化していることから、カトリックとプロテスタントの境界は取りのぞかれることになる。最終連で語り手は、生徒や聴衆とともに自らを一人称複数形の「われわれ」へと一体化させ、身体的欲望のままに自由に踊ることを称揚する。ダンサーが栗の木の言い換えであるとするなら、エッセイ「子供と国家」のなかで主張される有機的な樹木＝ネイションという発想に従い、この樹木／ダンサー＝ネイションは、生成途中にある踊る運動体と見ることが出来る。しばしば包摂と排除を行なう排他的で固定的なネイションという集合体が、ここでは調節をくりかえしながら、理想的な姿を求めて変化し続ける様

相を表しており、こうした境界の変更を促すネイションの有り様は、カトリック・ナショナリズムが強いる性の排除、思考停止した服従、女性の家庭への囲い込みといったものに特徴付けられる国民像に代替しうるものであった。

メディア イェイツと霊媒／死者の声による ナショナル・アイデンティティーの創出

木 原 謙 一

イェイツとナショナリズムというテーマを考える上で、ラフカディオ・ハーンを並べて考えたい。二人は、アイルランドと日本で、失われつつある民族の土着の文化を蒐集することで、国に「面影」を与えようとしたアングロ・アイリッシュの作家である。幽霊や妖精への関心、降霊術への参加、意識は個人の領域を越え、共同体、民族、国家のレベルで共有され、大きな記憶を形成するという考え、日本への特別な関心等、彼らの類似点は多い。イェイツとハーンにとって国家とは、政治的統治機構としての領土ではなく、土地に住んだ過去の人々の意識、情念、記憶の総体としての郷土であった。その情念を表現する表象があるとすれば、それは幽霊をおいて他にはない。ハーンは言うー「美しい風景からもたらされる幽愁は……無数の死者たちの経験によって生み出される」。東京大学での講義でハーンは「偉大な芸術には何か幽霊的なものがある」と語ったが、イェイツは偉大な芸術の定義として、当時まだ未発表であったハーンの講義からこの一文を引用している。ハーンは、人がある景色を美しいと感じるのは、その土地に折り込まれている過去の記憶と結びつくからであり、過去に生きた人々の情念、特に悲しみと苦しみの情念がその風景を見る人々の意識に呼び出されるからであると語るが、この土地の記憶についての考え方はイェイツの思想とも一致する。イギリスロマン派的な風景観とは一線を画す二人のアイルランド的な幽霊の風景は「ゴーストスケープ」と呼ぶのがもっとも適切だろう。それはワーズワスの土地感覚と明確な対照をなす。イギリスロマン主義詩人もまた、風景がもたらす美の源泉を超自然的な存在者に求めたが、それは自然景観の外にある超越的創造者である。その風景を汎神論的に充たす霊的存在はキリスト教の単数形の Holy Ghost に近

い。一方イエイツやハーンの風景を充たすのは過去の死んだ人々の情念と記憶であり、土地に折り込まれた幽霊、そこで生きた人々の無数の secular ghosts である。彼らの「ゴーストスケープ」の感覚にもっとも近いのは日本の伝統的な風景意識であり、それが芸術的に洗練され完成されたものが夢幻能という日本の演劇形式であると言って良いだろう。夢幻能は、風景と土地に巻き込まれた情念を幽霊の舞で表現した舞台芸術である。ハーンが来日後最初に出版した *Glimpses of Unfamiliar Japan* は、ハーンの思いを汲み取って、通常『日本の面影』と訳される。「面影」とは死者あるいは遠くの人を思い浮かべるとき脳裏に浮かぶイメージ—その人の全人格を統合し、その人にまつわる思い出を統合する一つのイメージ—であるが、おそらくこの言葉ほどイエイツとハーンの美学の「ゴーストスケープ」美学の本質を言い当てている言葉は他にはない。顔の表面の下に暗在する過去の人々の記憶をハーンは「現像される前の写真のネガにあるイメージ」と言い、「顔」は過去の無数の先祖たちの感情が折り込まれたファンタスマゴリアであると言う。イエイツも仮面論において個々の表情を統合する一つのイメージについて語るとき、ファンタスマゴリアという語を用いている。ハーンは一人の個人の顔を描くように、日本という国の「面影」を描こうとした。それは日本自身にとっても未だ出現していなかった統合的なイメージであろう。一方イエイツは、『ヴィジョン』において、アイルランドに「顔のようなもの」を与えようとしたと語るが、彼が言いがたき嘆きをもってもどかしそうに言うその「顔のようなもの」、あるいは彼が別の箇所で国の Unity of Image と呼ぶファンタスマゴリア的幻影は、日本語では「面影」である。*The Words upon the Window-Pane* は、場所に折り込まれた情念と記憶というイエイツのテーマを、都会を舞台に表現した作品である。この劇は、実際の降霊術的な構成になっており、少人数の観客に対して演出された場合には、降霊術さながらの雰囲気を出している。この劇が一見したところまったく能のように見えないのは、その時代設定が過去から現代に、場所設定が田舎から都市に置き換えられているからである。イエイツは、劇場という空間の中に降霊会という疑似劇場的な空間を置き、その舞台の中で、さらに声による劇中劇が行われるという三重構造を用意した。しかも霊媒師はまずルルという子どものキャラクターになり、ルルがスウィフトの霊を見、次にスウィフトがルルを乗っ取るという複雑な形を取る。つまり、劇中劇である一人語りの中にさらなる多重の入れ子構造が設けられているわけだ。多重構造は、これで終わりではない。降霊術の後に、スウィフトの会話には時間的なずれがあることが明らかにさ

れ、語りは老いて狂人となったスウィフトの記憶の呼び起こしであることが判明する。つまり、降霊した霊は、晩年のスウィフトで、語られるステラとの会話は、老スウィフトの幽霊の夢ということになる。霊媒師によって呼び起こされたスウィフトの幽霊もまた一つの媒体であり、最終的に喚起されるのは、スウィフトの霊が繰り返し「夢見返し」として見つづける、彼のもっとも深い夢である。スウィフトの晩年の狂気と苦悩の中核には彼が深く愛したステラの存在があるとイエイツは見るとする。これは一つの結晶化された情念となっており、この情念によって降霊会全体が圧倒されるという形になっている。能において土地に呪縛された幽霊の怨念が喚起されるように、霊媒師によってスウィフトのもっとも深い悔恨が呼び起こされる。イエイツは、スウィフトのもっとも個人的な苦悩に凝縮されたアイルランドの苦悩を見る。21歳の時、刑罰法時代に入ったアイルランドを去り、祖国の苦難を背負い、政治的な論争に身を置きつつ文筆活動に勤しんだこのアングロ・アイリッシュの作家は、イエイツにとってはアイルランドを代表する知的英雄であった。ここで老スウィフトと老イエイツの連想関係に注目したい。劇場が降霊術の空間となり、スウィフトが降霊するような感覚に見舞われたとき、その幽霊はいつしかイエイツ自身と重なり、観客はイエイツの霊が降りてきたような感覚を覚える。解釈者としての詩人は、想像力によってスウィフトの霊を舞台上に呼び覚ます霊媒であると同時に、自らがスウィフトに憑依する霊でもあるわけだ。要するに、イエイツは自分の死後、自らが幽霊として出てこれるような場をここに用意していたのではないか。『窓ガラスの言葉』が執筆された頃、イエイツはラジオと蓄音機という新しいメディアと関わり始めた。1931年に録音放送された「イニスフリー湖島」の朗読は、おそらく録音されラジオで放送された歴史上最初の詩人の声である。その声は幽霊を連想させる。初期の録音メディアは、もともと「死者の声の再生」にかかわっていた。メディア論研究が指摘するようにテレビ、ラジオ、映画、音声録音のはじまりは、19世紀の降霊術につながっていて、さらには18世紀に流行したファンタスマゴリアや公開実験に遡る。今ここに存在するはずのない人のヴィジョンを「見せる」、その声を「聞かせる」という意味で、媒体（メディア）と霊媒（メディウム）は一直線に繋がっている。霊媒とメディアの関係は、イエイツの時代にあつてはメタファーではすまされない思考的な直接的相互乗り入れ関係にあった。これらの現代メディアを可能にしたエジソンは、死ぬ前の10年間、ちょうど『窓ガラスの言葉』が書かれていた頃、本気で死者と交信する通信機の開発に全力を注いでいた。出発点において死者た

ちと深く結びついていた現代メディアの特性を考えるなら、イエイツがこの劇で試みたことは明確である。それは、詩人自らが幽霊となり、同時に霊媒（メEDIUM）となり、劇という媒体（メディア）によって、国の「面影」を現代という時代に映し出すことである。

《研究発表要旨》

変容のヴィジョン—イエイツ、シング、ジョイス—

坂 内 太

1902年に初演されたイエイツの『キャスリーン・ニ・フーリハン』(*Cathleen Ni Houlihan*, 1902)では、国家の再生と独立を願う老婆が、悲願に見合う若者を得て、自らとその者が互いに変容する。1798年の対英武装蜂起が悲惨な失敗に終わる前日譚の様な設定ゆえに、悲壮な威厳があるが、しばしば、1939年のイエイツの詩「人と木霊」(‘Man and the Echo’)の中の“Did that play of mine send out / Certain men the English shot?”という一節の根拠とされる。イエイツが憂えたような、単一の戯曲が社会的変革の動因となる可能性を措定するのは難しく、動因の形成は、政治・経済・思想・芸術・社会の多層的な国民の営みに関わるとしても、『鷹の井戸』(*At the Hawk's Well*, 1916)などの他作品を含め、イエイツの戯曲には「変容のヴィジョン」へ聴衆を引きつける力があったと考えられる。

「変容のヴィジョン」の社会的影響という点では、J. M. シングも同様であり、1907年の『西の国の伊達男』(*The Playboy of the Western World*, 1907)と、その上演を巡る騒動では、戯曲の内容が、登場人物の内面の露呈と変容に関わるばかりか、上演そのものが観客に直接的影響を及ぼした。

イエイツは『キャスリーン・ニ・フーリハン』で、シングは『西の国の伊達男』で、登場人物が根本的な変容を遂げる戯曲を執筆したが、どちらの劇も、社会的に大きなインパクトを与え、前者はイースター武装蜂起、後者は上演での騒乱というかたちで、劇場内で展開された変容のヴィジョンが、劇場から屋外でのパフォーマンスへと発展した。

ジェイムズ・ジョイスの短編集『ダブリン市民』(*Dubliners*, 1914)に収められた15作品の初稿の完成は、1904年から1907年で、『キャスリーン・ニ・フーリハン』が初演された1902年4月2日から、シングの『西の国の伊達男』が初演された1907年1月26日までと、ほぼ重なる。当時のジョイスは、自立的な変容と芸術作品による国民・社会への作用に深い関心を抱いており、この点でイエイツとシングは無視できない大きな先行者だった。

ジョイスが、1922年に出版した『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922)の冒頭では、か

つてイングランドがダブリンに作った軍事施設を間借りする青年スティーヴンは、敷居に現れた老婆に、イエイツとグレゴリー夫人による『キャスリーン・ニ・フーリハン』を重ねる。屋内に入ってくる人影で戸口が暗くなると、彼はケルト神話的なメッセンジャーかも知れないと警戒し、おもねることを拒む。作者ジョイスは、アイルランドを神話的に、また、ロマンティックな見方で眺めることは、単にイギリス支配を利するだけだと考えていた。しかし、『ユリシーズ』では、長らく精神の疲弊した主人公たち（スティーヴンとレオポルド・ブルーム）が、僅か一日の内に根本的な変容を遂げる奇跡の変身譚が展開されることを考えると、作品冒頭に託されたイエイツ批判とは異なり、プロットの中核には、その屈折した受容が見て取れる。

公共空間で、登場人物の疲弊し麻痺した内面が露呈し、やがて根本的な変容を遂げる点では、ジョイスは、同様のプロットを持つシングの『西の国の伊達男』にも大きな影響を受けていると考えられる。変容のヴィジョンの発想とその美的な構築を巡り、大きく先行するイエイツとシングに対し、ジョイスが、挑戦的な継承を試みていたと考えられる。本発表で言及した三者の作品では、閉塞した精神や国家の捉え方、変容のヴィジョンの構成に差異も見られるが、美的な構築物が国民生活の未来に影響を与えるべきこと、国家や国民生活の中心に想像力を求めることにおいて、共通項が見られる。

第一次世界大戦とアイルランド — イエイツの戦争詩再考 —

荒 木 映 子

イエイツは第一次世界大戦に関して、戦争詩は書かないという詩を書いたり、オケーシーが大戦を描いた劇をアビー劇場で上演するのを拒んだり、戦争詩人オーウェンを「受動的苦しみ」を描いているという理由で現代詩選集からはずしたり、心情的に距離を置いてきた。これは、大戦は、イギリスまたはヨーロッパの戦争であって、アイルランドの戦争ではないという意識も関係していると思われる。しかし、イエイツのパトロネスであったレイディ・グレゴリーの、息子ロバート

がイギリス航空部隊に入隊し、1918年初めに戦死を遂げた時には、彼に捧げるエレジーを三つ書いている。うち二つは間接的に大戦に言及しているに過ぎないが、‘An Irish Airman Foresees His Death’は、戦死を遂げる瞬間のロバートを私心のない英雄として描き、イエイツの最もよく知られた詩の一つになっている。

もう一つ、イエイツがグレゴリーの戦死に触れた詩があって、それは、大戦が終わってすぐに起こった英愛戦争の最中、アイルランドの人々がイギリスから送りこまれた警察部隊の暴力の巻き添えになる様子を見て書いた‘Reprisals’ (1920) である。この詩は、グレゴリーの亡霊を墓から呼び出し、故郷のキルタータンの現状を見るように呼びかけることから始まる。前半で、‘An Irish Airman…’で賞揚したグレゴリーの立派な最期さえも間違った大義によるものではなかったかという疑念を呈し、後半では、大戦時イギリスに協力したにもかかわらず、そのイギリスにアイルランドの人々が苦しめられ、惨殺さえされている現状を訴えている。つまり、グレゴリーの戦死は犬死にはなかったのか、イギリスのために戦うという大義そのものが正しかったのだろうかと問いかけ、前詩を撤回するパリノードと言える内容になっている。この詩は、グレゴリーの未亡人の気持を想い測るレイディ・グレゴリーの希望で出版を差し止められた。初めて出版されたのは、イエイツの死後 1948 年になって、アルスターの詩の雑誌という思いがけない出版物においてであり、今もイエイツの全詩集には入れられていない。

この詩に表明されている、“Till certain second thoughts have come / Upon the cause you served, that we / Imagined such a fine affair” という言葉は、イギリス側に立って戦ったアイルランド兵士につきつけられた問題でもある。プロテスタントが半数を占める北東のアルスター地方だけでなく、南部の三つの地方からも、プロテスタント、カトリックを問わず大勢のアイルランド人が志願して戦場に渡った。義務感から、あるいは自治をめぐる思惑から、あるいは経済的理由から、15 万人から 20 万人の人々が義勇兵となったと言われている。戦争協力することがアイルランドに自治をもたらし、北と南が共に戦うことが和解を生むというジョン・レドモンドの呼びかけに答えたカトリックの知識人たちもいた。その一人経済学者で詩人のトマス・ケトルは、復活祭蜂起のニュースを聞いて、蜂起の首謀者たちは英雄もしくは殉教者として歴史に残るだろうが、自分は歴史に残るとしても裏切り者としてであろうと予見している。ケトルの胸像は、議論の末 1937 年、St. Stephen's Green に設置されたが、ほとんど忘れられた存在である。レドモンドのシナリオを大きく書き換えたのは、復活祭蜂起であった。

しかし、長い沈黙が破られ、ようやく 1980 年代後半から、アイルランド国内で大戦に加わった兵士の忘れられた声を取り戻し、イギリス中心の大戦観を見直す動きが見られるようになってきた。その象徴的な出来事が、休戦から 80 年後の 1998 年にベルギーのメシーヌに、アイルランドの戦死者や行方不明者を追悼する平和の塔が築かれたことである。ここは、1917 年 6 月北と南の両師団がサイド・バイ・サイドで戦った激戦地で、南北の融和を記念するのにもふさわしい地である。また、開戦 100 周年を迎えた 2014 年の休戦記念日には、ロンドンの戦没者記念碑に初めてアイルランド共和国から月桂樹が届けられた。このようにアイルランドと大戦との関係が再評価されるようになるまで、長い間、イギリスの軍服を着て戦ったアイルランド兵は肩身の狭い存在であり続けた。

このような歴史的文脈に沿って ‘An Irish Airman...’ を再考すると、イギリスに愛憎半ばする気持を抱き、アングロ・アイリッシュのプロテスタントであったイエイツが、苦渋の末に書いたエレジーに思えてくるのである。アセンダンシーの末裔であるロバート・グレゴリーは、先祖の祖国であるイギリスに忠誠を尽くすためにいちはやく志願した。しかし、詩では、“Those that I fight I do not hate / Those that I guard I do not love; / My country is Kiltartan Cross, / My countrymen Kiltartan’s poor,” と述べられ、イギリスのためではなく、故郷の人々のために戦っていることが強調され、義務感からではなく、“A lonely impulse of delight”（イエイツ的な「戦いの喜び」）からの戦いであることが強調されている。「王と帝国」のために進んで戦ったグレゴリーのエレジーを書くことは、執筆当時のアイルランド情勢から考えて困難を伴ったことを Roy Foster の詳しい伝記は指摘している。アイルランドでは、復活祭蜂起の首謀者の処刑により、政治的穏健派の中にも反大戦ムードが高まっていたが、グレゴリーが戦死した 1918 年 1 月という時期には、人々は未だ終わらぬ戦争にますますいらだちをつのらせ、秋には徴兵制をアイルランドにも敷こうとする動きにイギリス政府への憤りは深まっていた。こうした風潮の中で、イエイツとの間柄が決して友好的とは言えなかったグレゴリーのエレジーを書くように未亡人に頼まれたことは、イエイツにとって書くべきエレジーの方向性を限定されるものとなった。結果は、孤高のパイロットの姿にイエイツ的な英雄像を結実させ、大戦がアイルランドの戦争ではないという政治的表明を盛り込むことになった、と言えるのではないか。歴史的文脈を考慮に入れることによって、アンソロジー・ピースとしてこの詩を読んでいるだけではわからない複雑な陰影が浮かび上がってくる。

最近の大戦研究の動向の中では、1914 年夏から 18 年秋で大戦を区切るのではなく、その前後を含めて考える見方をするようになってきている。アイルランドと大戦との関係も見直され、復活祭蜂起、英愛戦争、内乱は大戦の文脈の中で再考されるべきものになっている。Michael Robartes and the Dancer、The Tower 詩集や A Vision は、大戦とそれに続くアイルランドとイギリスとの争いへの言及に満ち満ちている。これらの詩は、イエイツの大戦文学だと言ってよい。しかし、‘Reprisals’ のグレゴリーと同じようにイギリスに「騙された死者たち」については、イエイツはほとんど語っていない。その沈黙は、アイルランドが長らく守ってきた沈黙でもあった。

Yeats と聴衆 — ‘Three Songs to the Same Tune’ の改作についての考察 —

西 谷 茉莉子

1933 年 7 月頃、Yeats は、アイルランドにおいて台頭してきたファシストの組織 Blueshirts に傾倒し、Blueshirts を、彼の理想とする “Unity of Culture” を実現させてくれる勢力と見なしていく。Yeats は、カトリック中産階級 “mob” が、俗物主義と宗教的非寛容を体現していること、また彼らが同時代のアイルランド社会を支配していることを痛感しており、その抵抗勢力として Blueshirts に期待を寄せたのである。Blueshirts に熱狂した期間、Yeats は、彼らのための行進曲の歌詞を書く。その熱が冷めた後、彼は、それらの歌を三部構成の詩 ‘Three Songs to the Same Tune’ として書き直し、1934 年 2 月、Spectator において発表する。さらに詩を書き改め、新たな注釈もつけ、同年 12 月、Poetry に掲載する。大きな変更点として、Spectator 版では 3 つの歌全てに同じコーラスが付けられていたのに対し、Poetry 版では、2 つのコーラスが変えられ、3 つの歌が各々異なるコーラスを持つことになったことが挙げられる。

この詩について、Conor Cruise O’Brien は、Blueshirts からの撤退という態度を Yeats が明白に表明するのが、彼らの勢いが挫かれた「後」である点を強調しながら、権力を持つ見込みのない主義主張とは手を切る抜け目なさを Yeats の一側

面として照らし出す。一方、Elizabeth Butler Cullingford は、Yeats が Blueshirts から離れた時期を O'Brien よりも早い時期に推定している。彼女は、*Poetry* 版において新しく付けられたコーラスのひとつにまつわる逸話を根拠に、Blueshirts がまだ世間で支持されていた頃、Yeats はすでに運動と決別していたと結論づけ、O'Brien の日和見主義的な Yeats 像を否定する。Blueshirts にまつわる、一連の Yeats の態度に対する彼らの評価は異なるが、どちらも、彼が Blueshirts から距離を置くことを公言するために、詩のテキストを改作し注を加えたことを論証している。彼らの論は、この詩の批評の主流を成すものであると言えよう。だが、この詩を別の角度から眺める時、一連の改作の過程から、Yeats の聴衆に対する意識を浮き彫りにすることができる。

この詩を、Yeats の聴衆に対する意識と関連づけて論じた数少ない批評家、Lucy McDiarmid は、Yeats の一連の Blueshirts への熱狂を、「聴衆の生の声を擁護することを試みたものの、現実の聴衆に失望し、幕を閉じた」経験のひとつであると位置づける。確かに、この詩は、Yeats 自身が述べているように、元々は実際の聴衆 (Blueshirts のメンバー) に歌われることを想定して作られたが、後に彼は、想定される歌の聴衆を曖昧にしようと試みているのである。さらに、*Poetry* に付けられた注において、Yeats は、この歌がどのような政治組織によって歌われることも拒否している。その一連の過程から、自分の歌を歌う現実の聴衆を得る望みを放棄していく Yeats の態度が読み取れる。

このような Yeats の「現実中存在する聴衆を見出そうと望み、失望する過程」は、*Spectator* 版から *Poetry* 版へのテキストの変化と連動している。McDiarmid は、*Spectator* と *Poetry* の違いについて、Yeats の Blueshirts との結びつきが曖昧にされる点、命令形や、歌自体に対する言及が省かれる点などを指摘し、Yeats がこの歌を実際の聴衆が歌いにくいものに変えていったことを論証する。このような彼女の視点は新鮮であるが、テキスト解釈において、議論を残している部分もあるように思える。

Spectator 版と *Poetry* 版を分析し、比較すると、主に次の二点が導き出せる。一つ目は、主題の変化である。*Spectator* 版の 'Second Song' では、1789 年の蜂起において、“grandfather” がアイルランドの自由という “cause” 「大義」と、その自由を阻害するイングランドに対する “blows” 「攻撃」をたたえて演説をする。*Spectator* では、現代に生きる者が、歌や行進という形で、過去の愛国者たちの精神の正しさを示すことがテーマであるが、*Poetry* においては、公開処刑で、死

を間際にしても力の限り主張を歌い続ける “grandfather” の精神に焦点が当てられている。また、テキストの変更や順番の変化によって、“grandfather” を特定の歴史的文脈から切り離す工夫がされている。この歌のテーマは、もはや、蜂起において活躍した愛国者の精神をたたえることではなく、“mob” の支配するアイルランドにおいて、“cause” を主張し続ける、Yeats 自身の心境であると言える。このような主題の変化は、Yeats が Blueshirts に自作の歌を歌う聴衆として期待を寄せたものの、失望した過程と重ね合わせられる。

二つ目は、各々の作品において想定される聴衆の変化である。*Spectator* 版において、各連のコーラスの直前に置かれていた、“Come march, singing this song, / Swinging, swinging along” というフレーズは、テキストの外の、実際に存在する聴衆に対する呼びかけの機能を果たしており、コーラスはその聴衆によって歌われる歌詞であると解釈できる。一方、*Poetry* 版では、そのフレーズは除かれ、その位置には、“grandfather” が処刑される場面の描写が充てられる。このような変化により、コーラスは、テキストの外の聴衆が歌う歌詞ではなくなる。代わりに、読者はコーラスを、テキスト内の「聴衆」の声として解釈するよう誘導されるのである。ただし、テキスト内の「聴衆」が grandfather (=Yeats) に共鳴しているのか、はやしたてているのかということについては曖昧にされている。

Poetry 版に付けられた自注は、このような「聴衆」の態度の曖昧性を解釈するヒントとなる。注における、「このような政府や政党は、今日存在しない」という Yeats の発言からは、同じ信念を分かち合って共に歌う味方がいないという彼の落胆が読み取れる。その場合、テキストの中に書き込まれた「聴衆」は、Yeats の信念を理解することのない敵 “mob” として解釈でき、コーラスは、彼に向けての挑発の声と解釈されよう。しかし、次の一文「万が一、どちらかが現れたら、わたしはそれにこれらのささやかな歌を捧げ、わたしの残りの人生を捧げよう」からは、Yeats が、同時代の聴衆を得ることは諦めているものの、今後、彼の望むような聴衆を得る可能性までは否定していないことに気づかされる。将来、Yeats と信念を分け合うことのできる政党や政府が現れ、彼らがこの詩の読み手となる時、テキストに書き込まれた「聴衆」を、“grandfather” の味方として解釈できる可能性を残したいと彼は考えていたのではないだろうか。*Poetry* 版に見られるコーラスの曖昧性は、現実と理想の間で揺れ動く Yeats の聴衆観を映し出している。

A Vision における「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ」

伊 東 裕 起

イエイツはグレゴリー夫人宛の1918年1月14日付の手紙で、ダブリンの街角でシン・フェイン党員の革命家とイスカリオテのユダが会話するという劇の構想を述べた。革命家は彫刻家（つまり芸術家）を自分の理想のために行動に駆り立てて犠牲にしようとし、ユダは同様に自分の理想のために神の子を行動に駆り立てて犠牲にしようとするという劇である。この劇は書かれなかったが、この構想の、革命家と裏切り者の対話という部分は後の劇『骨の夢』につながり、ユダに関する部分は『カルヴァリ』という作品に結実した。

イエイツはこの手紙の中で、ユダの裏切りについての解釈を披露している。それはユダの裏切りの理由に関して「キリストに、自分がユダヤ人の王だと宣言するように」キリストを引き渡したというものだ。ユダの裏切りについてのこのような解釈はよくあるもの、ユダの名につく「イスカリオテ」を「短刀を持った刺客」＝「シカリ派」（熱心党と混同された民族主義者で、反ローマ的でないユダヤ人を暗殺した）と解釈することからもきたものだろう。ユダとシン・フェイン党の革命家を対比させたことも、ユダを民族主義的な人物とみていた証である。しかし、『ヴィジョン』や『カルヴァリ』では、イエイツはユダの裏切りについてそのような解釈をしていない。『ヴィジョン』においては「銀貨30枚のためにではなく、彼自身が創造者となるために裏切ったユダ」とある。また、『カルヴァリ』では神の手の中にない世界を求めたユダは、「神を裏切る者は自由になれる」、神よりも強いものとなると考えて行動したという。このように、グレゴリー夫人宛の手紙と、『ヴィジョン』および『カルヴァリ』では、ユダ観、特に裏切りの捉え方に明確な違いがあるのはなぜなのだろうか。

1918年1月26日の自動筆記との対話では、イエイツは民族主義的なユダを考えていた。イエイツは自動筆記に対して、「ユダはユダヤ民族を憐れみ、そしてキリストを彼らの王にしようとしたのか？」と尋ねる。この質問は、この時点においてイエイツがユダを民族主義的にとらえていたことを示唆している。しかし、自動筆記はそれを否定し、明確に独自のユダ観を以ってイエイツに返答する。

また同年1月27日には、自動筆記は《主観性》、つまり《対抗性》と《客観性》、つまり《始原性》に関して話をする。それによると、裏切りのとき、ユダは《対抗性》に、キリストは《始原性》に属するということ、そしてユダの絶望は《対抗性》のものであること、キリストは《始原性》の絶望のみを憐れみ、ユダの絶望を憐れまないことが示される。これは『カルヴァリ』に実際に取り入れられた考えである。

自動筆記によると、ユダは第8相の人間である。『ヴィジョン』によると、第8相は《対抗性》の色相が始まる位相であり、色相の転移として葛藤が最大になる位相である。悲劇と闘争の位相であり、crisis（決定的瞬間）の位相である。それは、現代（1927年まで）の時代精神（第22相）の反対の位相でもある。『ヴィジョン』において、その第8相の人物は次のように説明される。「彼は闘争以外のなにものも知らず、彼の絶望は必然である。彼はすべての人の中で最も誘惑されやすい。エロイエロイ、なぜ汝我を見捨てたまいしや」。ここに引かれている言葉は、マルコによる福音書15章34節だ。この聖句は十字架（ユダヤ教の律法の上で呪いとされていた木）に神の子がかけられ、神から見捨てられるという瞬間の言葉であると同時に、旧約聖書のダビデの詩（詩編22）の引用と解釈されている言葉である。ここでイエイツが書いている人物、「彼は闘争以外のなにものも知らず、彼の絶望は必然である。彼はすべての人の中で最も誘惑されやすい」男とはユダのことだろう。そうすると、イエイツはこの言葉を、キリストの声であると同時にユダの言葉でもあるとして引用していることになる。

また、第8相の《意志》は“War between Race and Individuality”であるという。イエイツにとって、Raceは「非個人的」「集合的」な思いを表すもの、その民族として古くから伝えられてきた社会的・文化的な規範、「あるべき」とする「強制された仮面」としている。『ヴィジョン』第一版では、ユングがかつて設定していた「民族的無意識」のような、Raceの記憶庫を設定していることも注目すべきだろう。そのようなRaceと対立するのがIndividualityである。これは「あるべき」仮面ではなく本来の「ある」自己たろうとするもの、そして個人的であろうとするものである。

イエイツの作品において、この“War between Race and Individuality”を戦った登場人物がいる。それは『カルヴァリ』と同時に構想された裏切りの劇『骨の夢』の登場人物、自分たちの愛ゆえにアイルランドを売り、ノルマン人を招き、それから何百年もの植民地化につながったとされる人物、ダーモットとダヴォーギラ

である。1918年1月14日付のグレゴリー夫人宛の手紙で披露した「ダブリンのユダと革命家について」の劇は『カルヴァリ』と『骨の夢』の二つに分けられたが、ユダに関する記述であるこの記述が、民族への思いと個人的な思いの間で揺れ動いたダーモットとダヴォーギラとしても読めることを見逃してはならない。

Race（全体）を重んじる革命家は、ある意味で《始原性》であり、Individuality（個人）を重んじて Race（全体）を裏切ったダーモットとダヴォーギラはある意味で《対抗性》に属する。そうすると、自動筆記の言うように、《始原性》の革命家は《対抗性》のダーモットとダヴォーギラの絶望を憐れむことができない、という構図が成り立つ。

また、『骨の夢』において革命家はダーモットとダヴォーギラを3度否認するが、その通低音として鶏が登場している。イエイツは『カルヴァリ』においてペテロが登場させることも考えていたため、その部分も引き継いでいるのだろう。そして、第8相の言葉「彼は闘争以外のなにものも知らず、彼の絶望は必然である。彼はすべての人の中で最も誘惑されやすい」は『骨の夢』の恋人たちにあてはまる。ダーモットとダヴォーギラ二人はお互いに誘惑され、苦悩の闘争の中で生き、そして絶望した。「なぜ汝我を見捨てたまいしや」という声もそうだ。ダーモットとダヴォーギラは後の時代のアイルランド人、特に独立運動の世代のアイルランド人から見捨てられた。『骨の夢』においても、若い革命家に許しを求めたダーモットとダヴォーギラは最後まで許しを得ることができない。ダーモットとダヴォーギラはイエイツにとって“War between Race and Individuality”を戦ったユダでもあるのだ。自動筆記からさまざまな示唆を受けたイエイツだったが、彼は民族の裏切りについての劇を書くこと自体を断念したわけではない。そのように、民族についての彼の思いも、『ヴィジョン』には表れているのである。

「イニスフリー湖島」に描かれた〈透かし絵〉 —イエイツと聖パトリックの煉獄巡礼—

木 原 誠

イエイツは‘A General Introduction for my Work’の中で「アイルランドのすべ

ての歴史の背後には一枚の偉大な綴織が垂れ下がっている」と記した上で、その綴織の体現者として聖パトリックの名を挙げる。ただしイエイツにとっての聖パトリックとは、「AD 5世紀に渡来した」アイルランド・カトリックの創始者ではなく、「AD 2世紀の末に渡来した」、「キリスト教と古代世界（ドルイド教）の臍の緒がいまだ断ち切れていない」、「極西キリスト教文化」を体現する「修道僧」を意味している。かくしてイエイツは「私のキリストは聖パトリックの信条の血統を引く嫡子である」と結論づけることになる。このような彼一流の聖パトリック像は J. R. Ardill 著 *St. Patrick AD 180* (1931) に負うところ大であるものの、初期の頃から彼が独自の聖パトリック像を描いていたことは、作品中に言及されている聖パトリック煉獄巡礼からも理解される。例えば ‘The Celtic Elements in Literature’の中で彼は「煉獄巡礼者が視る幻がヨーロッパの思想に豊かな懺悔の象徴を与え、その影響はダンテ『神曲』にまで及んでいる」とした上で、「それはかつてケルトの異教徒が視た幻である」と記している。あるいは *The Wanderings of Oisín* の中で、聖パトリックにダーク湖巡礼の典礼だけに使われる特殊なコロケーション—「素足」「跪いて」「板石」(flags)—を用いて「彷徨える魂のために祈れ」と語らせ、煉獄巡礼を暗示させている（ダーク湖島巡礼は素足で岩穴に置かれた6つの stations = penitential beds = flags を各々巡り祈り、自己や隣人の罪を懺悔する cludee 固有の苦行）。

ただし、イエイツが独自の聖パトリックの信条の実践である煉獄巡礼を強く意識し始めたのは ‘If I were Four-and-Twenty’ から判断して、彼 24 歳の頃と推測される—「もしも私が 24 歳の頃ならば、……クロー・パトリックとダーク湖の巡礼者となり……ダーク湖の司祭を説得し、羽のない翼をもつ長足鳥のかたちをした悪霊にかつて襲撃、包囲されたことのある聖パトリックの穴に宿るヴィジョン、その封印を解けと告げるだろう。」さらにこのことは、彼が 24 歳の時に書いた ‘The Lake Isle of Innisfree’ から理解されるだろう。この詩に表れた三つの引用文を結べば、そこにひとつの透かし絵が現出されるが、そこに描かれているのは聖パトリックの姿だからである—一つ目は福音書の放蕩息子の一節、“I will arise and go to my father”、二つ目は「マルコによる福音書」5:5、湖の向こう岸、ゲラサの男に憑依する悪霊レギオンの叫びの一節、“And always, night and day, he was in the mountain...”。三つ目は、聖パトリックの『告白』中の一節、“I was utterly pierced to my heart’s core”。ただし、三つの引用文がいずれも聖パトリックの『告白』から着想を得たものであると判断される点は重要である。

木原誠

『煉獄のアイランド—免疫の詩学／記憶と徴候の地点』

(彩流社、2015 年、610 頁)

浅井雅志

『告白』によれば、Briton で誘拐されアイランドに奴隷として売られたパトリックは、この地を脱出し帰郷する。「両親は私を長い間失ってしまった息子のように歓迎してくれた。」この箇所は「失った息子」を「走り寄って迎える」父と放蕩息子の描写を念頭においている。だがある日、彼に「ヴィジョンが顕れる」。それは「心の核心を刺し貫く」「アイランドの声」だった。こうして彼はアイランドに戻ることを決意する。アイランドに帰郷した聖パトリックは布教をはじめ、あえて厳しい荒野に次々と蜜蜂の巣 (bee hive huts) を建てていったとされる。その巣の周りには、この詩に記されているような (“a small cabin build there, of clay and wattles made” “a hive for the honey-bee”), 師を慕う弟子たちの土を練って小枝を組んだ小さな庵が点在していただろう (ダーグ湖島に実在した bee hive huts—stations はその名残—とそれを囲む小枝の庵もその一例)。だがアシーン・サイクルによれば、この湖の小島には怪物が棲んでいた。キリスト教徒聖パトリックにとって、その怪物は湖畔に棲む「ゲラサのレギオン」を意味し、レギオンは毎年、多数の人間の生贄を求めて民衆を困らせていた。レギオンとは「多数の軍団」を意味しているからである。ただし「マルコによる福音書」によれば、多数の悪霊は多数者に取り憑くのではなく、一人の男に取り憑くという。一人の男に多数が取り憑くこと、これはこの男が村人の身代わりの山羊であることを意味している。こうして村人はすべての災いを彼に帰せ、彼の狂気の叫びは供犠の叫びと化すことになる。その叫びは湖畔の地ゲラサから波に反響し、その「波音」は遠く「アイランドの声」となって聖者の「心の核心を貫いた」だろう。かつてゲラサの叫びをガリラヤ湖畔で聞いたイエスは、ゲラサ人にとっての異邦人として「舟を漕いで」、向こう岸に渡り内なる巡礼を始めた。外国人の奴隷であった聖パトリックもまた湖に船を漕ぎだし、怪物レギオンと対峙し、囚われた男の身代わり、緑の殉教を始める。アイランドの魂、その心の核心に響く波音には、ダーグ湖島の蜜蜂の巣で供される緑の殉教者、聖パトリックのエコーがあることをこの詩は密かに伝える。

「まえがき」と「序」だけで 100 頁を超える、カントやヘーゲルの哲学書を彷彿とさせるこの大著は、「近代の合理性そのものを否定するアイランド的思考の問題」をテーマに掲げるが、著者のそれへの接近法は奇抜である。「周縁にしか宿りえない力」をフルに活用して、アイランド、あるいは西洋の研究者があまり注目してこなかった事実あるいは史実を抉り出し、それらを絶妙につなぎ合わせていくというものだ。この「周縁にしか宿りえない力」は、「自己の身体に刻印された自己のしるし（自己記憶）によって、自己と非自己を認識・識別する作用、すなわち身体全体の主体を宿す唯一の細胞」である「免疫」がもっている。体内の「神経系システムとは無縁に、自己完結した固有の作用によって直接、自己を認識できる免疫細胞」は、「まなざしの認識法の最大の死角」たる自己認識を獲得する装置として最適だというのだ。これを著者は「免疫の詩学」と名付け、これを使って「聖パトリックの穴」に象徴される「煉獄」とそれにまつわる事象の解明を試みる。つまり著者は、ヨーロッパの極西の国アイランドのそのまた極西、すなわち最周縁に位置するダーグ湖のステーション・アイランドにある聖パトリックの煉獄こそ、アイランドとヨーロッパの文化的相貌を浮き彫りにする最良の補助線と見るのである。

本書でも言及されているグリーンブラットらはかつて「新歴史主義」とも呼ばれた「文化の詩学」なるものを提唱したが、そのモットーは「すべてを／常に歴史化せよ」であった。それをもじっていえば、「免疫の詩学」のモットーは「すべてを周縁化せよ／周縁から見よ」とでもなるだろうか。こうした手法は新奇なものではないが、本書の特異性は、テキストのわずかな揺らぎ、あるいは不自然さを見逃さず、周縁＝細部に隠された意味を探ることから見えてくる景色を、博覧強記を駆使して意外のアナロジーと化し、それをこれまた意外の連想によってつないでいて、出発点からは思いもつかぬような地点に読者を連れて行く点にある。その到達点に同意するかどうかはもちろん読者に委ねられているが、

その道行きのあざやかさ、時には強引さは、力技と呼ぶしかない。

こうした試みは手法そのものが有効でなければ成立しない。しかし本書は、その手法の有効性はその疑問が解明できたときにはじめて明らかになるという、一種の循環的な構造をもっている。「まえがき」と「序」が破格に長いのはこの弊を避けるためであろう。ここでの手法の有効性の証明はかなり丁寧で、おおむね理解できるが、それでもやはりそれが本当に納得できるのは、著者が掲げるテーマがうまく解きほぐされたときまで待たねばならない。例えば第二章「煉獄のシンデレラ」で著者は、福音書の「マタイ」にのみ出てくる4人の女性に注目し、これら「タブーの女たち」の「漂白は周縁である外からコミュニティの内部に向かって求心化されていく〈エクトライの巡礼〉」だという。旧約の記者たちは彼女たちの人生を「運命の赤い糸（紐）」と記しており、「その糸を次の女へと次々に手渡していくことによってアリアドネの一本の糸が完成することが暗示されている」という。アリアドネの糸はミノスの迷宮に繋がりと、その迷宮からの帰還は死からの再生を意味するので、彼女たちの巡礼の軌道はケルト的煉獄巡礼のそれと響きあうという。この迷宮＝洞窟の象徴である「鶴の舞」の鶴は一本足で立つことから、この舞は「シンデレラの舞」すなわち「救済の一点に向かって求心的に旋回するエクトライとしての煉獄巡礼のよう」で、「この同じ舞を人生において象徴的に舞った者が4人の女たち」だとするのである。著者が「ミドラッシュ」すなわち「〈隠しつつ開示されているもの〉に分け入る」と呼ぶこの手法の目的は、「煉獄巡礼の祖型的イメージ」を浮かび上がらせ、「迷宮から帰還するための糸」を完成させるためだという。しかし、「彼女たちの人生の舞いを〈おもぎす〉ことは、潜在的に存在する煉獄巡礼のあり方を顕在化させていく重要な作業であると同時に、免疫の詩学の方法を開示することにも繋がるはずである」（傍点浅井）という言葉に見られるように、著者は目的＝テーマの解明と手法＝免疫の詩学の有効性の証明を同時にやろうとしている。結末における解明が示されない限り手法そのものの有効性が宙づりにされるという本書のこの構造は、読者に良い意味でも悪い意味でもサスペンスを味わわせる。

もう一例は第3章「煉獄のアイルランド」における、「フィリオ・キュー論争」を使ってオリエントとオキシデントとの力関係の逆転を述べる節だ。西方教会の「父と子を同格に置く」教義を「逆正三角形」と視覚化し、その「形」は不安定だから「無限の生成と展開を宿命づけられた」とし、西方教会の最後の形態であるプロテスタントが布教に熱心なもの「おのずから説明がつく」という。著者は

この「論争」の根拠を西洋の帝国主義の根底に潜むオキシデント＝日没＝没落への不安と東洋への劣等感に見出し、この不安と劣等感を隠す最適な場所が煉獄巡礼の地、すなわちオキシデントの西の果てのダーク湖であったという意想外な論へと連結する。そして煉獄の誕生は東西の形勢を逆転するための西方の戦略だとする本章の主張の根幹を紡ぎだすのである。こうしたアナロジーと実態・実体とをアクロバティックに結び付ける手法は実に刺激的だが、読者に一抹の不安を覚えさせる。

しかしイエイツを扱う議論になると、この技法は強みを発揮する。例えば‘Man and the Echo’の読解においては、この詩をハムレットの有名な独白、さらにはナルキッソス神話と結びつけ、そこに詩人自身の「詩的言語の内に潜むナルシズム」への懺悔を読み取る。このナルシズムは「殉教のヒロイズム」であり、詩人の罪であると同時に「アイルランドの実存的生に巣くう罪」だとの見方は独創的かつ秀逸である。あるいは「ビザンティウム」「彫像」「揺れ動く」に共通する指示対象をもたない「謎の『それ』」に注目し、これがすべて「煉獄」のイメージに結びついているという。最初の詩では、「それ」は「死中の生、生中の死」すなわち「死と生の狭間に立つ『超人』的な存在」だが、これは「ミイラ」のイメージによってスフィンクスに導かれ、さらに「ミイラ布にくるまれたハデスの糸巻き」を描き、それを「人か影か……」と「ファンタズマゴリア」的に提示することによって、古代エジプト的でも古代ギリシア的でもない聖パトリックの煉獄の穴のイメージに接近しているという。イエイツがこうした表現をとった理由は、「殉教のヒロイズムと供犠の混同のなかにアイルランドの再生を阻む病理」を見、「パトリック・ピアスに体现される1916年の復活祭蜂起に見られる武力による殉教のヒロイズム」を否定するためだとする。そしてイエイツは、「真の供犠」すなわち「アイルランドの理想」を「『ケルズの書』を生んだA. D. 6～8世紀におけるアイルランド修道会がヨーロッパの歴史に影響を与えた」「古代アイルランド」に求め、「このアイルランドの黄金時代が回帰、到来すると予兆」していると結論している。これもユニークかつ力強い議論で、イエイツのナショナリズムについての新たな視角を詩の中から見事に掬い上げている。

著者は「供犠」をイエイツの章の副題に入れ、本書全体のキーワードの一つとしているが、それはイエイツが「アイルランドこそヨーロッパにおける知の供犠の源泉」、「ヨーロッパ共同体をしるしづける文化の主体」と見たことを示すため、それが例えば「揺れ動く」における謎めいた詩句「蜜蜂の巣」に象徴され

ているという。もしこれが解明できれば、今日の文化学の最大の盲点と氏が考える「文化の主体の問題」に一つのモデルを提供し、文化学に革命をもたらせるかもしれないという。著者はこの謎の根底に、先に触れたオリエントに対する劣等感にさいなまれたオキシデントを見る。「ヨーロッパ」はなんとかこの関係を逆転するが、アイルランドだけは別の道、「緑の殉教」という自己追放・自己認識の道を取った。これは先に見た「アイルランドがヨーロッパの知の供犠の源泉」であることを暗示するが、この供犠の象徴が聖パトリックの煉獄の穴である。しかしこの穴はケルブが炎の剣をもって守っていた。イエイツはこれを突破し、穴に入ってその秘儀を解くために仮面の詩法を生み出したが、その結果わかったのは、ケルブの炎はわれわれ自身が生み出した自己呵責の炎であった。その炎の中には供犠の身体が横たわり、その中心には蜜蜂が巣を作っていたが、その蜜こそ「世の初めから隠されていること」＝供犠によって生じた愛であった。これが「蜜蜂の巣」の謎解きである。

こうした議論から窺われるように、本書の主張の根幹は、アイルランドの「周縁」化は、オリエントに対する劣等感にさいなまれたオキシデントが取った「コペルニクス的転回」の産物であり、アイルランドは本来その主体であったというもので、それを旧約の女性たちやハムレット、イエイツらを通して実証しようとするのであるが、これを実証したい主体は誰だろう？ アイルランド人イエイツの企図なら話は分かるが、著者自身の企図であるとすれば、その意図は何か？ それは一つしかないだろう。先ほど述べた、文化学に革命をもたらすことである。著者はそれを実行すべく、結びの章で免疫の詩学を日本文化へ適用して、鎌倉の社寺に潜む「負の記憶」を掘り起こし、そのアジール（無縁）性を突き止め、それを煉獄のアジール性と連結しようとする。そのために著者は能の『景清』から桑田佳祐から漱石まで動員するのだが、その発想と視角は本書の「野心」を鮮やかに体现している。

本書は、ジャック・ル・ゴフの「煉獄の名詞化（＝誕生）」という知見に着目し、これをオキシデントの再生の起爆剤にしたのではないかと〈おもごし〉、それを周縁（性）に結びつけることによって、周縁にしかない力、そして中心と周縁の間に働くダイナミクスの様態を目くるめくばかりに展開する。本文中の「ファンタズマゴリア」という言葉を借りるなら、この大著は「世界をファンタズマゴリアとして読む試み」ともいえるだろう。その試みの結実として、この書自体が一つの巨大なファンタズマゴリアになりおおせている。

杉山寿美子

『モード・ゴン 1866-1953 — アイルランドのジャンヌ・ダルク』

（国書刊行会、2015 年、380 頁）

佐藤容子

本書は、W. B. イェイツの詩神（ミューズ）として知られ、また「アイルランドのジャンヌ・ダルク」とも称された女性革命家、モード・ゴン（Maud Gonne, 1866-1953）の生涯をたどる伝記である。モード・ゴンはイェイツの数多くの詩で歌われるほか、レイディ・グレゴリーとの共作であるイェイツの劇作『キャスリーン・ニ・フーリハン』（*Cathleen Ni Houlihan*, 1902 年初演）でタイトル・ロールを演じ、圧政と搾取のなかから蘇るアイルランドそのものの化身ともなった絶世の美女であり、伝説的な存在である。本書は、伝説のなかに分け入り、「事実」を丹念に紡ぎあわせることで、モード・ゴンの生涯における活動の全容を、独立をめざすアイルランド闘争史を背景に鮮明に浮かび上がらせている。

長じて「アイリッシュ」を名乗るようになったモード・ゴンであるが、出自から言えば、必ずしも生粋の「アイルランド人」ではなく、彼女はアイルランドの基地に配属になった英軍大尉トマス・ゴンの娘である。イェイツと出会ったときには、モードは既にパリ在住のフランス人政治ジャーナリスト、リュシアン・ミルヴォアの愛人であった。が、それは秘されていた。ミルヴォアは、ナポレオン崇拝者の一家の出で反英、アルザス・ロレーヌ地方の奪還のために闘っており、共に大英帝国を敵とする同志として、モードには、「アイルランドのジャンヌ・ダルク」となってアイルランドを解放する道を示唆したという。モードは、アイルランドを祖国と定め、自ら伝説となる人生を選んだ。

当時、アイルランドには、女性に会員資格を認める政治運動組織は一つもなかった。その中にあって、モード・ゴンは、素晴らしい演説力と勇敢な行動力と他者を魅了し協力を引き出す才能により、いわば「フリーランス」の立場で運動に身を投じていくのである。彼女の立場は、アイルランドの自由と独立のためには、武力闘争も辞さないとするものであった。ドニゴールの小作人の追い立ての実情をフランスへの講演旅行でヨーロッパ諸国に向けて訴え、アーサー・グリフィスがウィリアム・ルーニーと共に、1899 年に立ち上げた急進的ナショナル

ムの週刊紙『ユナイティッド・アイリッシュマン』に財政援助を行った。1900年には、女性たちからなる愛国組織「エリンの娘たち」（インギニ・ナ・ヘーリヤン）を設立、会長の座についた。1903年、ジョン・マックブライド少佐との結婚に際してモードはカトリックに改宗、マックブライドは1916年の「復活祭蜂起」に加わり処刑され、「復活祭未亡人」となったモードは、やがて罪状不明のまま逮捕されロンドンで獄中生活を送る。1922年のアイルランド自由国誕生後の内戦時においては、自らを幹事、シャーロット・デスパードを会長として「囚人擁護女性同盟」を結成して、政治的・人道的キャンペーンを続けた。

著者は、アイルランド史またアイルランド文学における「モード・ゴン」という伝説的な存在にアプローチする方法として、彼女の言動に判断を加えたり、著者の私的な意見とくに心情を絡めて記述することを極力控えて、資料からなる「事実」を追うことに徹したと述べる。モード・ゴンを包む伝説や彼女自身が張り巡らした虚構が交錯するなかで、それ以外に彼女の人生の真実に迫る方法はない、とする著者の方法は的を射たものと言える。もっとも、そのような方法を取りつつも、著者は、対象に控えめながら常に暖かく寄り添い、毀誉褒貶の渦巻くなか、その言動に多くの謎を残しながらも、生涯「不正義」に憤り、勇敢に時代と切り結ぼうとした女性の精神の輝きを随所に伝えている。

モード・ゴンの人生について伝える書物としては、彼女自身が1938年に発表した自伝『女王の僕』（*A Servant of the Queen*）があるが、この自伝は、モードが70代に入ってから自身の半生について書いたもので、幼くして母と死別した場面から始まり、周囲の反対を押し切って、マックブライドと結婚する直前までの出来事が描かれている。どのような自伝も「自伝」というジャンルの制約のもとで書かれ、すべてを客観的に伝えるものではないが、特にモード・ゴンの場合は、時代のジェンダーの規範を越境する生き方を選んだがため、家族への配慮から、公刊にあたっては伏せざるをえない事実をかかえていた。

歴史家のロイ・フォスターは、日付や場所の不正確さに関して、モード・ゴンは悪名高いと述べている。最も興味深い例の一つは、1889年1月30日、ロンドンでイエイツがモードと初めて出会い、永遠の記憶に留めた日と場所について、モードの自伝の記述が齟齬をきたしている点であろう。客観的記録という観点からみてモードの叙述の信頼性が薄いということについては、内戦時にモード・ゴン宅も家宅搜索を受けて資料類を焼失してしまった、という事実も考慮すべきと思われるが、彼女自身、己の人生を神秘化して捉えかえそうとする姿勢が、自伝

『女王の僕』には窺える。

アイルランドの女性政治活動家としてのモード・ゴンの本格的な伝記は、マーガレット・ウォードが著している（Margaret Ward, *Maud Gonne: A Life*. London: Pandora, 1990）。本書は、ウォードの著作の章立てを大筋で踏襲し、モード・ゴンの生涯を記述しているが、その一方でウォードの著作以降に刊行された第一次資料を存分に駆使し、新たな角度から事実の光をあてることによって、彼女の人生の真実に肉薄している。

新たな第一次資料とは、モード・ゴンの孫娘であるアナ・マックブライド・ホワイトによって提供・編纂された三つの書簡集である。ひとつはイエイツとモード・ゴンの間に交わされた書簡であり、それに加えて、アイルランド文芸復興運動を支援したニューヨーク在住の弁護士であるアイリッシュ・アメリカン、ジョン・クインとモードとの間に交わされた書簡、またモードの「養女」（実際は実子）イズールトがイエイツとエズラ・パウンドに送った手紙がある。なかでもイエイツとモードの書簡集（*The Gonne-Yeats Letters 1893-1938: Always Your Friend*. Ed. Anna MacBride White and A. Norman Jeffares. London: Hutchinson, 1992）は特に重要である。本書は、この新たに刊行された書簡集に基づきつつ、反英「ボーア戦争のヒーロー」であるマックブライドとの結婚が破綻し、離婚裁判となったモードの「不公平な戦い」と呼ぶ苦悩の底知れぬ深さ、そしてイエイツとの霊的合体を強く祈るモードの複雑なメンタリティを如実に描き出している。

モード・ゴンは「サイキック」(psychic)と呼ばれる一人、と著者は記しているが、このことは、彼女と、オカルト研究に心血を注いだイエイツとの不思議な50年に渡る交流の鍵となるであろう。また一方で、自己分析を嫌い、自らを行動の人と規定するモードの政治活動の底流にある「アイルランドの霊力」に頼る側面に通じていくと思われる。著者は、そこに彼女の活動に潜在する危うさを見て、彼女を行動へ駆る根源を突いて、イエイツが残した二つのフレーズ―憐憫に心狂い、憐憫の盲目的高貴さ―に通ずるものでもある、と喝破している。本書は、豊富な資料を駆使してモード・ゴンの一貫性と多面性に迫るものであり、イエイツ研究、女性史研究、アイルランド研究などの重要な道案内となることであろう。

アイルランド文学研究書誌 2015.10 ～ 2016.9

<研究書・翻訳>

Samuel Beckett

- 多木 陽介
『〈不〉可視の監獄—サミュエル・ベケットの芸術と歴史』(水声社) 2016. 5

Lafcadio Hearn

- 西川 盛雄
『ラフカディオ・ハーンの魅力』(新宿書房) 2016. 2

James Joyce

- 金井 嘉彦／吉川 信(編著)
『ジョイスの罫—「ダブリナーズ」に嵌る方法』(言叢社) 2016. 2
金田 法子
『ジェイムズ・ジョイス』(人と思想)(清水書院) 2016. 6

その他・アイルランド文学全般

- 浅井 雅志
『持続するエピソード—文学に表象されたエロティシズムと霊性』(松柏社) 2016. 3
勝田 俊輔／高神 信一(編)
『アイルランド大飢饉—ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』(刀水書房) 2016. 2
桑島 秀樹
『生と死のケルト美学—アイルランド映画に読むヨーロッパ文化の古層』(法政大学出版局) 2016. 9

- 伊達 直之／堀 真理子／佐藤 亨／外岡 尚美
『戦争・詩的想像力・倫理—アイルランド内戦、核戦争、北アイルランド紛争、イラク戦争』(青山学院大学総合研究所叢書)(水声社) 2016. 3
前波 清一
『現代アイルランド演劇入門—「現実と喜び」のドラマ』(彩流社) 2016. 9
結城英雄／夏目康子(編)
『アイリッシュ・アメリカンの文化を読む』(水声社) 2016. 6

<研究論文>

W. B. Yeats

- 伊里 松俊
「イエイツの想像力とロマン派の父」
鈴木俊次ほか編『英米文学における父の諸変奏—安田章一郎先生百寿記念論集』(英宝社)所収 2016. 3
海老澤邦江
「ことばの力と可能性：文学とプロパガンダの境界—W. B. イエイツの'Easter 1916'とバラッド'The Men of Easter Week'」
『江戸川大学語学教育研究所紀要』vol. 14(江戸川大学) pp. 13-22. 2016. 3
小堀 隆司
「幻想のアイルランドより—詩人イエイツの場合」
『城西大学語学教育センター研究年報』vol. 9(城西大学) pp. 31-65. 2015
Yoko Sato
「Fenollosa's Manuscript of *Kikazu Zato*: The Japanese Source of Yeats's *The Cat and the Moon*」
Journal of Irish Studies, vol. 30 (IASIL JAPAN) pp. 27-38. 2015
原田美知子
「御しがたい瘋癲老女—W. B. イエイツの詩における『古い』」
『櫻美林世界文学』vol. 12(桜美林大学世界文学会) pp. 45-54. 2016. 3

星野恵里子

「イエイツがウィリアム・ブレイクの『病める薔薇』を無視する理由」

『子ども保育学・教育学研究』 vol. 3 (東京未来大学こども心理学部) pp. 35-39. 2016. 3

真鍋 晶子

「パウンド、イエイツ、ヘミングウェイの日本との邂逅―狂言をめぐる」

『東京女子大学比較文化研究所紀要』 vol. 77 (東京女子大学) pp. 51-68. 2016

山内 正一

「ロマン派の〈鳥〉のゆくえ―ワーズワス、キーツ、ハーディ、イエイツ」

『福岡大学人文論叢』 vol. 47, no. 4 (福岡大学) pp. 1261-1307. 2016. 3

山崎 弘行

「イエイツとムアの対立の深層」

中国四国イギリス・ロマン派学会編『詩的言語のアスペクト―ロマン派を超えて』(松柏社) 所収
2016. 6

Samuel Beckett

菊池 慶子

「孤独の芸術家―サミュエル・ベケットの絵画論における『見ないこと』について」

『表象・メディア研究』 vol. 6 (早稲田表象・メディア論学会) pp. 31-49. 2016

Seamus Heaney

鈴木 哲也

「北アイルランド紛争と詩的想像力―シェイマス・ヒーニーの『詩の矯正』がはらむ問題」

『いすみあ』 vol. 8 (明治大学大学院教養デザイン研究科) pp. 135-98. 2016. 3

Tomoaki Suwa

‘An Initiation into the Other: Seamus Heaney’s Reception of W. B. Yeats Reconsidered’

Journal of Irish Studies, vol. 30 (IASIL JAPAN) pp. 49-59. 2015

藤本 黎時

「シェーマス・ヒーニーの詩における時空の超越」

中国四国イギリス・ロマン派学会編『詩的言語のアスペクト―ロマン派を超えて』(松柏社) 所収
2016. 6

Lafcadio Hearn

小林亜紀子

「岡倉覚三とラフカディオ・ハーン―1906年の岡倉による二つのバーン論を手掛かりとして」

『比較文化研究』 vol. 118 (日本比較文化学会) pp. 75-90. 2015. 10

中田 賢次

「ラフカディオ・ハーンの怪談―『安藝之助の夢』 THE DREAM OF AKINOSUKE を読む (5)」

『八雲』 vol. 28 (小泉八雲顕彰会) pp. 81-91. 2016

舞 さつき

「ラフカディオ・ハーンにおける『人種』表象」

『ポストコロニアル・フォーメーションズ』 vol. 11 (大阪大学大学院言語文化研究科)
2016

三成 清香

「ラフカディオ・ハーンと再話、そして女性―『葬られたる秘密』と『紫雲たな引密夫の玉章』を手がかりとして」

『比較文化研究』 vol. 118 (日本比較文化学会) pp. 249-261. 2015. 10

宮原 牧子

「ラフカディオ・ハーンとロセッティのバラッド詩―影なす世界の影なる亡霊たち」

『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』 vol. 11 (筑紫女学園) pp. 43-55. 2016

村松 眞一

「マッシュー・アーノルドからラフカディオ・ハーンへ」

『八雲』 vol. 28 (小泉八雲顕彰会) pp. 21-23. 2016

James Joyce

- 秋山 義典
「モダン・ビルディングスロマンの兆候—ジェイムズ・ジョイス『若い芸術家の肖像』」
『東京都市大学共通教育部紀要』 vol. 9（東京都市大学） pp. 37-45. 2016
- 大島由紀夫
「ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』第3部第3章の概要（3）（p. 527 ℓ.3
～ p. 554 ℓ.10）」
『東京海洋大学研究報告』 vol. 12（東京海洋大学） pp. 12-27. 2016. 2
- 小田井勝彦
「ジョイス文学の原点としての『小さな雲』」
『専修人文論集』 vol. 97（専修大学） pp. 319-334. 2015. 11
- 片岡 一延
「ジェイムズジョイス *Dubliners* における麻痺 (paralysis) について」
『研究紀要』 vol. 10（白鳳女子短期大学） pp. 31-40. 2015
- 金井 嘉彦
「ジョイスとムアのインターテクスチュアリティ—(1) 二つの『西への旅』」
『言語文化』 vol. 52（一橋大学語学研究室） pp. 49-68. 2015
- 小林 広直
「ジェイムズ・ジョイス『若き日の芸術家の肖像』における歴史意識の変遷」
『英文学』 vol. 102（早稲田大学英文学会） pp. 13-28. 2016. 3
- 「隠された／埋葬された夭折の革命家—ジェイムズ・ジョイス『若き日の芸術家の肖像』におけるウルフ・トーンについて」
『新英米文学研究』 vol. 47, no. 1（新英米文学会） pp. 25-27. 2016
- 坂井竜太郎
「精神分析的視点から読む『肖像』—物語の終わりと享楽のエクリチュール」
『新英米文学研究』 vol. 47, no. 1（新英米文学会） pp. 15-24. 2016
- 高橋 大樹
「研究ノート ジェイムズ・ジョイスと社会主義についての試論—『若い芸術家の肖像』第五章を中心に」
『戸板女子短期大学研究年報』 vol. 58（戸板女子短期大学） pp. 19-25. 2015

福岡真知子

- 「James Joyce の ‘An Encounter’ における子どもの遊びと発達」
『こども教育宝仙大学紀要』 vol. 7（こども教育宝仙大学） pp. 35-46. 2016. 3
- 南谷 奉良
「躍動する生と動物たちの地獄—ジェイムズ・ジョイスの『ステイーヴン・ヒーロー』にみる近代と生体解剖」
『新英米文学研究』 vol. 47, no. 1（新英米文学会） pp. 4-14. 2016
- 宮内 泰彦
「J. ジョイス『ユリシーズ』と T. S. エリオット『荒地』の神話的手法—はるかティレシアスの声は荒地に木霊（こだま）す」
『聖徳大学言語文化研究所論叢』 vol. 23（聖徳大学） pp. 269-292. 2015
- 結城 英雄
「アイルランドの文学的伝統とジェイムズ・ジョイス (3)」
『法政大学文学部紀要』 vol. 72（法政大学） pp. 77-88. 2015
- Devendra Koirala
‘Money as a Character in “Araby”, a Short Story by James Joyce’
『鶴見英語英米文学研究』 vol. 17（鶴見大学） pp. 25-33. 2016. 3

Oscar Wilde

- 伊藤 龍哉
「創造への出発点—オスカー・ワイルドの身振り」
『文芸研究：明治大学文学部紀要』 vol. 129（明治大学文芸研究会） pp. 286-275. 2016
- 貝嶋 崇
‘Sidonia and Oscar Wilde’
『比治山大学紀要』 vol. 22（比治山大学） pp. 31-36. 2016
- Yukiko Kinoshita
‘Modernity and Modernism in Oscar Wilde’s “The Canterville Ghost: A Hylo-Idealistic Romance”: Aesthetic Reconciliation between Romanticism and Realism’
Tabard vol. 30（神戸女子大学英文学会） pp. 3-20. 2015

日本イエイツ協会 第51回大会プログラム
 <イエイツ生誕150周年>
 2015年11月7日(土)・8日(日)
 会場：西南学院大学

◆第1日 11月7日(土曜日) 西南学院大学Ⅱ－404(2号館4階)

9:30～10:30 受付

10:30～10:50 【挨拶】
 日本イエイツ協会会長 奥田 良二 氏
 西南学院大学文学部長 和田 光昌 氏
 アイルランド大使 Anne Barrington 氏
 司会 海老澤邦江 氏

10:50～12:10 【講演】
 『ジョン・シャーマン』とイエイツの内なるスライゴー
 司会 榎木 伸明 氏
 奥田 良二 氏

12:15～13:20 昼食(7階ラウンジ)
 【総会】 司会 柿原 妙子 氏
 議長 江崎 義彦 氏

13:20～14:20 【研究発表】
 変容のヴィジョン—イエイツ、シング、ジョイス
 司会 坂内 太 氏
 萩原 真一 氏

第一次世界大戦とアイルランド—イエイツの戦争詩再考
 司会 荒木 映子 氏
 鈴木 哲也 氏

14:30～17:30 【シンポジウム】
 イエイツと1930年代—オーデン・グループを参照枠として
 司会・構成 浅井 雅志 氏
 発題者 山崎 弘行 氏
 辻 昌宏 氏

18:00～19:30 【情報交換会】(於 西南クロスプラザ2階ゲストルーム)
 司会 三宅 敦子 氏

◆第2日 11月8日(日曜日) 西南学院大学Ⅱ－404(2号館4階)

10:00～10:30 受付

10:30～12:00 【研究発表】
 イエイツと聴衆
 —‘Three Songs to the Same Tune’の改作についての考察
 西谷茉莉子 氏
 司会 伊達 恵理 氏

A Vision における「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ」
 伊東 裕起 氏
 司会 小堀 隆司 氏

「イニスフリー湖島」に描かれた<透かし絵>
 —イエイツと聖パトリックの煉獄の穴
 木原 誠 氏
 司会 松村 賢一 氏

12:00～13:00 昼食

13:00～15:30 【ワークショップ】
 イエイツのナショナリズムを問い直す
 司会・構成 松田 誠思 氏
 発題者 諏訪 友亮 氏
 木原 謙一 氏

15:30 【閉会の辞】
 逢坂 収 氏

編 集 後 記

◆2015年はイエイツ生誕150周年でした。『イエイツ研究』第47号はその記念号という位置づけです。力のこもった寄稿・投稿をいただき、日本におけるYeats 2015の掉尾を飾るものになったかと思います。ことに、寄稿論文や書評の懇望にお応えくださった先生方に心より御礼申し上げます。

◆今号への投稿は、研究論文が3本、研究ノートが1本あり、審査の結果、研究論文1本、研究ノート1本を掲載可としました。この審査は、萩原前編集委員長のもとで整えられた『『イエイツ研究』査読に関する編集委員会内規』に基づいて厳正に行われています。執筆者名等を伏せた投稿論文を、編集委員全員で、3つの観点——①「新規性」（主題・内容にどの程度の独創性があるか）、②「構合力」（主題・内容が簡潔・明瞭な表現によって論理的に記述されているか）、③「信頼度」（然るべき先行研究や文献等を適切に踏まえているか）——から査読を行い、各自の判定とその理由およびコメントを記した詳細な査読結果報告書を編集委員会に提出し、それに基づいて審議を行い、掲載の可否を決定しました。

◆『イエイツ研究』における「研究ノート」の内容は、(a)「研究論文」に至る前の萌芽的・中間的段階の報告、あるいは先駆的研究の課題提起、(b)研究動向や文学動向を展望し、その整理や研究上の提言を記したもの、(c)研究の進展に資するため、新発見の資料・史料等を紹介したもの、のいずれかに該当するものです。また、「研究ノート」を十分に発展させて「研究論文」として投稿可能です。

◆小堀先生と海老澤先生のご協力によって、国立国会図書館への『イエイツ研究』の納本が進みました（まだ若干の欠号がありますが）。これによって掲載論文・記事がCiNii等で検索しやすくなったと思います。

◆この47号の刊行をもって、今期の編集委員会は任期満了となります。編集委員の池田寛子氏、石川隆士氏、岩田美喜氏、伊達直之氏には、それぞれ校務等できわめてご多忙のなか、査読という重い務めを、誠実かつ研究への熱意をこめて果たしてくださったことに心より御礼申し上げます。

（編集委員長 三好みゆき）

『イエイツ研究』投稿規定

【資 格】 投稿者は日本イエイツ協会会員であることを原則とする。

【執筆要領】

1 原稿について

- 1) W. B. イエイツとその周辺の文学に関する未発表のものとする。ただし、日本イエイツ協会の大会などにおける口頭発表を原稿とした場合、その旨注記すれば可とする。
- 2) 和文の場合は横書きとし、1行40字×30行で設定したものを1頁として換算した上で、「論文」は「13頁＋10行」以内（必ず300語程度の英文シノプシスを添える）、「研究ノート」は「3頁＋10行」以内、「書評」は「2頁＋20行」以内とする。また大会におけるシンポジウム／ワークショップの「報告」ならびに「研究発表要旨」の提出を「2頁＋20行」以内で求める。いずれの場合も、注および改行や引用等によって生じるスペースも制限頁内に含めることとする。
- 3) 和文の場合、英文の題名およびローマ字書きの投稿者名を添える。
- 4) 英文の場合、論文は注を含めて6,000語以内とする。シノプシスは不要。
- 5) 英語を母語としない投稿者の英文シノプシスおよび英語の論文については、投稿前にネイティブ・スピーカーによる原稿のチェックを受けることが望ましい。
- 6) 原稿はすべてMS Word ファイル形式あるいはリッチテキスト形式で保存し、電子メール添付として提出する。フォントは、原則としてMS 明朝を使用すること。数字は半角を使用すること。

2 書式について

- 1) 和文原稿の句読点は、読点（、）と句点（。）を用いる。
- 2) 年号表記はできるだけ西暦に統一し、元号を併記する場合は下記の通りとする。

〔例〕 2001年（平成13年）

- 3) 外国の人名、地名、書名等は、原則として初出の際は原語で表記する。

日本イエイツ協会役員名簿（2014年12月～2016年11月）

会長	奥田 良二
事務局長	海老澤邦江
会計	伊達 恵理
編集委員長	三好みゆき
ウェブ編集委員長	岩田 美喜

委員（50音順）

浅井 雅志	池田 寛子（編集委員）	石川 隆士（編集委員）
岩田 美喜（編集委員）	岩坪 友子（事務局）	海老澤邦江
奥田 良二	木原 謙一	小堀 隆司（ウェブ編集委員）
佐藤 容子	伊達 恵理	伊達 直之（編集委員）
虎岩 正純	中尾まさみ	萩原 真一
真鍋 晶子	三神 弘子	三好みゆき
		山崎 弘行
		松田 誠思
		松村 賢一
		薦田 嘉人
		谷川 冬二

ウェブ編集特別担当（委員以外）

諏訪 友亮 柿原 妙子

イエイツ研究 第47号

2016年12月31日印刷 2016年12月31日発行

発行者 奥田 良二

発行所 日本イエイツ協会事務局
〒270-0198 千葉県流山市駒木474
江戸川大学メディアコミュニケーション学部
情報文化学科 海老澤研究室内
TEL: 04-7152-9923 / FAX: 04-7153-5904

編集委員 三好みゆき、池田 寛子、石川 隆士
岩田 美喜、伊達 直之

印刷所 株式会社シンセイドウ
〒230-0011 神奈川県横浜市鶴見区上末吉1-13-15
TEL: 045-571-2761 / FAX: 045-571-6592